第36回

人物を中心とした

福岡県教育郷土史

広渡正利

学業院と名島学校

最近における急激な宅地造成ブームや新幹線鉄道・九州縦貫自動車道の建設に伴って、特別史跡大宰府跡はここ数年脚光を浴びている。

そしていまや都府楼跡周辺の広大な地域が文化財保存の立場から発掘調査が行なわれている。拡充指定され、文化財保護法によって「大王（オオキミ）の遠（トオ）の御廷（ミカド）」と称され、九州の政治・経済およびわが国外交・軍事をつかさどる大宰府庁が設置されたのは天智天皇のころで、それから六十年後、天平の時代には大伴旅人を中心とする万葉における筑紫歌壇の人々が次々と府官となって赴任してきている。当時この大宰府には吉備真備によって創建されたといわれる学業院（ガッコウイン）があった。

吉備真備は霊亀三年（七一七）唐に留学し滞在すること二十年、経史を修め諸芸に通じ、阿倍仲麿と共に名声を彼の地に挙げた。孝謙天皇天平勝宝四年遣唐副使として唐に赴き、帰朝後大宰大弐となり、上書して怡土（イト）城を築いた。累進して従二位右大臣となったが宝亀六年（七七五）に歿した。真備が大宰大弐として赴任したのは天平勝宝六年（七五四）である。現在史跡学業院跡は、観世音寺と都府楼跡との中間にある。当時は相当の地域を占めていたと思われるがその構造は今のところ知るよしもない。延喜式によると「大宰府大学ニ準ズ云々」とあり、学業院は京師の大学に準じて特設されたもので、大宰府官人の子弟や選ばれた国学生等が教育されたところであろう。ともあれ当時その学才を称えられた真備が大宰府在任期

間が十年の長きに亘っているから、学業院にもおのずから彼の力が大いにのび、その学業を興隆させる上に大いに寄与したことと想像される。

降って天正十五年（一五八七）小早川隆景が筑前・筑後・肥前の一部を領し、名島（福岡市）に居城を構えた。隆景は戦乱が永く続き、学問がすたれ、人心も荒廃してゆくさまをなげき、下野の足利学校の制度に倣って、居城を置いた名島に学校を創建したのである。そして孔子の像をまつり古式にしたがって開学式を行ない多くの人々の学問研究を勧めた。この場合学ぶものが武士だけか、それとも庶民を含んでいたものか詳かでない。

このことについて甲子夜話には「我国以前宇内兵乱打続き儒教文籍は地を払て過し時小早川隆景名島において学校を設立せしと云診きことなり」と記している。また、貝原益軒の著した「小早川隆景行状」には「慶長元年足利学校の玄俑軒を招き、孔子堂を立て学問所を作り、若き輩に勧学せしめらる」とあって、若い家臣の教育に意を注いだことを明らかにしている。当時の学校としては珍らしいものであり、隆景の卓見を示すものといえるであろう。ただ設立の時期、その後の推移等について現在全く知ることができないのは残念である。

隆景はその後文禄の役に出陣、碧蹄館に大功を立て、のち秀吉の大老として重用されたが、病気を理由に備後三原に隠退した。隆景の名島における治政の期間は短かかったが、筥崎宮楼門や大宰府天満宮拝殿など隆景の寄進にかかる建造物が現存しており、その仁政は人々から敬慕されている。

藩政時代の教育

近世の初頭、福岡県下の各地、筑前・筑後・豊前の三国は、関ケ原合戦後の大名改易によって領主が入れかわり、黒田長政（筑前五二万石）・田中吉政（筑後三三万石）・細川忠興（豊前三九万石）が領主として封ぜられた。その後、筑後は有馬豊氏（久留米二一万石）と立花宗茂（柳川一二万石）の所領となり、豊前は寛永九年細川氏の肥後転封後、小笠原忠真（小倉一五万石）が入国し、各藩政が樹立した。そして各藩においてそれぞれの立地条件、武家の祖法にしたがって政治が行なわれ、教育もその国その藩においてそれぞれの立場をもって発達し普及していった。

福岡藩では早くから学者が重用され、学問の指導だけでなく、政治の面にもその才が用いられた。農学者宮崎安貞の登用、貝原益軒の物産研究、享保の財政困難に際しての亀井南冥の建策などはこれらの著例である。また筑後における文事教育の先覚者としては柳川藩の安東省庵がある。

藩士子弟の教育機関である藩校の開設については、各藩若干の遅速はあるが、福岡藩においては天明四年（一七八四）に甘棠館及び修猷館が、小倉藩では天明八年に思永館が、久留米藩では寛政八年（一七九六）に明善堂が、柳川藩では文政七年（一八二四）に伝習館が開創された。そして各藩において名称は異なるが（総裁・学頭・教授など）責任者として、甘棠館に亀井南冥、修猷館に竹田定良、秋月稽古館に原古処、思永館に石川剛、明善堂に樺島石梁、左右田尉九郎、伝習館に安東節庵が任命され、開設当初の藩校の運営に当

貝原益軒

たった。その後これらの藩校は明治四年（一八七一）の廃藩置県の改革により廃止された。

藩校に入学できるものは、藩士の子弟に限られていたが、寛政期以降の文運隆盛に伴い向学心にもえる民間の子弟を対象とする教育機関としての私塾の教育が各地において盛となった。これらの塾のうち著名なものは、儒学の塾に南冥・昭陽の亀井塾（福岡）、原古処の古処山堂（秋月）、村上仏山の水哉園（豊前）、恒遠醒窓の蔵春園（豊前）があり、また、国学塾に青柳種信の柳園社（福岡）、真木保臣の山梔窩（久留米）などがある。なお以上のほか維新前後に明治初等教育の先駆的活動にした塾のうち、尊王精神高揚を積極的に取上げた塾として、高場乱の空華堂（福岡）、小野原善言の塾、船曳鉄門の塾（三潴）、武田巌雄の泡来舎（三潴）、海妻甘蔵の己百斎（遠賀）があり、旧来の道徳心を養成することによって新時代に資そうとするものには、西田幹治郎の麗川塾（山門）、木屋右門の修文館（八女）などはその代表的なものである。

貝原益軒（一六三〇～一七一四）は、黒田家二代忠之、三代光之に仕え、明暦三年京都に遊学し、山崎闇斎・松永尺五・木下順庵等に学んだ。在学六年ののち寛文六年侍講となった。寛文十一年黒田家譜の編纂を命ぜられ、元禄十三年致仕して専心著述に従ったがなお月俸を給せられた。彼は朱子学派に属したが、朱子の糟粕に甘んぜず、幾多の点において他派の影響をうけ、殊に知行同一説を唱えその旗幟は鮮明である。また教育思想家としてはわが教育史上他の追随を許さず、その著自娯集・大疑録・慎思録は儒学徒としての思想をうかがうべく、黒田家譜・筑前続風土記は郷土研究の至宝である。五常訓・大和俗訓・養生訓・童子訓などは社会教育上益するところ多く、博物学史上にも花譜・薬譜・大和本草等の著書を以て重要な位置を占めている。また、その一族には篤学者が多く、末兄義質（楽軒）は宮崎安貞の農業全書を補筆し、附録一巻を著している。仲兄元端は儒者でその子可久、義質の子好古、常春もそれぞれ学究として聞え、益軒夫人東軒も才筆で益軒の業を助けている。

益軒の学風は、柴田成章（鳳山）・稲留希賢（又百）・鶴原韜（九阜）・櫛田漪（可瀬）・古野元軌・神屋享・竹田定直（通称助太夫号春庵）・末永景順（虚舟）等の門人につがれたが、とくに竹田氏が後世有力であった。

安東省庵（一六二二～一七〇一）は、世々柳川侯の藩士である。松永尺五、木下順庵に学びのち明の遺臣朱舜水を師とし、禄の半分を割いてこれを扶養した。この本情は舜水が孫の疏仁に与えた手紙に詳しいが、舜水に対する省庵の厚誼はひろく内外に伝えられると

ころである。この手紙の中で舜水は「こういう人はわが中原にも多くはない。どうか心に銘し骨に刻んで、世世忘れないでくれ」と書送っている。のち舜水は江戸に上り水戸光圀の賓師として手厚い待遇をうけたが、省庵との厚誼がつづいた。その著書に三忠伝・立花戦功録・省庵文集、君主の政治について献言した理学抄要・愚得集があり、日本史略を編して南朝の正統を説き扶桑史略・保元物語評・盛衰記抄語等史学の著がある。また経済方面には性理提要・大学私考・訓蒙要語などがある。その学説は儒道に源泉を究めようとする点において伊藤仁斎の古学派に近い。省庵は筑後の文事開拓の不利な地域にその萌芽を培った偉大な先覚者であるが、省庵以後は侗庵・仕学斎・閻庵・仮山・節庵と代々儒学を以て藩に仕え柳河儒学の主柱となった。

亀井南冥（一七四三～一八一四）は、早良郡姪浜の儒医聽因の子として生まれた。十四歳のとき、肥前の僧大潮の教をうけ、在学四年、宝暦中上京して富永独嘯庵の門に入り、居ること一年にして帰った。たまたま、韓使の相島接待のため、藩儒井上鶯庵に従って韓使と筆談応酬して詩文立処になり、韓使はその奇才に驚嘆したという。ここにおいて名声を得、安永七年藩主治之に抜擢され、士籍に列し累進して侍講となった。ついで天明四年東、西の藩校創建されるや西学甘棠館の総裁となった。しかし南冥の学風は朱子学を奉ずる東学修猷館の竹田派との間に反目を生じ、加えて南冥が当時早くも勤王の念を抱き、豪放な性格からしばしばそれら禁忌の言を外にあらわした事などが災し、寛政四年反対派に乗ぜられ職禄を没せられた。その後は長子昭陽が継いだが、寛政十年二月甘棠館は火災によって焼失したので遂に甘棠館は廃止された。

その後、南冥は昭陽とともに東唐人町に塾を開いたが、文化十一年三月居宅の火事に際し、不幸にも焚死した。しかし昭陽はなお屈せず西新町に塾を開いて教育に当たり、甘棠館の学風を塾教育にうつした。

同塾の学風は、徂徠学を中心とし古文辞学を研究するとともに、朱子学や仏教の思想をも抱擁研究した南冥の信念により、門弟達の自由な研究を奨励し、それぞれの長所を発揮させることに主眼がおかれていたので、門弟の中からは必ずしも師の学派にとどまらず、新しい研究分野を開拓し、また洋学に没頭するものも多くあらわれた。儒学を奉じた人の中にも、広瀬淡窓のようにさらに抱擁性を大きくし儒学を以て敬天の学とする人もあり、活動的な学者を生んだ。とくに後世の学問発達に貢献したのは次の人たちである。

南冥の門人には、江上源、山口豊（以上二人甘棠館訓導師）、牧園潴（伝習館教授）、原古処（秋月稽古館教授）、後藤主税、青木興勝（蘭学研究家）、戸次晁、広瀬淡窓（日田咸宜園創立者）、毛利空桑、内野元華（蘭学研究家）、伊藤常足（国学者）が有名で、昭陽の門人では、阪巻周太郎、上野友五郎、吉田元良、高場乱四人を昭陽門下の四天王と称し、その他広瀬旭荘（淡窓の弟）、徳永宥、吉田平陽（秋月藩校教授）等が聞えている。

亀井塾は南冥・昭陽のあと暢州にうけ継がれ、西日本における代表的な塾の名門とうたわれた。

樺島石梁（一七五四～一八二七）は、藩政時代における久留米の儒学者・教育家を代表するもので、久留米出身の最高の学者と称される人物である。天明四年江戸に上り細井平洲の門に入り、修学多年、久留米藩校の創立せらるるや、その創立事業の責任者となり、教授となった。石梁は朱子学を奉ずる藩校の中心でありながら単に朱子学に傾かず誠の道を得るための学問修業をする上からは、一党一派に偏せず、視界を広くすべきことを強調した。また彼は、広く知名の儒士と交り、柴野栗山、古賀精里、菅茶山、山村蘇門、頼春水等とも親交があった。殊に師平洲との関係で米沢鷹山公の知遇をうけ、平洲の遺稿発刊には、とくに石梁の校訂を求められた。著書には、石梁文集、遊草、往来芝、久留米志、有馬氏系譜及別録等がある。

門人の池尻葛覃、佐田竹水、山本幽篁等はのち藩校の教授となり、その斎樺島蓮溪、哲蔵等も学者として優遇された。

原古処（一七六七～一八二七）は、秋月藩士で亀井南冥に師事し、同門中古処の詩と昭陽の文章とは亀門の双璧と称えられた。のち秋月稽古館の訓導となり、寛政十二年教授に進み、秋月の文運を振興し、藩主黒田長舒から頗る信認された。

古処は天明七年以来藩校に出仕していたが、そのかたわら自宅においても子弟を教育した。これがのち古処山堂とよばれた。文化九年江戸祗役中突然藩命によって一切の職が解かれ退隠を命ぜられた。その後は家塾も閉じて詩作にふけった。古処の学風は南冥に負うところが大きく、その門下に江藤柯亭、吉田平陽、土井正龍、村上仏山等がある。

村上仏山（一八一〇～一八七九）は、京都郡稗田村の出身で、兄義暁は大庄屋、弟貴之は庄屋を勤めた人である。幼時津積の大島八幡の宮司定村直栄に学び、十五歳のとき、笈を負うて秋月の原古処・白圭父子に経史・詩文を学んだ。古処の歿後、各地を遍歴し亀井昭陽・吉田平陽・貫名海屋などについて学ぶところがあった。

天保六年の春二十六歳のとき郷里に帰り水哉園を開設したが、入門者は年ごとに増加し、十年後には水哉園は名実ともに高くなり塾制も完備された。その門人帳によれば開塾以来明治十七年までの五十年間に仏山及びその子静窓への入門者は千三百有余名を数え、九州一円、さらに中国・四国遠くは美濃方面からの入門者もあったほどでその盛況が偲ばれる。

仏山は原古処の影響を比較的多くうけ、朱子学の主知主義的なものよりも主意的、実践主義的なものが強かったと考えられる。したがって水哉園の教育は、人倫の大本である孝道の実践を目指し、心情の自然的発露としての詩作を重視して仏山自らが行ないを正し、範を示し、その行ないを門弟に移していくことにあった。仏山にとっては学派の如何は問題でなく、人を愛し、敬することを地道に行なうことが目的であったのである。仏山は詩人教育家として名声を博し、生涯郷里を離れることがなかったが、その交友に頼杏坪、坂井虎山、草場佩川、樺島蓮溪、広瀬旭荘等があり、学派を越えての交わりがあったことは、このことをよく示している。その門下の俊秀として知られるのは、末松謙澄、安広伴一郎等である。

青柳種信（一七六六～一八三五）は、幼にして藩儒井上周徳の学僕となり、苦学励精、長じて皇典を学び典故考証に精通した。寛政元年に本居門に入り、江戸に祗役の途次、本居宣長を伊勢松坂に訪ね、いよいよ研讃につとめた。加藤千蔭、村田春海らとも交り学識

直木保臣

大いに進み、士班に列して右筆役となった。

種信は筑前における国学発達の鼻祖と称され、国学塾柳園社を興し門弟の教育に当たり、伊藤常足ほか著名の門人を輩出した。また彼の国学普及の努力は民間にも及び博多櫛田社の文庫開設にも協力した。著書も多く、宗像宮略記、香椎廟宮記、続風土記拾遺、防人日記、柳園古器略考等がある。種信の学徳識見は、伊能忠敬をして「自分、諸国を経歴するも、未だ貴殿程の国学に通達せる人に逢いたることなし」と礼讃せしめたといわれる。その高弟伊藤常足は、太宰管内誌の著者として名高い。

真木保臣（一八一三～一八六四）は、久留米藩士で世々水天宮の神官であった。天保三年従五位下、和泉守に任ぜられたので人呼んで和泉と称した。国学に通じ、音楽詩歌を善くし、書も巧であった。水戸の会沢正志の新論を読み、感激してから水戸学を学び勤王の志を燃やした。そして嘉永の頃からは直接勤王運動に挺身し、藩政改革について建白するところがあったが、藩の咎をうけ水田村天満宮の祠官である実弟大鳥居信臣の家に閉じこめられた。この謫居の間に、保臣は国学塾山梔窩を建てて子弟を教育し憂国の気風を養成した。

文久三年、保臣は水田を出て京に上り、長州藩と提携して国事に当たり、元治元年長州の福原越後、久坂義助らと共に兵をこ起して敗れ、天王山に自刃した。山梔窩における保臣の教育は約十年間に過ぎないが、久留米藩内では稀にみる積極的な教育を行ない、その弟子に淵上郁太郎、同謙三、井村簡二、鶴田陶司、水田謙次、原道太、中垣健太郎、荒巻羊三郎等の勤王の士がある。

明治・大正時代の教育

初等教育

明治五年の学制改革から教育令下の十八年まではいかにして近代教育制度を樹立し実施するかの基礎工作の時代であった。したがって実際の教育は名実ともに徹底するまでの発展はのぞめなかった。しかし明治十九年および明治三十二年に教育関係法令が整備され、近代教育制度が確立するに及び本県においても漸く教育施設が充実され、また、教育内容を充実させる努力も本格的に進められた。

県においては教育内容充実の方策として、まず目標を出席率・校舎校具・児童の学習成績を優秀ならしめることにおき、各校の教員にその目的完遂に努力すべきことを要望した。そしてこれらに関し優秀な成績をあげた小学校を表彰し「旌表旗」を授与することによ

中垣安太郎

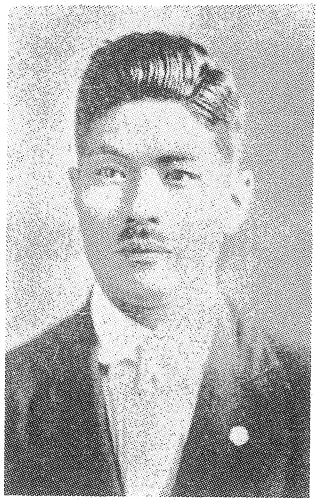
って奮発心を高揚したのである。この頃から本県初等教育は瞥然として隆運に向かい、大いに精彩が加えられ関西の代表的教育県と称されるようになった。このような教育発展はもとより県当局の施策と県民の協力によるものであるが、また教職員のたゆまぬ努力に負うところが大きい。しかし、その要因の一つは、この福岡県独自の旌表旗授与による学校表彰の制度にあったといえよう。この制度は明治三十四年にはじまり毎年三～五校が表彰され昭和二十一年まで継続された。この表彰制度を立案し、学校指導を推進した中心人物が当時の県視学中垣安太郎である。

中垣安太郎は久留米（山本）の生まれで明治八年、十八歳のとき官立長崎師範学校に学び、同十年卒業後、県下小中学校の訓導・教諭を歴任、明治二十三年福岡高等小学校長となった。明治三十年地方視学の制度が設けられるや、迎えられて初代の地方視学（のち県視学）となった。この県視学在職の十年間に彼の卓越した指導力と企画力は如何なく発揮され、旌表旗による表彰制度の創設、盲唖教育慈善会による私立福岡盲唖学校の設立推進、また、九州大学誘致や県教育会の改革などに尽した。

明治四十一年県立福岡高等女学校長となり、のち東筑中学校長に転じたが大正五年、五十九歳をもって病死した。本県教育に従事すること四十年、初等教育発展に尽した偉大な功労者である。

中垣視学の指導について当時の一青年教師は、「その透徹した観察力は唯一見して直ちに人の長短をみてとられた。時々当事者に発問されるが片言雙語なおよく肺腑をつくものがあった。若し校長や訓導中に研究心に富む者を認めらるるや特に発問が多い。初めの中は受け答えしているが、大抵の人は詰って答えができなくなる。すると先生は穏かに指導される。成程と思う。」と述懐している。また同視学は数地方の巡視をおえて帰庁すると総講評を新聞紙上に発表するのを慣例としたということである。これでは誰もが奮い起たざるを得なかったであろう。

大正時代から昭和初期の教育は、制度の上からみると、明治時代の基調の継続でその拡充に努めることが基本となってはいたが、第一次大戦後、欧洲各国に起こった新教育運動の余波は、わが国の教育をも刺激し多くの新しい特色を生じさせるに至った。この時期における福岡県内の小学校教育は、明治時代から醸成されてきた教育改善向上のための研究や実践が表面にあらわれ、これまでにない活発な教育活動を展開し、名実ともに西日本の代表的教育県と賞讃されるはなばなしい成果をあげた。この時代に教育指導と実践に全国



安部清美

的に注目されたのが、桜井恒次郎博士の指導による体操教育の発展と神興小学校の安部清美による「土の教育」の実践である。

桜井恒次郎は九州帝国大学医学部の教授であった。わが国における体操研究の権威者であり、同時に体操教育の普及に尽くした功労者で、大正時代から昭和初期にかけての本県体育発展の恩人である。

桜井博士は筋肉の発達に寄与するスウェーデン式の柔軟体操を唱道し、日本人にありがちの上肢の筋力不足を補うためには、特に懸垂運動を奨励した。そして体育を体操と遊戯の二つの領域にわけ、体操は正確な動作に習熟し、運動機能を養い、遊戯或は競技では鋭敏な運動神経を発達させ、不屈の敢闘精神を高揚させることを目的とし、この二面の長所を総合して体育の目的を達成しようとした。

桜井博士の指導は、当時の県視学安河内健児の時宜を得た指導と相まって、県下の体育研究熱は非常ないきおいで高まり、なかでも嘉穂郡の確井、飯塚、鞍手郡小竹、粕屋郡香椎、朝倉郡馬田、宗像郡南郷、大牟田市第七、門司小森江第二の各尋常小学校における体育の発展ぶりは県下小学校の模範と称せられた。

確井における体育は桜井博士の指導のもとに全村をあげて努力し、学校体操だけでなく青年訓練所生徒の体操、処女会の体操にも特筆すべきものがあった。

安部清美は宗像郡東郷の生まれで、大正九年福岡師範を卒業、郷里神興小学校の訓導となった。当時同校では力丸健象校長を中心として教育の方針を「神興第二の農民をつくる」ことにおき、児童をして土に親しみ土に生きる喜びを体得させ将来郷土を背負って立つ健全な村民の育成に努力した。とくに同校では、国語教育は生活即教育、生活即文学の観念によって重視され、これを通じての郷土の認識、郷土の善化を目標として強調された。

安部清美はこの郷土に立つ国語教育の推進者で「国語教育とは教師の魂が児童の魂と教材の個性という魂を結び目として融合混一の姿となり、そこに血が通ってくるものそれである」との信念をもって熱意を傾注し、とくに綴方を重視して国語教育を神興教育の中心にまで高めた。

こうした神興教育は小学校のみにとどまらず補習学校にまで延長して行ない、村民の生活と手を携えてすすめられていった。十年間の苦節に耐えて成功した神興教育（土の教育・愛の教育）は、県内はもち論他府県にも高く評価され、参観の人がたえず、そのため福間駅からの道路が整備されるという盛況をみた。

その後、安部清美は昭和七年、三十一歳のとき早良郡脇山小学校

長となり、のち県視学、筑紫高等女学校長、青年教育官、香椎高等学校長を歴任し、昭和二十三年県教育委員となった。その教育委員選挙において神興村では投票数の一〇〇パーセントが安部清美であったといわれ、如何に郷土の人々の敬愛と信望を集めていたかがうかがわれる。教育委員を二期つとめ、のち参議院地方区から選出され参議院議員を一期つとめた。本年七十一歳。著書に村の教育、土の教育、教育道、愛育十字路等がある。

中等教育

明治三十年代には教育制度の確立に伴い、本県の公立の中学校、高等女学校、実業学校も漸次整備されていったが、四十年代に入ると女子教育に対する認識の向上を反映して公立の女子技芸学校の勃興と併行して私立の裁縫、手芸、家事等を教授する女学校が目立って増加した。これらはたしかに明治後期の特色ともいえるものである。

この時代に入ってまず最初に設立された有力な私立学校は、筑紫・九州両女学校である。初代校長は、筑紫女学校は水月哲英、九州女学校は釜瀬新平である。なお、この期に福岡高等洋裁研究所（のち精華女学校）が吉田訓丸の手によって設立され、祝部ヤスの博多櫛田女学校、伴タツの福岡裁縫女学校、大和クニの直方大和裁縫女学校等が発足し、手芸裁縫の私立学校としてその後ながく独特の伝統を維持して教育に従事した。このほか杉森女芸学校（柳川）、勝山裁縫女学校（小倉）、久留米女子職業学校なども誕生した。

また、この時代に特殊教育機関の開設も進められ、柳川の教育家大淵清庵の提唱にかかる柳川訓盲院が明治四十一年に、私立福岡盲唖学校が同四十三年に開設をみた。

降って大正五年ごろから昭和初期にかけては県立中学校が増設されるとともに、多くの郡市立の高等女学校が県営に移管された。また私立学校の開設も多く、のちに西日本の代表的なミッション・スクールとなった西南学院が、米国バプテスト派宣教師ドージャー氏によって設立されたのを初めに、舞鶴商業学校（福岡）、筑豊鉱山学校（直方）など主として実業関係の私立学校が二十数校発足している。またこの期に、明治十八年にギール女史が初代校長となり創立された福岡英和女学校が校名を福岡女学校と改めてその規模を拡充した。

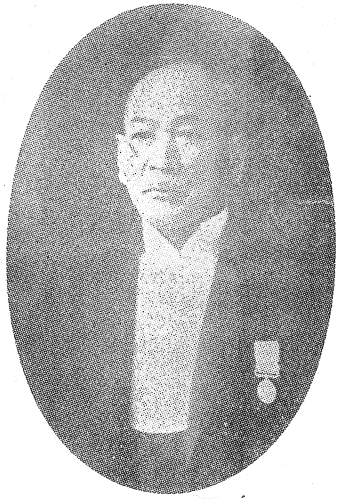
水月哲英は明治二十四年サンフランシスコの米国仏教会駐在時代に米国女性の社会的地位が高いのは、女子教育が進歩していることがその主因であると感じ、自己の将来の事業は、日本女子教育にあると決心した。そして帰朝後明治三十五年から四十年まで第四仏教中学（広島）福岡分教場に教鞭をとった。この分教場は筑前・筑後の真宗本派寺院の共同経営であったが、学制改革により閉鎖のやむなきに至った。そこで彼は県下の寺院に対し、女学校設立の必要を強くよびかけた。四十年三月両筑寺院大会でこの女学校創設の議が難航はしたが可決されたので、その設立者となり、前の福岡分教場の校地校舎をうけついで女学校にふさわしい設備を整え、私立筑紫女学校として開設した。その後音楽、体操教室の新築については、福岡・博多の有志が講を組織して義金を寄せたのを手始めに、次第に校舎が増築され校運をさかんならしめた。

釜瀬新平は宗像郡南郷村の出身で、明治二十五年福岡師範を卒

業、郷里の小学校につとめ、のち師範学校訓導となったが、明治三十六年に辞任して私立予修館を開設した。この予修館は師範学校入学生の準備教育を目的としたものであったが、同三十九年予修館の女子部を独立させて修業年限四か年の私立高等女学校を創設した。そしてこれら学校の基礎は彼が苦心の結果成功した地理模型の製作販売によって得た資金によって得られたのである。

彼が考案した地理模型とは、地理教育に資する日本全土の立体的模型で、企図以来八か年を費して成功したもので紙の細片を糊で練って鋳型に入れ、地形の模型を作る方法である。この模型が好評を博し志賀重昂の支援も得て各地に販売されるようになり、この釜瀬式模型の利潤が、やがて教育者としての釜瀬の念願である女学校設立に向けられたのである。

その教育方法は、彼の信念によって米国の自由主義的な教育と貝原益軒が唱道した保守的な女徳の形成とを併用調和させた円満貞淑な女性の養成を主眼とした。設立当初は生徒数も少なかったが、その後次第に校運も伸び福岡地方の代表的私立学校の一つとなった。



釜瀬新平

高等専門教育

明治後期には、また高等専門教育にも大きな進展がみられた時期であった。明治三十六年、福岡医科大学が設置されたが、同四十三年十二月勅令第四百四十八号をもって福岡医科大学を拡充した九州帝国大学が福岡市に設置されることになり、従来の医科に工科が加わり、その授業は明治四十四年から開始された。さらに、明治四十二年には、遠賀郡戸畑町に明治専門学校が開設され、福岡県教育にとって非常に重要な力が与えられた。

この明治専門学校は、工業発達の基礎条件の一つである高度の学術及び技術を習得する有能なエンジニヤの養成を念願した同町の実業家安川敬一郎、松本健次郎両氏によって明治四十年、私財三三〇万円、敷地七八、七七六坪を提供され工業専門学校設立を計画されたものである。まったく偉大な事業というべきであろう。その計画の全般と将来の運営については、山川健次郎理学博士に、学科の内容設備に関しては河喜多能達、山川義太郎、斯波忠三郎、的野中の各工学博士、建築設計は辰野金吾工学博士に託して設立準備をすすめ、同年六月には財団法人私立明治専門学校設立の認可をうけ、採鉱学科、冶金学科、機械学科の三科をおき四十二年四月一日に発足した。その後四十四年には応用化学科と電気工学科を増設し全国的にも稀にみるすぐれた施設と充実した教育によって有能な工業技術者や科学者を育成した。

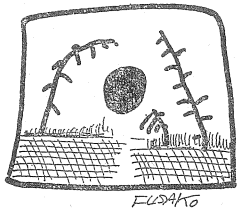
大正時代から昭和初期にかけては、大正十年に官立福岡高等学

校、私立の西南学院高等部、九州歯科医学専門学校が福岡市に設置され、明治専門学校が官立に移管された。翌十一年には高等女子教育機関として福岡女子専門学校が創立され、昭和三年には久留米の実業家石橋正二郎氏の発起で九州医学専門学校が設立され、本県の高等教育施設は明治時代に比して画期的な発展をとげた。また、大正七年には県立図書館が創設されて初代館長に伊東尾四郎が任命された。

伊藤尾四郎は明治二十九年帝国文科大学史学科の卒業で、豊津中学校教諭から明治四十一年名門小倉中学校長となった。のち図書館長となり、福岡女専教諭を兼任した。昭和五年辞任後、県史資料調査事務を嘱託され、福岡県史資料十五巻を完成した。この資料は当時異色の資料として好評を博したが、今も本県郷土史研究の至宝となっている。このほか編著として福岡県史料叢書、宗像郡誌、企救郡誌、京都郡誌などがある。昭和二十四年八十一歳で歿した。

（付記）　この稿執筆に当たっては、福岡県教育史を主として参考にした。この稿以外に、福岡県教育の発展に尽された多くの人々があるが、紙面の都合などで割愛せざるを得なかった。なお、人物を中心においたので、県教育史としては不備な点が多いことを付記しておきたい。

（福岡県文化会館図書部長）



第三回

人物を中心とした

佐賀県教育郷土史

県花‥‥クス

杉谷　昭

第一章　藩政時代の教育

近世における佐賀藩の藩校教育は、もちろん武士の子弟を対象とする儒学による官吏養成が目的であった。これら藩校の設立に先だって、まず聖堂が創設されている。

元禄七（一六九四）年に、富商武富咸亮によって大財聖堂が、元禄十二（一六九九）年に多久茂文によって多久聖堂ならびに東原学舎（庠舎）が、翌十三年には佐賀城内二の丸にあった聖堂が鬼丸の地に移された。これらの聖堂は孔子らの像をまつる聖廟であったが、その設立の目的を林大学頭信篤が書いた「多久文廟記」によると、「凡そ世の治乱は、学の盛衰を見てこれを知るべし」といい、「人徳の門を開き、好学の端を造る。すなわち家より国に及ぼし近悦遠来、期するところあり」とのべている。

幕府が封建教学として儒学（朱子学）をバックボーンとする教育理念を示したことにもとづき、佐賀本藩、各支藩、親類格の各鍋島家などにおいても藩校がつぎつぎに設立された。

次に年代順に示すと、

1　知方館　元禄元（一六八八）　川久保領（鍋島直賢）
2　東原庠舎　元禄12（一六九九）　多久領（多久茂文）
3　自教館　享保年間　武雄領（鍋島茂正）
4　三近堂　〃　須古領（鍋島茂訓）
5　盈科堂　享保8（一七二三）　唐津領（土井利実）
6　蓮池学寮　安永2（一七七三）　蓮池藩（鍋島直寛）
7　塩田学寮　安永5（一七七六）　蓮池藩（鍋島直寛）
8　弘道館　天明元（一七八一）　佐賀藩（鍋島治茂）

9　成章館　天明4（一七八四）　蓮池藩（鍋島直温）
10　興譲館　天明7（一七八七）　小城藩（鍋島直員）
11　思斉館　天明8（一七八八）　久保田領（村田政致）
12　経誼館　享和元（一八〇一）　唐津藩（水野忠鼎）
13　徳譲館　文化2（一八〇五）　鹿島藩（鍋島直彛）
（弘文館）　安政6（一八五九）改名　〃（鍋島直彬）
（鎔造館）　明治3（一八七〇）改名　〃（〃）
14　志道館　文化・文政年間　唐津藩（小笠原長昌）
15　橘葉館（医学校）　不明　〃（不明）
16　東明館　不明　厳原藩（不明）

以上の十六校が実在したと考えられる。

藩の経営による公けの学校以外に郷学、学問所、教導所とよばれる藩校の分校に類する学校があった。これら分校には藩臣の設けたものもあり、学者、武士たちがその好むところの地に門戸を構え、儒学、和学、算法、書道、武術を教えた私塾があった。

郷学以下になると、その経費を藩財政から支弁するものもあったが、大部分は生徒から授業料を徴収し、有志の寄付金でまかなうものであった。

しかし、こうしたすぐれた教育施設のもとにあっても十八世紀の半ばを過ぎると、教科内容が、儒学、国学のみでは、新しい時代に対応していけなくなり、外国語（オランダ語、イギリス語）、天文学、暦学、地理学、物理学、化学、医学（オランダ流、紅毛流）、本草学（生物学）、兵学（軍事学）などの研究がすすみ、幕府をはじめ全国の大小諸藩においても時勢に刺激されて文武の教育機関に洋学を取り入れるものが多くなった。

このように実学尊重の風があらわれるころ、佐賀藩弘道館の果たした役割は大きかった。

その主なものの一つ「葉隠」の立場からする学問軽視の風潮に対抗した点があった。古賀穀堂の『学政管見』に最も強く主張されているのは文武両道、とくに文に出精することであり、蘭学、自然科学の学習をすすめる点にあった。十九世紀初頭におけるこの穀堂の警鐘と弘道館教育の推進とがあって、はじめて佐賀藩は学問的水準を高く築くことができたといえよう。

佐賀藩の国老で多久領の領主多久茂文が聖堂創設の端緒を作り、東原庠舎においては士分以外の子弟でも才能ある者は学ばしめ、学事を奨励したことにつづき、藩内各地で学問所が設けられ、弘道館においては、江戸の昌平校教官、佐賀藩出身の古賀精里を教授として迎え、朱子学の正統派の学風が築かれた。幕末には佐賀藩主鍋島直正が藩政改革の一貫事業として、学館改革をも試みた。すなわち、古賀精里の長子、穀堂の意見を採用し、前述のごとく、実学尊重の学風を築いていった。

この藩校に学んだ人びとの中から明治維新に活躍した人物を多く輩出したのであった。

明治初年における学校教育機関の基盤は多くその藩校によって築かれたが、なかでも明治五年の「学制」以降の小学校の母体となったものは、藩校とならんで佐賀県管内にあった近世以来の私塾、寺子屋式教育機関であった。このことは佐賀県においてのみでなく、全国的に「学制」のスタートにあたって短期間に教育機関が整備されたのは、これらの寺子屋式教育機関が一応の土台となったからであった。

佐賀地方において資料によりあとづけられるものは、

三養基郡　三三校、西松浦郡　二八校、神埼郡　二五校、杵島郡　六七校、佐賀郡　一一七校、藤津郡　五七校、小城郡　三一校、東松浦郡　一一一校

右のごとくで、小規模な手習所、寺院にいたるまで四六九校が知られている。その規模において現在の学校とは比較にならないが、数においては今日、県下の小学校の数は一七九校、中学校一〇三校である。

このような近世における藩校、私塾が明治以降になって中学校、小学校にそのまま転身したり、あるいはその教師、設備などが基礎となって新しい学校教育制度のなかに組みこまれていったのである。塩田学寮から塩田小学校へ、鹿島の鎔造館から長崎県立鹿島中学校（明治十二年）へ、志道館から唐津中学校（明治九年）へ、東原庠舎は多久小学校、小城興譲館は桜岡小学校へ、東明館は田代小学校、成章館は蓮池小学校、思斉館は思斉小学校、弘道館は佐賀中学校ならびに勧興小学校をそれぞれ後身とするものであることは著名なるものの一例である。

〔参考文献〕

杉谷昭「近世における藩校教育と庶民教育」佐賀県文化館「新郷土」第二一一号

第二章　発足当時の文部省

明治二年七月八日の官制改革が行なわれたとき、同年六月十五日に昌平学校、開成所、医学校の三校を統合して作られた大学校が、学校であると同時に中央教育行政官庁として定められた。これは昌平校を大学本校とし、開成所、医学校を分局とするもので国史を監修すると同時に、府藩県の学政を統轄していた。明治二年二月五日に制定された「諸府県施政順序」なるものをみてもわかるように、中央政府は原則として小学校、中学校を地方（府県）に一任していた。明治二年の十二月ごろから京都の市内に六十四の小学校を設立したのをはじめとして全国に小学校が設置されはじめた。中学校が作られるのは明治三年四月以降である。

明治四年七月十日の廃藩置県前後になると、すでに明治二年十二月十七日に大学校は大学と改称され、開成所は大学南校、医学所は大学東校となっていたように、大学（昌平校）が全国の学校行政を総轄する中央教育行政官庁であったが、廃藩置県直後の七月十八日太政官布告によって大学を廃し、文部省が設置された。これにより組織的な国民教育がはじめられたといえよう。

最初、佐賀藩出身の江藤新平が文部大輔に任命されたが、七月二十八日には同じく佐賀藩出身の大木喬任が民部卿をやめて、文部卿となった。したがって、大木は最初の文部卿であり、内閣制度ができて最初の文部大臣森有礼が登場する前の明治十六年十二月二十二日から十八年十二月二十二日までの二年間、卿として最後の文部卿を務めたことによる。大木喬任は「学制」時代、また十八年の改正教育令に関係し、とくに十八年の改正にあたって当時の地方財政の実情と、それにもとづく教育施策とに大きな努力をはらい、実施をみるにはいたらなかったが、約八か月後、森文相の諸学校令に引きつがれ、「学校令」体制の素地を作ったといえよう。

当時新設された同省は大木、江藤のもとに加藤弘之、神田孝平

などの学者が文部大丞（局長級）として任にあたった。江藤は箕作麟祥とともに文部省官制、職務規定、権限などを定め、文部卿は「全国の人民を教育して其の道を得せしむる責に任ず」るものとした。また単なる学校監督に専任する後の文部大臣とは異なり、啓蒙期の教育行政として広い意味を有していた。江藤自身も「陛下の大命を拝し、身を以て文教の創定に任じ、省務の基礎を建てんとする」といっている。江藤は文部省の創設がその緒についたばかりの八月四日、左院議員として転出してしまった。旧佐賀藩出身者によって文部行政はすべりだしたといえよう。

明治四年十一月二十五日、府県学校を文部省の所管とする旨を達せられた。このように改って通達が出たのは、明治二年六月十四日に昌平学校が大学校として統轄、統合の権をもつ前日に「府県学校取調之儀、学校へ被仰付置候処、此度民部官御設ニ相成、府県事務総テ右官ニ於テ御規則相立候間、府県学校取調之儀御取止ニ相成候事」と達せられ、昌平学校内に置かれていた府県学校取調局が廃止されたことがあるからである。この文中にある「民部官」というのは、明治二年四月八日に設置され、七月八日には民部省となり、やがて部分的に大蔵省や工部省などに部局が移管されて明治四年七月二十七日に民部省は廃止されたいきさつがある。したがって一時的に地方教育行政が文部省からはなれた形になっていたのである。この府県学校取調局廃止になったときの民部官からの伺をみると、「郷学取達之儀、一切知県事へ御委任相成、緩急其時宜ニ随ヒ、為取計候方可然奉存候ニ付、右昌平校ヨリ取調役人被差立候儀ハ先先御差止相成候様仕度此段奉伺上候」とあってこれが採択されたわけであるが、地方教育行政は文部省設置とともに中央では握されることになったのである。

かくして文部省は、各地方の学校の実情を調査しはじめた。

佐賀県明治行政資料（県立図書館所蔵）の「官省達達」明治四年（第一号）第六十三号に、「先般学制改革致候ニ付、従前府県ニ於テ取設居候諸学校等、雛形之通リ取調、当年中差出候様、被相達別紙諸規則並表、差出申候、尤郷学校私塾等之取調未相付兼候ニ付追而差出申儀ニ御座候以上」とあって、報告書が出されている。当時、明治四年九月から十一月にかけて、佐賀、唐津地方は伊万里県と称し、翌五年五月に佐賀県が再置された。この伊万里県から文部省宛の報告書の別紙によると、支那学（中学校、小学校）、洋学（蕃学寮）、医学（好生館）の三種にわけられ、県が設置した佐賀町の学校だけ報告してあり、県内各地にあった町村立、私立の学校については調査がまだできていなかったとある。

これによると漢文学を主とした中学校、小学校の規模は両校あわせて、教官三十七人、生徒数六百八人、洋学を教えた蕃学寮では御雇外国教官一人（月給二百ドル）をふくむ十六人の教官と生徒百五十三人、医学校の好生館は教官十五人、生徒百三十人といった数字が報告されている。この一覧表には年間教育予算や教官の俸給、寄宿舎生と通学生の別などもくわしく載せてある。別紙にはさらに、「小学校規則」、「洋学規則」、「医学規則」などをかかげてある。

七歳から十五歳までが小学校、十六歳から中学校と定められ、「洋学規則」の第二項には、「諸生徒ヲ正則変則ノ二類ニ分チ、正則生ハ教師ニ従ヒ、韻学、会話ヨリ始メ、専ラ洋語ヲ以テ解意スルヲ主トシ、変則生ハ教官ノ教導ヲ訓読解意ヲ以テ主トスベキ

事」とあって、当時の外国語を中心とした教育上の用語として、正則中学とか変則中学というのがあるが、ここにみられるように会話を中心とするものを正則といったのである。しかし洋学校といっても今日の外語専門の大学などとことなり外国語はおもに低学年（初等、八等、七等）でやり六等以上四等までは数学、物理、地理、歴史、経済、土木などに関する学科を学ぶのであって、漢学、和学に対して幕末からとり入れられた外来の学術一般を、語学を柱に教え、学ぶところであった。「医学規則」による好生館は、安政五（一八五八）年、藩校弘道館から独立した医学寮が好生館となり、明治二年四月、医局が設けられ、明治三年十二月、医学校は廃止、医局だけ残り、五年三月、県立病院好生館となったものである。

以上の諸学校は幕末、明治初年ごろのものであったが、これらの学校の学風と、教育者たちの実践が、明治以降の佐賀県教育に影響を与えたことはいうまでもない。

近世における佐賀藩出身の学者、教育者には古賀精里、その二子穀堂、侗庵、侗庵の子古賀謹一郎の三代にわたる家系を中心に、弘道館、鹿島弘文館などの教官をつとめた谷口藍田、国学に草場佩川、蘭方医として幕府に医学所を開いて有名な伊藤玄朴、ドイツ医学の権威で東大医学部を創建した相良知安、または好生館教授の山村良哲、伊藤玄朴とともにシーボルト門下にあった大石良英、緒方洪庵門下の佐野常民など日本の医学界にも知られた人びとがあった。さらに旧佐賀藩士で昌平校で学び、佐賀藩大属から明治四年岩倉具視らと欧米を巡回、「米欧回覧実記」を著し、東大文学部国史学科創設、史学会創立に尽力し、「神道は祭天の古俗」の論文で東大を追われたが終生、古文書学の発展に名をなした久米邦武などがあった。

第三章　明治期の実践者

学制頒布以降、県内各地に小学校が整備されていったが、中学校は明治十年代にはいってから整備された。とくに佐賀県地方が長崎県管下にあったころはじゅうぶんな発達をみなかった。

明治九年一月、旧弘道館に設けられた佐賀変則中学校も、佐賀の乱直後の人心穏かでないころではあるし、教師、設備などもまだ完備されていない状態であった。

ちょうどこのころ、家永恭穣、徳久恒範、村地正治、古賀良三らは、明治十一年十月、「戊寅義学」を創立、和漢学、数学、法律学、経済学などの諸学科を設けて人才を養成していた。教官には家永恭穣をはじめ、後に政界で活躍、名をなした武富時敏、島原の産で東洋社会党を日本で結成しようとした樽井藤吉などが居り、ここで教育を受けた者に、江藤新平の子、新作があり、後に政界に進出、また的野半助、加藤十四郎などもこの戊寅義学の出身者であった。

また変則中学校の教師に、満岡勇之助、原口元照、横尾純喬、花房重治などがいたが、それぞれ、佐賀の乱では反乱軍で活躍、許されて社会に復帰した人びとが中心となっていたようである。乱の前にも木原隆忠の木原塾などでは木原塾主をはじめ塾生はこぞって憂国党として乱に参加したことがあった。明治初年における学校は、一見、政治結社風な性格を有していたといえる。ちなみに明治十六年五月、現在の佐賀県が成立し、十七年七月一日佐賀県師範学校が創立されたが、その初代校長は原口元照であり、第二代校長は花房重治であった。

この佐賀県尋常師範学校（明治十九年改正）に明治二十年一月、初代文部大臣森有礼が教育視察に立ち寄ったとき、次のような訓示を行なっている。

由来本県は明君閑叟公、深く学業を奨励し、幾多の人傑を出し、維新の大業を翼賛せられたことは、他県人の斉しく羨望するところである。今や親しく此地に臨みて実地に之を視察し、且つ諸君が此等人士の遺風を受け、一向に学業に励み、其の規律あり、其の威重ある気質の現われたるを知り、本大臣の大に喜ぶところにして、訓練の行き届きたる、九州第一と称するも過言にあらず云々、とあった。

また宗教関係の学校としては、明治十一年四月佐賀市高木町願正寺（真宗）内に創立された振風教校のあとをうけ、明治三十四年、当時西肥仏教中学校といっていた同校を、同寺住職熊谷広済校長を中心に本派本願寺第五仏教中学として設置しようとする運動が起こった。福岡県と設置争いの結果、三十六年、佐賀に第五仏教中学が設置されたのである。やがで文部省の認定をうけ、明治四十一年四月龍谷中学校と改め、そのあとが現在の龍谷学園として、高等学校、保育、国文系の短大を併設する私学に発展をみたのである。

第四章　女子教育の先覚者

日清戦争後における国民経済の発展とそれにともなう国民の教育に対する理解のたかまりは初等教育、実業教育などの進展とともに女子教育の発達をもたらした。官公立の高等女学校の発達の過程は、文部省年報によると、明治二十年代の終わりにくらべて四十三年度は学校数においても生徒数においても十倍以上の躍進を示していた。高等女学校関係の規程は明治二十八年から三十四年にかけて整備されていった。また四十年代になって実科高等女学校の設立がみとめられ、その異常な発展をみた。佐賀県においても、明治三十三年、県会において県立高等女学校の設立を可決して、その端緒をきずいた。

しかし、すでにこれよりさき、女子教育、女性覚醒運動などの先覚者があらわれ、明治二十年代から三十年代にかけて柳原一女の「実習女学校」や中島ヤスの家塾的な「裁縫教授所」などがスタートしていた。これらは皆、明治末年から大正のはじめにかけて、それぞれ整備され、大正の末年から昭和のはじめにかけて高等女学校に昇格していった。当時の日本全国において女子教育の先覚者は、多く指導的な女子教育家であったことが、文政当局者に強い刺激となったことは著明な事実であった。

明治二十一年ごろ佐賀に「婦人矯会」が組織され、柳原一女が会長となり、永渕アサ、江副ツナが幹事としてこれを助けた。

佐賀には女学校すらなかったのでこの「婦人矯会」のメンバーで県令（鍋田景弼）の子女や県官の子女の教育に当たり、習字や裁縫などを教えていた。

やがで明治二十三年四月、学校を建設して「実習女学校」を設立、裁縫、習字、手芸の他に国漢などの普通学科もふやして教授した。永渕アサが舎監となり生徒数は二学年で二百名にもおよんだ。のち会長柳原一女は豊増家に嫁し、家事の都合で退職し、永

渕アサも退職したので江副ツナが専ら学校経営にあたった。

明治二十九年、大隈重信が帰県して、女子教育の必要を説き、その後援によって豊増一女は新しく「佐賀女学校」を設立、永渕アサも、ふたたび参加協力することになった。三年卒業程度の学校としたが四百名からの応募者があり、時代の要請に大きく応えたのである。大隈は肥前協会より補助金を出させて後援するところがあった。このように大隈重信は女子教育を重視し、日本女子大設立にも大きく貢献するところがあった。

明治三十二年ごろから高等女学校への昇格運動を起こし、願書を提出したが、なかなか認可にならないので上京して文部省にただしたところ、願書が県知事のところで止められ、文部省までとどいていなかった事件があった。知事部局としては視学官の意見にもとづき、さきに設立された「実習女学校」と「佐賀女学校」とを合併する案を持っており、願書は未提出であったと説明した。明治三十四年十二月、この両女学校は合併して「私立成美女学校」が誕生した。これがのちに「市立成美高等女学校」となったのである。明治三十四年には県立佐賀高等女学校も設立をみて、ここに女子教育は本格的な規模でスタートしたのである。

一方、中島ヤスは、明治三十年佐賀郡鍋島村(現佐賀市鍋島町)に裁縫教授所を開いたが、明治三十七年三月、佐賀市に移転、大正十二年四月「佐賀裁縫女学校」を創設、昭和四年四月「佐賀高等裁縫女学校」と改称した。また内田清一は明治四十四年四月、「実科女学校」を創設、大正十三年四月清和高等女学校と改称、昇格した。豊増(旧姓柳原)一女は婦人会活動の一貫として幼稚園教育にも尽力するところがあり、明治三十九年六月「佐賀婦人会幼稚園」(現在新道幼稚園)を開設したりした。

以上のような明治後期における佐賀県女子教育の先鞭は、その後、長く伝統を保ち、とくに故中島ヤスの経営を受けた旭学園は現在多様化された女子高校と家政、児童教育系の女子短大を併設、一貫した女子の完成教育を目ざしている。

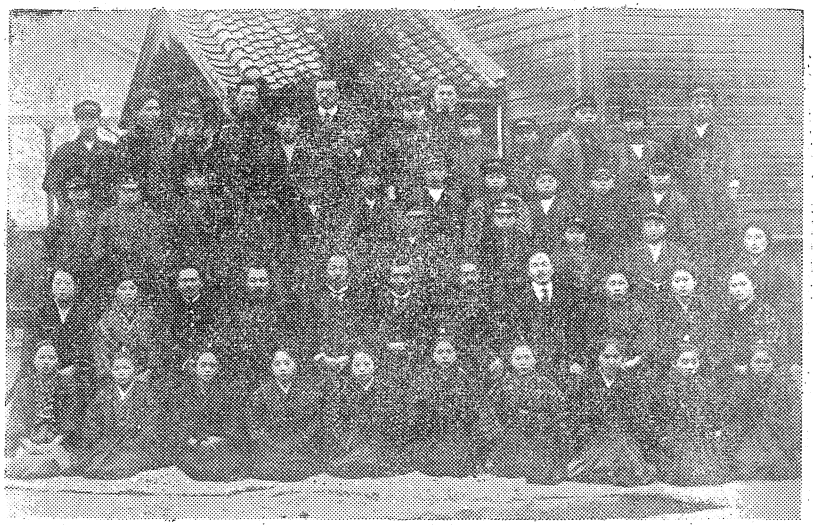
第五章　大正期の新教育

大正期から昭和初年にかけての教育体制は、大正六年十月から八年三月までに開かれた「臨時教育会議」によって示されている。

この会議は寺内正毅内閣が設けたもので、理解と応用を主として、記憶主義をさけ、独創力を啓発して能動的に研究心を養うといった自発的個性主義を促す一方、大正デモクラシーに対応して日本独特の国家主義的教育体制を主張するものであった。この体制の影響が一方では「新教育運動」を生みだし、また一方では「軍事教育」を生みだしていったのである。

当時武雄地方の橋小学校の山口良吾校長と前山琢磨訓導が県下における新教育運動の先端をいっていた。

前山訓導はアメリカにおける、ヘレン・パーカスト女史による実際的探究(ドルトン・プラン)の影響をうけ、さらに成城小学校創立者、沢柳政太郎博士の直接指導を受けて、名校長山口良吾校長の理解と支援のもとに、第五学年と第六学年とを成績段階に分類し、各教科担任を中心に各教科研究室を設け、児童たちは研究室で自由に実験し、集められた参考書などを自由に使用し、グループ学習を自発的にすすめるようにした。永遠に違しない一般の生徒は普通の学級編成のもとに授業をうけ、研究生たちも体操



大正12年３月・武雄市橋小学校第23回卒業生記念写真

（前から二列目・右から四人目が前山琢磨訓導・同じく七人目が山口良吾校長）

や図画などは学級編成にもどって授業を受けた。

教師たちはこの自発的学習を支えるために共同研究を怠らず、各学校間で交換授業や研究授業を活発に行ない、意気盛んであった。大正十年から十一年にかけてのころである。前山訓導は第二次世界大戦後の新制中学校においても学校長として活躍し、戦後の新教育運動の中心となり、県下の新教育を推進し、現在は多久市の教育長、県の社会教育委員などを歴任して、いまなお佐賀県教育に大きな影響を与えている。

山口良吾校長も「郷土教育」と称して、郷土の先人、偉人の業績を顕彰し、理論よりも実際教育を重視して、児童たちに石や木材を運ばせ、記念碑などを創設した。郷土愛の啓発によって人材を養成しようとするものであった。

またちょうど同じころ、佐賀市の高等小学校には田中清三訓導があり、成城小学校の小原国芳主事(現玉川学園長)の講演に接し、大いに感ずるところがあり、新教育方法を実践していた。

田中訓導は、当時の学校長から異端視されたが、佐賀郡久保田村(現久保田町)の恩斉(しせい)小学校などでの研究授業に参加してグループ学習、自発学習を推進していったのである。一年後の成果をみて、学校長も、田中訓導の教育方法を大いに認めるようになったが、惜しくも、田中訓導は倫理学の専攻を志し、佐賀を離れ、日大に学ぶため上京した。第二次世界大戦後、帰県して各高等学校に教鞭をとり、現在は大学で倫理学を講じている。

これらの佐賀県下における新教育の先駆的運動は、全国的な運動と呼応し、県下の理科教育、歴史、地理教育などに強い影響を与えたといわなければならない。

また戦後の新教育運動は、ちょうどこの大正十年代に教育を受けた人びとが教育者となり、荷担者となっているわけである。戦後の新教育は大正の新教育の伝統をうけつぐものである。ちなみに、現在の橋小学校長は、かつて、同小学校において前山訓導からドルトン・プランによって教育を受けた人物であり、用務員の一人も同じ教育を受け勤続四十年、その伝統を今に伝えている一人である。

第六章　育英会と教育会

大正七年三月、第一次世界大戦を機に、「財団法人佐賀育英会」が生まれた。その趣意書に、

明治維新ヲ以テ帝国ノ改造ト謂フヲ得ヘクンハ現下ニ於ケル欧州大戦ハ世界ノ維新ト謂フヲ得ヘケン今ヤ敵味方ノ交戦国ハ大戦ノ教訓ニ鑑ミ軍事ニ政治ニ経済ニ将タ社会事業ニ鋭意改善ヲ図リ底止スル所アラサラントス然リ而シテ百ノ施設帰スル所一ニ人ノ学術ニ淵源セサルハナク其ノ学術ノ活用亦帰スル所一ニ人物ノ如何ニ待ツ然ラハ則チ精鋭ナル国民ヲ造リ威力アル国勢ヲ養ヒ以テ世界ノ大勢ニ順応センニハ実ニ人物ノ養成ヨリ急且先ナルモノハアラス（下略）

とあり、佐賀県が従来人材を生み出していたのに「近年我郷党子弟ノ近状ヲ顧ルニ其ノ成績甚タ振ハスシテ其ノ学其ノ力量他地方人士ニ一等ヲ輸スル観アリ」であって、育英事業についても明治初年以来の盛事に比して近年は、「見ルヘキモノ」、「成果ヲ収ムルーものがないというのである。

そこで従来のように一部篤志家の個々ニ個シ狭小」であったものを「広ク資金ヲ募リ」教育の振興につとめようとするのであった。

資金総額を百万円以上と目標を立て、「綱領」によると、その第四、第五条に

第四　育英資金は財団法人ト為シ適当ノ方法ヲ設ケ之ヲ管理シ其利子ヲ以テ奨学育英事業ニ充ツ

第五　育英事業ノ重ナル事項左ノ如シ

一　佐賀県内ニ在ル中学校教員ノ俸給補助、教育材料ノ寄付、優秀薄資学生ノ学資補助等

二　前項以外諸学校在学者ノ学資補助等

三　東京並県下中学校所在地ニ於ケル学生寄宿舎ノ建設並維持等

四　中学校優秀学生ニ賞品ノ授与其他奨学等

とあって鍋島侯爵家を総裁に大隈重信が中心になって設立したものである。当時、大隈は第二次大隈内閣を形成し、五年十月九日以来解散引退していたが、政党活動よりもっぱら郷土に対する関心が強くなっていたころである。

この育英会の昭和九年における報告によると、約十年間に、養成学生八八〇名、支給学資金額二十九万一千百十七円となっており、これによって大学を卒業することができたもの八八名、高等学校八六名、専門学校九一名、陸海軍諸学校一七五名、師範学校三八名、中学校二五五名などであった。

昭和九年の当時、寄付金の申込総額は百二万一千六百四円であった。

教育の実効が最も顕著であった大正末期、昭和初期を通じて佐賀県教育界において育英会が果たした役割は大きかった。

明治二十年前後に作られたと推定される「佐賀県教育会」は、

明治十二年の教育令制定の際、文部大輔田中不二麿の原案「日本教育令」の第六十四、六十五章にある教育議会の精神が全国各地で知識人を集めて開かれた二十年前後の各地「教育会」の一つとして発展したものであろう（もっともこの原案の二章は成文化されなかった）。明治二十三年には県下に支部を有する教育団体としてはっきり存在がみとめられ、小学校教員、学事関係者、一般有志で組織されていた。

大正十一年ごろの事情をみると、佐賀市支部会は会員百五十名で各種の研究会、講演会、講習会などを催す以外に、注目すべきことは「教育互助会」の事業をふくんでいたことである。

「会員の不幸、災難に遭遇せるもの、または退会者に対して救済、慰籍の実を挙る目的にて其の資金として、会員は毎月俸給の百分の一を醵出し」て維持していた。

第一次世界大戦後の風潮として、全国的に教員の増俸運動が盛んになり、その是否が論議のマトになっていた時代であった。労働争議、小作争議も飛躍的に増加し、教師の経済生活も最もおびやかされた時代であった。女子の高等教育の伸張の反面、思想善導、職業教育が叫ばれ、農村の子女が都会へ流出することを危ぐされた時代でもあった。

このような世相を背景に佐賀県育英会、佐賀県教育会などは、地味ではあったが、実際的に教育効果を挙る大きな力であったということができよう。

第七章　郷土教育の実践

昭和期になって準戦時体制下における教育は、ややもすると軍国調に偏する傾向にあったが、佐賀県においては、「佐賀県郷土教育調査会」を設けて、昭和十年三月「郷土教育資料集」を刊行している。教育改造が叫ばれたときに、従来の画一教育、概念の条項から出発する抽象的形式的教育を脱して、地方的実際的教育の実現をねらったものであった。

まず四五名からなる「佐賀県郷土教育調査委員」を委嘱した。会長は県学務部長奥田茂造、副会長に学務課長大沢雄一といった官営事業の色彩の濃いものであったが、委員のなかには、佐賀県教育会会長生駒万治（旧制佐賀高等学校初代校長）や徴古館長（博物館）西村謙三、張二男松（元師範学校長）、県会議長古村清太郎などの有識者をはじめ県視学官、県教育主事、さらに師範学校、各種中学校、高等女学校、小学校、公民学校などの学校長が名を連ねていたが、この諸学校長のトップに紅一点である佐賀高等裁縫女学校長中島ヤスの名前がある。三年がかりで教育資料を集め、その編集にあたって、県民性の長所、短所を精査討究し、これらの助長、矯正に便なるように資料を整理、配列した。A5版八百二十五頁、二段組で豊富な写真を収めている。

単に偉人の顕彰に終わることなく、県民性の短所を卒直にみとめ、あきらかにし、被教育者の程度に応じて取捨選択して活用できるものである。

準戦時体制から戦時体制へかけて、佐賀県教育の教育原理であり、支柱であったことは否定できない。学務部長奥田茂造は資料集の序文で「真の愛郷心は実に真の愛国心」であるとのべている。それらの教育の結果はともかくとして変動の激しい時流のなかで教育体系を郷土に根をおろした地味な形でまとめようとした郷土教育の実践には注目しなくてはならない。

（佐賀女子短期大学教授）

第29回

人物を中心とした

長崎県教育郷土史

長崎県立教育研究所

はじめに

長崎の教育は、わが国の教育発達の中において特殊な位置を占めている。

早くは、一五世紀後半から南蛮文化……スペイン、ポルトガル……と接触があり、その後一六世紀の鎖国とともに約二〇〇年間は中国文化、西洋文化(オランダを通して)移入の唯一の窓口となった。ことに、西洋文化の著しい影響を受けた精神的土壌の上に成長したのが長崎の教育である。

しかし、明治維新とともに西洋文化の移入は東に移り、長崎は西の裏門と化し、それまでに移入されていた西洋文化は新しい発育の場を得ることができなくなってしまった。すでに一八五七年ごろ海軍伝習所において、原始的、幼稚なものではあったが、いちおう近代教育の様式をとり始めた物理・化学教育も、新政府の出発とともに取り止めとなり、極言するならば唯一の成長を続けることができたのは医学教育のみであった。

このように、長崎が単なる西洋文化移入の歴史的な土地になりはてたことと、往昔、鎖国の後半、西洋文化の花匂う市場として国内の俊英あいつどっていた姿を想像対照するとき、感無量なるものがある。しかしまた、それだけに、その後の長崎の教育者が、条件悪化の中において、あらゆる努力を積み重ね、今日の教育普及の基礎を築いたことに対して敬意を表すべきである。

ともあれ、一六三九年鎖国令以後の外来文化の接点はオランダ商館と唐人屋敷であり、したがって、日本側の通詞(蘭・唐)はもちろんのこと、商館長(カピタン)や、約二か年の期限で交替勤務した医官たちのはたした役割は重く、これが長崎教育の歴史的特質である洋学興隆をもたらしたことに注目しなければならない。この医官たちは通詞を介して、あるいは通詞そのものを含んで医学、薬学のみならず語学や他のすべての諸科学を伝えたのである。

なお、鎖国前一六一二年の宣教師追放令までのキリスト教布教活動が影響を与えたことも見逃せない。そして禁教令が解かれた明治以降のキリスト教系学校も長崎教育の一つの特色をなしている。さらにまた唐人屋敷も単に中国文化のみならず、当時の西洋科学を漢訳した書籍をもたらしている。もともと長崎は、中国大陸に最も近く、古くから遣唐使はかならず長崎の地のどこかを通過したもので、その他留学生・僧の往復や碩学、鴻儒、高僧などの渡来もあって、中国文化とは強い接触点となり、これも長崎教育の一特質を形成している。

この稿では、以上のような歴史的背景の中から主な人脈を探ってみたい。

沢野忠庵(クリストファン・フェレーラ)

わが国では、従来、長く漢方医学が行なわれていたが、ポルトガル人の来航によって南蛮流の医学がもたらされた。かれはイエズス会士として長崎に来たのであるが、禁教令により一六三三年逆吊の刑に遭い棄教し日本名に改めた。それ以前にイルマン(司祭以外の宣教師)として一五六七年(永禄十年)ルイス・デ・アルメイダが初めて長崎に来て布教に従事したが、外科医としては、当時最も科学的知識の持ち主であった。また翌年の後任ガスパル・ヴィレラは、トードス・オス・サントス教会(現在の春徳寺)を設立し、その庭園を薬草園とした。これが南蛮流の植物学や薬物学教育の始まりである。

忠庵は、これらのあとに来て南蛮医学のみならず天文・地理学にも通じていたので日本人で教えを請う者が多く、後には鎖国によってオランダ流の医学に取って替られることになるが、南蛮医学の伝統を確立し一家秘伝の法として伝えた。門人の中に西吉兵衛(玄甫)、杉本忠恵があり、のちにそれぞれ幕医として採用された。この西家の学統からは、日本蘭学全盛期の立役者杉田玄白が出ることになる。

諫早コンスタンチノ

一五八二年(天正十年)二月二十日、ワリニァーノ神父に引率された大村、大友、有馬三侯の遣欧少年使節が長崎を出帆するとき、三人の日本人が同行した。そのうち二人は印刷術を学ぶのが目的であった。その一人がコンスタンチノである。かれは一五六七年(永禄十年)諫早に生まれているが、残念ながら日本名はわかっていない。出帆のとき一六歳、天正十八年七月長崎に帰ったとき二四歳となっていた。

天正五年五月二十九日、少年使節たちといっしょにこの印刷技術者たちもインドのゴアまで帰ってきたが、そのときグーテンベルグ式金属活字印刷機とローマ字母と活字をポルトガルから持ってきたのである。ゴアのサンパウロ大学における旅行報告会の演説はラテン語のまま印刷されたが、その印刷名義人はコンスタンチノであり、日本人では最初の活版印刷物の名義人として歴史に残ったわけ

である。

のちにこの印刷機は、当時島原半島の加津佐にあったコレジョにすえられ、コンスタンチノらの手によってローマ字綴り日本文の金属活字本を盛んに発行した。コレジョは、キリスト教布教の一環として日本での組織的な高等教育機関の最初のもので、一般教育四か年、専門教育三か年のイエズス会士を養成する……現在の大学に相当するであろう……。これの予備校的な神学校をセミナリョと言い一五八〇年には有馬に、その翌年の天正九年には安土にも創立された。

その後印刷所はコレジョといっしょに天草、長崎のトードス・オス・サントス教会と転々し、一五九九年ごろ岬の教会（現在の長崎県庁の所）に移っている。諫早コンスタンチノらが印刷した本は五〇種をこえていると言われるが、長崎では大浦天主堂に一種だけ残っている。のちには、仮名と漢字の字母も作って美しい金属活字を鋳造した。かれは音楽（オルガン）とラテン語がうまくセミナリョで教えたこともある。

一六一二年、家康の宣教師追放令により、キリシタンは弾圧され、一六一四年、印刷機とともに中国のマカオに追放され、まもなく死んでいる。

石版印刷（平版印刷の一種）もわが国では、明治元年、ド・ロ神父と赤瀬茂四郎（浦上の人）が大浦天主堂において最初に始めたが、その二年後、鎖国で中絶していた活版術を再興し、わが国近代印刷業の祖となった長崎の本木昌造のことと思い合わせるとき、長崎の地は印刷術によくよく縁の深い所だと感じさせられる。

なお、一般の史書によれば加津佐に印刷機を持ってきたのに関して、引率者のワリニァーノ神父だけを挙げているので、本稿では、キリシタン研究家、片岡弥吉氏の研究による技術者コンスタンチノを取りあげた。

西川如見

慶安元年長崎に生まれた天文・暦法学者で、当時広くその名は江戸にまで知られ、わが国第一流の天文学者であった。かれの地球球形説は儒者林羅山の天円地方説よりも一歩進んでいる。これは南蛮（西洋）天文学を、当時、長崎における大家であった小林謙貞に学んだからである。如見はそのほか西玄甫や関庄三郎（謙貞の高弟）にも学んでいる。またその他のオランダ通詞にも学んだと考えられる。西玄甫は前述の通りであるが、さらに沢野忠庵が書いた蛮字天文書を向井元升……後述……が翻訳したとき、その天文書を協力して読解したこともある。

かれの天文学が一歩時流に先んじていたとはいえ、やはりかれも時代の子で、トレミーの天動説を採っていた。江戸時代わが国に伝えられていたのはキリシタン宣教師たちによるもので、したがって、その教義からコペルニクスの地動説は異端邪説として厳しく排斥されていた。それにしても中国天文学（天円地方説や陰陽五行説をもとにした）を学んだ当時の儒学者たちの天災地異に対する迷信や吉凶禍福の観念を打破することに努めたことは如見の進歩性を示している。一七一四年、「教童暦談」を著わし天文学を通俗化し、その普及発達を図ったことは、その功績の一つに挙げてよい。天文・暦学のほか各種の著述が二、三ある。一七一八年、七一歳のとき吉宗に招かれ江戸にのぼり、天文学に関する質問に答えた。

本木仁太夫良永（オランダ通詞）

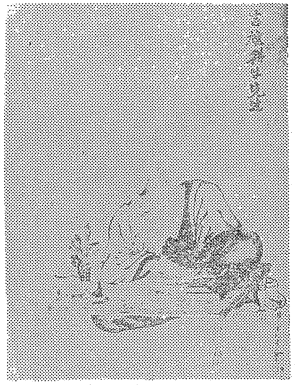
地動説が初めてわが国に紹介されたのは如見の死後約五十年たってからであるが、この良永（通称は栄之進、オランダ大通詞、後述の本木昌造の曾祖父にあたる）がそれをはたした。

一七七二年（安永元年）、「オランダ地球図説」、一七九二年（寛政四年）、「大陽窮理了解説」を翻訳し、地動説を紹介した。

一七四四年、青木昆陽が幕府の命令により長崎に来てオランダ語を習うようになったとき、同僚の通詞、吉雄耕牛、西善三郎らとともに、昆陽を通じて、幕府に公然とオランダ書籍を読むことの許しを願い出て許され、それからというもの、寝食を忘れて学習したと言われている。他にラテン語、フランス語、さらに天文・地理にも精通し、医学にも及んで、洋書翻訳の初期の極めて困難な時代の草分けとなった。この門下生に志筑（しづき）忠雄、大槻玄沢（初め杉田玄白の弟子、のち長子玄幹とともに幕府天文方出仕、蘭学者）などがいる。

志筑忠雄（通称は忠次郎）

一八〇二年、イギリスの天文学者ジョン・ケイルの蘭語訳によって「暦象新書」を翻訳し地動説とニュートンの万有引力説を紹介した。かれは、長崎の豪商中野家に生まれ、オランダ通詞志筑家の養子となった。柳園と号し、のち中野家に復したので中野柳園として知られる。暦象新書の解釈にあたり、蘭方辞中に一定の語格、詞品のあることを発見し、「阿蘭陀詞品考」を著したが、その後のオランダ学の研究に資すること大なるものがあった。またケンペルの著「日本紀事」を抄訳するなどまことに幅広い研究をしている。かれこそ、近世科学の先駆者と言っても過言ではない。門下の四俊として、吉雄権之助永保（耕牛の第三子、耕牛はオランダ通詞で平賀源内、林子平、杉田玄白、司馬江漢などの師）、馬場佐十郎、末次忠助、西吉衛門がおり、それぞれ一家をなして活躍した。江戸の大槻玄幹もこの門から出ている。



牛耕　吉雄

とくに吉雄権之助は、のち「英和対訳辞書」を選し、「ハルマ蘭仏辞典」の反訳、その他語学に大貢献をした。高野長英、伊藤圭介なども権之助の門人である。

本木庄左衛門正栄（本木良永の長男）

父のあとを継いでオランダ大通詞となった。一八〇八年、長崎港でイギリス軍艦フェートン号事件があり、北辺においてもロシヤがしばしば事件を起こしており、もはやオランダ語だけでは外国との交渉にこと欠くことになり、幕府ではオランダ通詞たちに対して英語と露語を修めることを命じた。

これより先、幕府では、蘭館長ドゥーフに依頼して正栄らにフランス語の学習をさせていたが、後任商館長ブロンホフから英語を教わることになった。これがわが国における英語学習の初めである。

正栄はそのとき四三歳。

一八一一年（文化八年）春、英語辞典一〇巻を著して幕府に献上した。これが「暗厄利亜興学小筌（アングリヒクシロウセン）」である。引き続いて吉雄権之助などの協力を求め、ブロンホフの指導によって英語対訳辞書「暗厄利亜語林大成（アングリヒクシロウ）」一五巻を編さんした。これがわが国における英和辞典の始めで、これから、しだいに英学が盛んになるのである。さらにこのあと「仏朗察（フランス）辞範」四巻を編さんしたが、これまた、わが国仏和辞典の初めである。

このように、明治以前の長崎、とくに一八二〇年代以後（文政期以後）においてオランダ通詞たち（本稿ではその全部を挙げえないが）の学問的な深さに、わが国内の先覚者と言われる人のほとんどが大きな影響を受けているのは事実である。

つぎに、鎖国時代に長崎に渡来した外人の主な者に触れてみたい。

ケンペル（一六九〇年、元禄三年、商館医として赴任、ドイツ人）

「日本紀事」……のち志筑忠雄によって抄訳紹介……「外国奇聞」「日本植物図集」などの日本研究書により日本を紹介、のちのチュンベリーやシーボルトなどに日本渡来の希望を湧かせたのはこの書である。これらの資料入手には、通詞その他の学生を使ったという。この方法がまた、のちの日本研究の範となった。

かれの医学教育の特徴は、まず一人、二四歳ぐらいの青年にオランダ語を教えることから始め徐々に医学を教えるという方法であった。

チェンベリー（一七七五年、安永四年、商館医として赴任、スエーデン人）

かれはリンネ（博物学者一七〇七年～七八年、その生物分類学は現在の日本でも範となっている）の高弟で植物学、とくに分類学に詳しかったが、医学・薬学において種々の貢献をしている。吉雄耕牛（前述、オランダ大通詞、吉雄流医学の祖、門人六〇〇余人。前田良沢、杉田玄白、平賀源内もかつて学んだ。診察に尿の検査を加えた主唱者）、桂川甫周、岡田養仙、中川淳庵らに医学や植物学を教えた。かれは他の医官と異なって多数の医療器具を与え教育効果を挙げた。

かれの著書「日本紀行」は、興味深いものがある。その一節に、「通詞の蘭語はかなり正しい。欧州の書籍をひじょうに欲しがり、ときには執拗なほど物理学、医学、博物学に関する質問を行なう。通詞の大部分は、医学の研究に没頭している……そして、かれらは欧州人の治療法を自分のものにしている。かれらにとってこの業は名を高め産をなすに最もよい方法なのである……」と述べている。

ドゥーフ（一八〇八年、二七歳で商館長）

文化年間、幕府は、かれに依頼して通詞たちにフランス語を習わせたことは前述の通りである。かれの最大の功績は、蘭人ハルマの蘭仏対訳辞典を基にした蘭日辞典「ドゥーフ・ハルマ……道富ハルマ……長崎ハルマとも呼ぶ」を編さんしたことである。当時、すでに稲村三伯の「江戸ハルマ」があったが誤りもあり不完全であった。「道富ハルマ」の編集には吉雄権之助、中山作三郎らを中心とした通詞たちが協力した。ドゥーフ帰国後も幕命によって通詞たち

が編集にあたり前後二十有余年を要し、徳川時代における最大の編集事業となったのである。しかし、これによって長崎遊学の人々は通詞を介することなく蘭学修業ができる一因となった。

シーボルト（一八二三年、商官医として文政六年赴任、シーボルト事件で文政十二年、いったん帰国。一八五九年安政六年再渡来）

かれの鳴滝塾での診療には、常に門人とともにいちいち指摘して臨床的な教え方をした。わが国のいわゆる臨床医学はこれに始まる。前後滞在六年余、その業績はあまりにも知られ過ぎている。門人七五名、当時から幕末にかけて一流の人々ばかりである。

文政九年、商館長に随行して江戸にのぼったときは、学術諸般に通じているかれについて疑いを質す者が多く、とくに天文方兼書物奉行高橋作左衛門は、最も頻繁に出入して西欧一般の形勢事情を質問した。シーボルトの持つナポレオン一世戦争記を訳すれば好資料と思い譲り受けを請うたが入れられず、強いて頼むと伊能忠敬の実測日本地図と交換するはめとなり、これがのちシーボルト事件へと発展し、シーボルトは帰国させられることになる。

シーボルト

その後、日米和親条約が成立するとともに自然シーボルト追放も取り消され安政六年再び渡来した。オランダ商事会社の顧問格であったが、任期が終ったのちしばらく幕府に招かれ政治顧問となり、その間、生存の門人はもちろんのこと、多くの人々の質問に答えた。その中に長崎県出身の杉享二（日本統計学の祖、沼津兵学校教官、明六雑誌同人、現在の日本統計協会の前身である統計学社を明治九年創立し自ら社長となる。国勢調査施行研究の第一人者）、加藤弘之、野中玄英、三宅良斎などの一流の人々の名前がある。シーボルトは、生物学の造詣も深く、帰国後、「日本の動物」「日本の花卉」その他の著書により日本文化をヨーロッパに紹介した。現在、長崎市の市花として「紫陽花（あじさい）」が制定されているが、この花は、かつてシーボルトにより学術名「ヒドランゲヤ・オタクサ」と命名されたもので、オタクサは、かれの愛人であった「お滝さん」にちなんでいる。

ポンペ（一八五七年、安政四年、幕府の招へいにより来崎）

ペルリ来航に刺激され、オランダすじの好意ある勧告と援助により幕府では海軍伝習方を長崎に設けることになり、安政二年、オランダ海軍の教官団二二名が来崎した。ポンペは、その医官であったのを、洋医学伝習のために雇入れられたのである。

初め奉行所西役所で講義を始めた。受講者は一二藩一三六名で幕府医官松本良順が学生取締役であった。ポンペは、医学、薬学ばかりでなく生理学、化学、物理学、地質・鉱物学なども講義した。これが長崎医学伝習所の起こりで、しばらくして、物理学の受講に海軍伝習所の学生も加わったので狭くなり、大村町に移ったが、文久元年、学舎と付属病院を小島に設けた。これが小島養生所であり、

った。門弟に対しては厳しいものがあったが、半面、ゆき届いた細やかな愛情を見せたという。これは、文久二年帰国後も日本人留学生の世話を受け持ったということでもわかるであろう。ポンペの門人たちは、後年日本の医学界を背負って立った人が多く、明治期における日本各地の医学校設立に関与した人たちの大部分が門人であった。

ポンペ

フルベッキ（一八五九年、安政六年、アメリカのレフォーム教会の宣教師として渡来、オランダ系）

かれが日本の英語教育に尽くした功績は極めて大きい。

安政五年、当時長崎奉行支配組頭永持享次郎（安政二年勝麟太郎らと航海測量の伝習に来崎したことがある）は、「英語伝習所」の創立を発議し自らの岩原屋敷内に教場を設けた。教頭は通詞楢林栄左衛門で、他に八名の教員がいた。江戸の洋学所すなわち蕃書取調所に英仏の二語学を新設されるのに先立つこと二年であるから、この伝習所は、わが国の英語教育の嚆矢（こうし）と言える（この栄左衛門は、前述の本木正栄、吉雄権之助らとともに実にわが国の英仏語教育の基を開いた人ということができる）。その後、「英語所」「語学所」と名称をかえ、文久三年に「洋学所」と改め、英・蘭語を教えた。慶応元年、「済美館」と改称され、フルベッキは、その英語科の担当となったのである。それまで、学生の大部分は蘭通詞の子弟であったが、これからは諸藩の秀才が競って教えを受けるようになった。副島種臣、大隈重信、中野建明などもそうである。

フルベッキ

明治元年、広運館と改称し、洋学局以外に本学（国学）・漢学の二局も設けられたが、明治二年に洋学専門となり英・儒・露・清語の五科目と数学も教えた。生徒は英学生だけでも一一一名いたという。本学局の督学兼教授は丸山作楽（島原の人、勤皇家、明治憲法や皇室典範の制定に功があった）である。フルベッキは同年、太政官に招かれ大学南校の基を作り、初めてドイツ流医学を移入し、外交顧問、元老院顧問となり明治三十一年赤坂で没した。

かれは来崎当初から自宅で、また済美館、広運館で教えるかたわらも数名の学生に教えていた。かれの後任として宣教師スタウト（アメリカ人）が広運館の英語を担当したが、これも私塾を開き英

語による聖書の講義を行なった。この二人の始めた塾がのち発展して明治二十四年、新教系の東山学院（のち、いくたの変遷をへて現在のカトリック系南山学院と続く）と明治二十年開校の梅香崎女学校（わが国第四番目の女学校）へと連なっていくのである。

このように長崎教育の人脈を探ってくると渡来外人ならびに通詞が本職であった人々がその大部分を占めていることに気がつく。事実、外人に触発されて長崎の教育・文化の一特質は形成されたものである。日本側の受容力、消化力もすぐれていたにちがいない。それは、あたかも乾いた砂に水を注ぐように長崎に集まる人たちの血となり肉となったのであった。ところで、このようなキリスト教的文化や西洋文化に対して、長崎（日本）も手をこまねき為すことなしの状態であったのではない。

それは、儒学の系統の活動であった。前述の通り、英語伝習を目的とした広運館においても漢学局を設けていたことにも知られるが、それ以前においての長崎聖堂の経営や、長崎地区各藩の教育にも注目すべきであろう。

平藩藩に維新館（一九七九）、福江藩に育英館（一七八二）、大村藩に五教館（一七九〇……その前は集英館……一六七〇）、静寿園……一六九四）、厳原藩に思文館（一八一九）と藩立小学校（一六八五）、島原藩に稽古館（一八五八）、富江藩に成章館（一七〇一）、諫早藩（領）に好古館（一七八三）など儒学を主とした教育機関があった。

しかし、長崎は幕府直轄地であった関係で、これらの藩校に対するものとして儒学推進のための機関が生まれることになる。これが官学、長崎聖堂（中島聖堂……立山書院……明倫堂……）である。

向井元升・元成の一家

肥前神崎の人。儒学者で本草学、医学、暦数学にも通じていた。元升が、一六四七年（正保四年）、時の長崎奉行に請い聖堂と学舎（私塾）を設けたのが長崎聖堂の始まりである。その当時は立山書院と称し、孔子を祭り、自ら儒学を講じた。湯島聖堂の建設に先立つこと四十三年である。

かつて、長崎の地はキリスト教が盛んで、禁教後は仏教が勢いをもりかえしたとは言え、倫理道徳を明らかにする機関が切望されるところであった。この聖堂によって儒教に基づく倫理の本を正すことになり、堂に溢れるほどの聴衆が集まったという。

十二年後、元升は京都に移り、しかも火災によって立山書院は焼失、十四年間中絶したが、奉行の手によって再興され実質的な官学となった。その塾師は南部草寿であるが、これも帰洛した。一六八〇年、たまたま元升の第三子である元成が帰郷していたので、奉行牛込忠左衛門はこれを迎えて塾師・祭酒（主）とした。こうして向井家は代々祭酒（主）となり明治四年まで引き継ぐことになる。

元成は、一六八五年、中国舶載の書籍中にキリシタン関係書類を発見、上申したので書物改役を兼務させられ、これも世襲となった。その後、聖堂の祭りだけは長崎県教育会が引き継いだこともあったが、現在は長崎市が行なっている。

本木昌造

一八三五年（天保六年）、一二歳のとき伯父のオランダ通詞本木昌左衛門の養子となり、同時に稽古通詞となった。

一八四四年、オランダ使節コープスの開国勧告のための来航、一八五三年、ロシヤのプチャーチンの長崎来航、一八五四年下田にペリーの来航による日米和親条約締結などに際しては通訳として活躍し、格別精勤ということで賞された。一八五五年(安政二年)、下田から帰って海軍伝習所の伝習係となり、数・理・測量・蒸気船の操縦法・製鉄法などを学んだ。

一八六〇年、鮑浦に製鉄所が設けられると、その御用係となり、翌年、同じ場所に軍艦打立所が設けられるころには、蒸気船を自ら操縦するほどになっていた。のち四五歳で製鉄所頭取となる。

造木昌本

一八四八年(嘉永元年)、たまたま漢書植字判一式が長崎会所に舶載された。そこで、かねがね、美しい鮮明な印刷を自分たちの手でやってみたいと思っていたので、他の通詞たちとも相談し、それを買入れることにし、「洋書を印刷して希望者に分けられるよう」と奉行所に要請した。これが聞き入れられて「活字判摺立所」が安政二年に設けられ、昌造がその取扱役となり、翌年にはオランダ文法書五〇〇部を印刷した。

その後もくふうを重ね、洋書のできばえは見違えるほどりっぱなものになったが、すべてがオランダ製であり、日本の文字を作り出すまでにはいたらなかった。たまたま、上海に鉛活字を作る所があるというので技術者を出張させて研究させた。また鹿児島に、活字を上海から買ってきたが、使用法がわからないで困っている者があると聞き、自ら出向いて譲り受けることなどもした。

さらに、フルベッキの紹介で上海の活版技師を招き製鉄所付属活版伝習所を設けた。ここでは自らもくふうし鉛日本活字の鋳造にやっと成功することになる。明治三年、四七歳のとき、「事業としての印刷業はこれからの日本にぜひ必要である」と考え製鉄所もやめ、新町に活字製造と印刷業を始めた。一つには、かれは私塾を経営していたが、授業料を取らないのをたてまえとするためには、資金調達にも役立つと思ったからであった。続いて大阪、横浜、明治五年には東京へと印刷所の足がかりをつくり事業を広げ、同年八月学制発布に際し、教科書印刷を願い出るまでになったのである。

印刷文化と教育普及とは切っても切れない深い関係にある。本木昌造は、近代日本印刷文化興隆の祖であるが、同時にまた、教育の興隆普及にも貢献したことになり、その功績は実に大きいと言わねばならない。明治八年、長崎で没した。

おわりに

長崎教育の特質の浮彫りに力を入れて筆を進めてきたところが、残念ながら、ちょうど明治学制発布まできて与えられた紙数は尽きた。しかし、長崎の教育を述べるには、どうしても触れなければならない、宿命とでも言うべき学制発布までの長崎の歴史である。以後については、またの機会を得たい。

(研究係長　松尾善次郎)

第46回

人物を中心とした

熊本県教育郷土史

―― 熊本県教育の源流 ――

谷川憲介

一　藩学

近代熊本の教育を語るには、藩校時習館にまで遡らなければならない、といわれるほど時習館が後世の熊本に与えた影響は大きい。

九州諸藩のうちでも、最も早く整備された藩校の一つである時習館は、宝暦四年細川重賢によって創設された。重賢（享保五年～天保七年）は延享四年、三八歳で細川家五四万石を継いだ。破局に瀕していた藩財政の再建をはかって、重賢は藩政改革いわゆる宝暦の改革をおこなったが、その基礎となったのは、時習館の建設を初めとする文教政策であった。

重賢の教育観を語るものとして、つぎの話がある。

「或る時秋山儀右衛門を召されて四方山の御咄遊ばされ候時、御意遊ばされ候は、「汝は国家の大工殿じゃが、外に頼む事迚はなし。吾まつぼり（とっておき）の若き者共を導きくれるには、一所に橋をかけぬようにして向うの河岸に渡しくれよ。川上の者は川上の橋を渡り、川下の者は川下の橋を渡り行かば、其者共廻り道なしに才能をなすべし。とにもかくにも河向うの孝弟忠信の道にさへ、橋をかけてもらへば吾用には立つべし。其橋の掛所は汝が心にあるべしと」仰せられき」

秋山儀右衛門、号は玉山、時習館の初代教授。教授とはいまでいえば、学長にあたる。玉山は性、濶達。「雖主古義不廃新註、彼比参考必歸至当而已」を教育の信条として、「人材溶鋳之所に候へば生徒の才に従ひ教育勿論に候」という細川重賢のもとで、党派に拘泥せず、各派の長をとって時習館の方針とした。

秋山玉山は在職九年で没したが、二代教授藪孤山になって学風は一変し朱子学一辺倒になった。孤山は他の学派は一切これを認めなかった。三代教授高本紫溟は初めて国学の講座を設けたほどの人だが、紫溟もまた孤山に続き朱子白鹿洞書院の掲示「正其義不謀其利、明其道不計其功」を時習館の教育綱領として壁間に掲げた。四代辛島塩井、五代近藤淡泉、六代片山豊嶼と続いて、みな藪孤山の学風を継承して精神修養に重きをおいて子弟を教育してきたが、しだいに朱子学の末梢的な文章辞句の暗記暗誦を事とする風が固定化して幕末に至った。「時習館きうり（窮理）かづらのはびこりて十三経の置所なし」「けしつぶの中くりほぎて館立て一同一間に細註を読む」とは、当時の時習館を諷した狂歌である。

二　学党の起り

肥後藩はこのような学風の時習館で学んだ人たち（学校党）が一貫して藩の主流をなして幕末激動の時代に入った。これに叛旗を飜えしたのが横井小楠である。小楠は時習館の居寮長（いまでいえば塾頭）までなったが、現実から遊離した時習館の学風にあきたらず「学校と政治と二つに離れ候より学校は読書所に相成り無用の俗学に帰し候」と時習館を批判し「実なき学」として、「政治の有用」に役立つ人材の育成と藩政改革、開国の必要を説いた。

また国学者林桜園の私塾原道館を中心とする勤王党の宮部鼎蔵、河上彦斎、永鳥三平らは熱烈に尊王攘夷運動をすすめた。

佐幕的な公武合体論の学校党、尊王開国の実学党、尊王攘夷論の勤王党と鼎立する藩論の間にあって、去就に迷って藩政府の方針は一定せず佐幕的日和見的態度をとって躊躇逡巡みるべき行動もなく、薩長土肥の後塵を拝して「富強の大藩を誇称しながら、その実いずこにありや」と嘆じしめたのであった。

慶応三年徳川慶喜大政を奉還、四年明治と改元、諸大名版籍を奉還、肥後藩は熊本藩と改められ、藩主細川韶邦が知藩事となった。この年、韶邦は病気のため弟護久が知藩事となる。

三　新しい教育

細川護久は実学党系の竹崎律次郎、徳富一敬、嘉悦氏房、山田武甫、安場保和、太田黒惟信などを登用、果敢な藩政改革をおこなった。熊本の維新は明治三年に始まる、といわれるゆえんである。

明治三年時習館、再春館を廃止して、熊本洋学校、古城医学校を創設、横井太平（小楠の甥）の意見をいれアメリカ人ジェーンズを招聘して西洋文化を吸収した。

六年県政の主流にあった実学党が、その急進的な近代化政策のため新政府からにらまれ県政の座から一掃された。

八年四月、宮崎八郎、有馬源内、松山守善らが主権在民の民権運動普及のため、熊本市の郊外植木町に植木学校を設立した。

九年五月、県立千葉中学校が設立された。

同一〇月勤王派の太田黒伴雄、加屋霽堅ら一七〇人余りの敬神党が兵を挙げ一夜にして壊滅した。

一〇年　西郷隆盛らが兵を挙げ、一万三千の兵を率いて熊本城を囲んだ。学校党の池辺吉十郎、佐々友房、大里八郎らは熊本隊を編成、民権党の宮崎八郎はすでに解散していた植木学校生徒たちを集

めて協同隊を編成してともに西郷軍に投じた。実学党は事態を静観。九月乱は平定した。

四　政党と学校―保守と開明

一一年民権党は池松豊記らを中心に相愛社を結成して、板垣退助らの愛国社と民権運動に活躍した。

一二年九月県立熊本中学校が設立された。一二月学校党の佐佐友房は「海外詭激放蕩の論起る時、国家を救済するは教育の効力最も多し」と高橋長秋らと熊本市に同心学舎（一五年済々黌と改称）を設立した。

一四年自由民権運動の全国的な高まりに対抗して、国家主義、皇室中心主義を唱えて、かつての学校党勤王党が佐佐友房らを中心にして立憲帝政党の地方組織としての紫溟会を設立、済々黌を紫溟会の教育機関とした。

一五年この紫溟会に対抗して、実学党の嘉悦氏房、宮川房之、相愛社の池松豊記、宗像らは進歩政党の大同団結を図って公議政党を組織、ついで九州各地の進歩党を糾合して九州改進党を結成した。改進党は自由主義、民主主義の校風をもつ熊本中学を支持した。

これよりさき、一一年実学党の嘉悦氏房が広取英語学校を、一二年徳富一敬、嘉悦氏房、宮川氏房が共立学舎を、一五年徳富猪一郎（蘇峰）が大江義塾を設立して横井小楠の学統を継承しようとした。しかし、紫溟会の勢力は強く、済々黌はしだいに発展し広取英語学校は一五年、共立学舎は一八年、大江義塾は一九年相ついで閉鎖された。

明治二〇年県会で多数を占める紫溟会は、二一年度の熊本中学校の予算を削除して熊本中学校廃止を議決。以後一〇年間、本県には県立中学校は一校も存在しない。

二一年実学党は熊本英学校を設立した。校長には熊本洋学校から京都の同志社に学んだ海老名弾正を迎え、教師には蔵原惟郭、徳富蘆花、内村鑑三、柏木義円などを招いた。二代校長蔵原惟郭は自由主義を標榜してその普及に努力したが、同校教員奥村禎次郎の「本校の教育方針は日本主義にあらず。世界の人物を造る博愛主義なり」という演説を契機に保守派からの排撃をうけて、ついに二九年廃止された。云々と幕末時習館以来明治中期までの本県の学党、政党、学校の消長起伏を極めて概括的に年表的に述べた。

本県のこの学党間の抗争は第三者的立場にある県外人の眼には、つぎのように映った。

「該県ハ沃野曠濶、民力頗ル優ナリ。且旧藩士族ノ庁下ニ居住スル者甚多シ。是ヲ以テ教員ノ募集、生徒ノ通学、学資ノ集徴等之ヲ著クスル、亦困難ナキヲ知ルベシ。而シテ学事ノ振ハザル、人心ノ向ハザル、該県ニ於テ尤モ甚シキヲ見ルモノハ、抑亦因由スル所アルカ。余ガ臆測ヲ以テスレバ、之ヲナスノ部分ニ於テ尤モ著シキモノハ、蓋シ分党ノ弊ニアリトス。分党盟結相軋ル者茲ニ久其障礙シ。……日ク横井党、日ク時習館党（旧学校生徒）、日ク敬神党……其背馳ノ極ル所、各相忌疑シテ平和ニ至ラズ。今ヤ小学ノ設立殆ド七百余校ニ及ビ、英学師範学皆備ハラザルナシト雖ドモ、各党ノ城廓ヲ潰裂シ、其源ヲ疏シテ、其流ヲ通ズルニ非レバ、安ゾ能ク心気和平、智識競駆ノ域ニ至ルヲ得ンヤ」（明治九年文部省督学官野村素介）

「学事盛んなるいまだ本県のごときところあるを見ず。前任地宮城県は遊学する生徒わずか三、四百人に過ぎず。本県を見るに中等教育を司とする普通専門の私立無慮数十校にして、生徒数も二千余名に出づ。予の本県に任命さるるや、いえらく、熊本は全国無比の党派多きところにして、難県中の難県なるべしと」「聞く、旧来本県の政党はその原因学派の分裂にありと。学党もっとも恐るべし」（明治二四年、熊本県知事松平正直）

幕末学党の抗争の余韻は大正、昭和になってもなお響き、学党対立の根強さを物語る。

「肥後人は淳朴質直なれども偏狭固陋、真塾著実なれども因循姑息、特に理屈多くして実行力乏しく、党同伐異の弊尤も甚しきが如し（昭和二九年　東京大学名誉教授）。

五　県教育、明治大正のあゆみ

明治五年の学制発布に始まるわが国の近代教育制度は、一九年の小学校令、中学校令などのいわゆる学校令によって基本体系は樹立された。二三年発布された教育勅語は、学校令と相まって、わが国の国民教育の基盤を確乎たるものにするとともに、中央集権的、国家主義的教育体制を確立させた。二七年の高等学校令、大正七年の大学令は高等教育機関の整備を促進させた。

初等教育

学制発布前は初等教育は寺小屋において行なわれたが、その数は九一〇校であったという。学制発布によって初等教育の機関としての寺小屋はしだいにその姿を消し、小学校がこれに代った。学制発布の翌年明治六年、小学校数九四校、一〇年、七一五校、二五年、六八五校、四五年、六九八校と設立されていた。その就学率は明治七年、二四・八％（全国平均三二・三％）。一〇年、三五・九％（〃三九・二％）。二五年、五一・四％（〃五五・一四％）、三三年に至って九四・七六％（〃八一・四八％）となり、ようやく全国平均を越え、大正四年、九九％（〃八八・四七％）に達した。本県の中等教育、高等教育はこれらの事実を基盤にして発展して行ったのである。

中等教育

中等教育の機関としては、廃藩までは、藩校、熊本の時習館、宇土の温知館、樹徳斎、八代の伝習堂、人吉の習教館などがあった。また私塾として木下塾、小楠堂、原道館、兼坂塾、月由塾など約七〇を数えることができる。

本県の中学校は明治九年の千葉中学に始まる。千葉中学は明治一〇年西南の役の戦火で焼失して閉鎖されたが、一二年県立熊本中学校として再開されて開化主義の教育をおこなった。これに対して同年佐佐女房らは国家主義を唱えて同心学舎（明治一五年済々黌と改称）を設立し熊本中学校と対立することとなったが、政争が絡み合って二一年熊本中学校は廃止され、二〇年代は県下に県立中学校は一校も存在しないこととなり、済々黌は着々内容を充実して県下の中学校界に君臨した。明治二〇年代は津田静一の文学館、中村六蔵の文学精会、杉本彦治の涵養斉、田尻彦太郎の有為黌、井上太郎七の城北学館、甲斐隆道の観象楼、工藤左一の合志義塾、細川行真の

鶴城学館など一〇〇校以上の私学があった、というほどの私学全盛時代であった。

三三年、前年度の改正中学校令により済々黌は県立中学校となり、中学済々黌と熊本中学校に二分され、三四年八代分黌が、三四年鹿本分校が、四二年天草分黌がそれぞれ独立して県立に移管された。またこれより先、三四年設立された県立熊本中学校玉名分校も三九年独立した。大正時代に入り、中学校への志望者の増加に応じて大正一〇年から一三年にかけて宇土、御船、大津、人吉の県立中学校が新設された。

女子中等教育

熊本県の女子の近代的な中等教育は、明治二一年創立の済々黌女子部（明治二八年尚絅高等女学校と改称）、同年創立の熊本英学校附属女学校（大正一〇年大江女子高等女学校）に始まる。三二年高等女学校令により三五年郡立八代高等女学校が創設され、翌年熊本県立高等女学校が設立された。明治四〇年代から大正の初めにかけて菊池を始め、熊本市立、山鹿、玉名、天草などに実科高女が設立されたが、大正末期には県立女学校一一校、市立女学校一校、私立女学校七校、実科女学校七校を数えるに至った。

実業教育

本県の中等教育機関としての実業学校は、明治二九年設立された県立熊本商業学校に始まる。続いて三一年熊本県工業学校（木工・金工・染織科）が設立された。三二年実業学校令が公布されたが、本県では三二年熊本農学校が設立されたのに続いて阿蘇、球磨農業学校が設立されたが、四〇年代から大正の初めにかけて矢部農業、市立工業、鹿本農業、天草農業、八代農業と各地域に実業学校の設置をみた。昭和六年現在で県立または組合立の実業学校は一四校、うち商業学校一、工業学校一。農業県熊本の特性を示すものといえよう。

師範教育

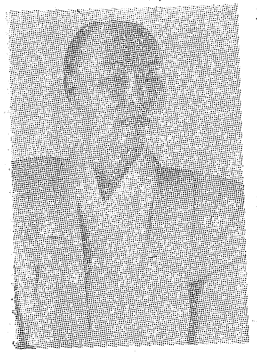
本県の師範学校は、明治七年五月設立された仮師範学校に始まる。修業年限六か月、九年熊本師範学校と改称、一〇年西南の役の戦火により焼失、廃校となる。一一年再建。本科二年、速成科八か月、一九年師範学校令が発布され、この年「熊本県尋常師範学校」と改称、修業年限四か年。修業年限一年六か月の講習科を附設（二六年廃止）。二八年女子講習科を附設（三四年廃止）。三三年熊本師範学校と改称、修業年限二年四か月の簡易科を附設（四一年廃止）。三四年、修業年限一年の女子部を設置、四三年附設の女子部を分離、熊本県女子師範学校を設立、四一年熊本県師範学校に修業年限一か年の第二部を設置、大正三年第二師範学校を設置、昭和六年第一、二師範学校を合併し熊本県師範学校と改称。

高等教育

中学校令により明治二〇年第五区の高等中学校である第五高等中学校が熊本市に設置された。修業年限二か年。二七年高等学校令により修業年限は三か年となり同時に第五高等学校と改称。同時に工学部が設置された。修業年限四か年。三六年私立熊本医学専門学校が設立される。三九年第五高等学校工学部は熊本高等工業学校となった。

六　教育界の先達

横井小楠（大正元年～明治二年）名は時存（ときひろ）。小楠は八歳のころ時習館に入学、二五歳で成績優秀のため居寮生、いまでいえば給費生になり二九歳で居寮長となった。小楠はかねて現実から遊離して朱子学の末梢的なことばかりを研究していた時習館の学風にあきたらず、実践窮行を重んずる大塚退野の学風の再興に努めていたが、三一歳、天保一〇年藩命で江戸に留学、ここで水戸の藤田東湖と交わるようになって、強く水戸学の影響を受けた。天保一一年酒の失敗で藩庁から帰国を命ぜられ逼塞の処分を受けたが、同一三年家老の長間監物や下津休也、元田永孚と実学党を作って、時習館の学風に叛旗をひるがえした。同一四年小楠は私塾小楠塾を開き、徳富一敬（徳富蘇峰・蘆花の父）、竹崎律次郎、嘉悦氏房らが集まった。小楠は嘉永六年ごろから攘夷論に疑問をもちはじめ、安政二年開国論に踏切る。彼の識見は遙かに世論を抜いていた。予言者故郷に容れられず、その治国済民の方策も肥後藩からはいれられなかった。しかし、小楠の卓見は世の識者から注目されていた。小楠は安政五年から文久三年まで前後四回越前藩の松平慶永に招かれて、福井に滞在、同藩の藩政改革に参画、また慶永を通じて幕政改革にも参加した。文久三年、小楠はかつて江戸で刺客から襲はれて全然抵抗せず士道を没却したという理由で知行と士席を没収され熊本市の郊外沼山津に閑居、明治元年新政府に迎えられて制度局の判事、ついで参与となって活躍したが、明治二年一月退庁の途上、十津川藩士らの凶刃に斃れた。



横井小楠

小楠はその後半生を通じて肥後藩にいれられず、その政治的抱負をついに実現する機会はなかった。しかし、熊本の近代化を主として推し進めてきたのは、彼の門下生達と、その流れを汲む人達であったことからみると、小楠はすぐれた思想家でもあり、またすぐれた教育家でもあった、ということができよう。

小楠の思想、政治、学問論、教育論は井上毅との対話集〝沼山対話〟、元田永孚との対話集〝沼山閑話〟にうかがわれる。

竹崎茶堂（文化九～明治一〇）　名は律次郎、熊本県玉名郡に生まれる。阿蘇郡山西村で開墾に従事、かたわら村の子弟の教化にあたっていたが、二五歳、横井小楠の門に入って大いに啓発を受けた。のち玉名郡横島新地で営農のかたわら私塾をひらいた。明治三年同門の徳富一敬とともにきわめて進歩的な藩政改革意見書（熊本城取り崩し、藩庁に上下二院設立・役人公選・諸雑税の免除など）を起草して、横井小楠の実学思想の実践に努めた。明治三年の藩政改革で実学党が要職を占めることとなって、茶堂も民政局小属、大属となったが、やがて洋学所治療所出仕になり、洋学校の創立事務に当たり、開校されるにいたって漢籍教導となった。在任一年余りで退き、四年、熊本市本山町に家塾日新堂を経営した。

日新堂は中学程度の普通部と小学校に相当する幼稚舎に分れ、普通部では経書、歴史、地理、算術、理科を教授し、幼稚舎は、初め

漢籍の「小学」を教えていたが、あとでは、熊本では最初の掛図式教授法を使用するなど新しい教授法を採用した。近県からの入学生も多く開塾の翌年、生徒は二〇〇名を越えた。この門下から徳富蘇峰、小崎弘道、金森通倫、横井時敬、北里柴三郎など多くの偉材が輩出した。普通部には女子学生も入学を許したが、女子に中学程度の教育を授けたことは、日新堂が本県では最初のことであった。

茶堂は本山の邸内に茶と桑を植え製茶養蚕もやり、アメリカから馬鈴薯、トマト、落花生、あるいはリンゴや西洋葡萄、西洋梨などを取り寄せて栽培した。またブラウ、ハローなどの大農機具をアメリカから取り寄せて熊本市の郊外小峯原で開墾を試み、あるいは洋牛三頭を購入して酪農にも着手するなど、熊本における殖産興業の先達でもあった。

茶堂は横井小楠の遺訓経世済民の実践者であり、教育家であり、また実業家でもあった。

三浦晟彦（みうら　てるひこ）（嘉永三年～昭和八年）　熊本市に生まれる。明治七年仮師範学校が設立されると、第一回生として入学し同年一二月卒業した。

卒業と同時に成績優秀のため、派出訓導を命ぜられ飽田託麻郡下の小学校を巡回し直接教鞭をとって教授法を示すなどして新教授法の指導にあたった。じ来草葉千草の各小学校の訓導に、明治二五年熊本高等小学校長、三五年熊本南部小学校長となるなど四一年まで前後三五年間県初等教育界の中心人物としてその盛名をうたわれた。

佐佐友房（安政五年～明治三九年）　熊本市に生まれる。時習館に入り一八歳、居寮生となる。時習館時代はとくに水戸学に傾倒した。明治一〇年西南の役には池辺吉十郎、大里八郎らと熊本隊を組織して薩軍に投じ、各地に転戦敗れて一〇年の刑に処せられ幽囚の生活を送り、病の故をもって一三年赦免された。

佐佐友房

佐佐は「海内詭激放蕩の論起る」時代の風潮を憂え、「一世の元気を振起し以て、わが国権の拡張を謀らん」と高橋長秋、高岡元真らとはかって熊本市高田原に同心学舎を創立。一四年規模を拡張、組織を整えて同心学校と改称、生徒も一〇〇余名になったが、この年一二月財政窮乏の極ついに廃校となった。

一四年、津田静一、古荘嘉門らと皇室中心主義、国家主義の政党紫溟会を組織して自由民権の諸党と対抗する。

一五年二月佐佐は同心学校を済々黌と改称して再興する。済々黌は佐佐の皇室中心主義、国家主義を建学の精神とした。初代黌長は伯父の飯田熊太を推して自らは幹事となる。二〇年第二代の黌長となる。二一年女子教育の必要を痛感して付属女学校を設立した。

二二年佐佐は黌長を辞任、後事を三代黌長木村弦雄に托して政界に進出、国権党を組織、総理に古荘嘉門を推し、副総理となった。二三年帝国議会が開設されるに及び、同党から出馬、衆議院議員となり三九年死に至るまで連続当選して議席を占めた。その間二五年西郷従道、品川弥次郎らと国民協会を、二六年大井憲太郎と大日本

協会を結成するなど佐佐は一貫して皇室中心主義、国家主義を主張した。

竹崎順子

内藤儀十郎（弘化四年～大正八年）　熊本市に生まれる。安政四年時習館に入り慶応三年居寮生となった。一〇年西南の役には佐佐友房と共に熊本隊に参加し薩軍に投じ敗れて三年の幽囚の生活を送った。一六年佐佐の招聘で済々黌の幹事となった。

佐佐はかねて女子教育の必要を痛感していたが、二一年「凛然たる貞操節義を有する日本女性」の養成を標榜して済々黌付属女学校を設立して内藤を校長に推した。義務教育の小学校でも女子の就学率がやっと一五％という時代に私立女学校を経営していくことは容易ではなかった。内藤は教師や生徒達と自ら養蚕をやって学校の維持費にあてるなど経営に苦心した。

二四年付属女学校は尚絅女学校と改称した。このころ尚絅女学校は裁縫の一斉教授という新しい教育法を打ち出して全国的に校名は響き、近県はもちろん、関西あたりからの入学者も少なくはなかった。

三二年高等女学校令により、県立女学校設置の要に迫られた県は尚絅女学校に県立移管をたびたび要請したが、内藤は学園独自の校風を維持するために、あえて苦難の多い私学経営の道を選んだ。

四四年尚絅女学校が財団法人となり、経済的基礎も確立された。内藤はこれを機に校長の職を退いて校主となった。大正五年尚絅女学校は拡張のため市内大江町の現在地に移転することになった。内藤は老軀をおして寄附金募集や工事の監督にあたっていたが新校舎の竣工をまたず八年病にたおれ長逝した。

竹崎順子（文政八年～明治三八年）熊本県上益城郡津森村に生まれる。横井小楠の高弟竹崎茶堂の妻。夫を扶けて農事や教育につとめた。茶堂明治一〇年没。順子二〇年キリストに入信、二二年徳富久子らが設立した熊本女学校の世話を引受けた。時に順子六〇歳。順子は生徒と起居を共にしながら経営に努力、拡張して私立熊本女学校と改称、初代校長海老名弾正、二代蔵原惟郭のもとで舎監となり生徒の訓育にあたった。三〇年推されて三代校長となった。

順子の教育信条は一、自分は無学で不束者故、良教師に頼むこと一、何十名という女性、凡て大切な人の子であるから、一様に見ゆるように愛していかねばならぬ。一、決して無暗に矯め曲めをせず、自然のままに教育をすること。一、柔術の教えでいわゆる愛でいくこと（決して劇剤を用いずに一人も屑を出さぬこと）であった。

順子は愛、つつしみ、忍耐を己れの修養の目標とした。愛と誠をもって順子は女子教育に献身、教え子から慈母と慕われたが、三八年破乱の一生を終えた。

徳富蘇峰

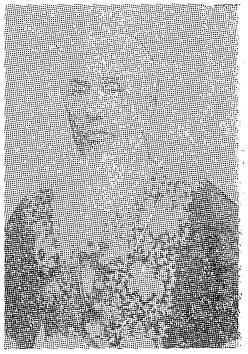
徳富蘇峰（文久三年～昭和三三年）　本名は猪一郎、父は一敬、横井小

楠の高弟兼坂止水塾、熊本洋学校を経て京都同志社に学び、明治一三年帰郷、一五年熊本市で大江義塾を開いた。

大江義塾は自由主義に立脚した学校であった。「夫レ大江義塾ハ唯一ノ将師ヲ有セザルモノナリ。而シテ全算ヲ挙ゲテ皆将師ナリ。夫レ大江義塾ハ唯一ノ響導者ヲ有セザルモノナリ。而シテ皆響導者ナリ。夫レ大江義塾ハ唯一ノ救主ヲ有セザル者ナリ。而シテ一塾ヲ挙ゲテ皆救主ナリ」と、徳富は自らしるした。生徒はその盛時には百人を超え近県からの入学者も多かった。しかし、保守派の圧迫などで転学、退学が続出し、ついに一九年徳富は大江義塾を閉じて上京、「将来之日本」を出して文名一時に高まった。二〇年「国民之友」を創刊。二三年「国民新聞」を創設。二八年三国干渉を機に国家主義を唱え、大正にはいって皇室中心主義を標榜した。昭和四年国民新聞社を退社、毎日新聞の社賓となった。著書は「近世日本国民史」百巻の他多数がある。

井上毅（天保一四年～明治二八年）　熊本市に生まれる。一〇歳時習館に入り二〇歳居寮生となり、慶応三年藩命により江戸に上り横浜でフランス語を学んだ。明治四年司法省に入り、内閣書記官長、制度取調御用掛を歴て二一年法制局長官、二六年伊藤内閣に文部大臣となり、実業教育の振興、女子教育の充実、学校の体育衛生の振興に努力した。この間、井上は軍人勅諭の起草、伊藤博文と憲法草案を起草し、また元田永孚と協力して教育勅語を起草した。教育の基本理念と実践徳目を規定した教育勅語が、昭和二〇年までのわが国の教育に及ぼした影響ははかりしれぬものがあった。

井上毅



元田永孚

井上は明治政府の多くの内政問題、外交問題に関与したが、はなやかな政治の舞台で活躍することはなく、陰の人として過し、明治の政治史に大きな足跡を残した。

元田永孚（文政元年～明治二四年）　熊本市に生まれる。一一歳時習館に入り、二〇歳居寮生となった。当時の居寮長が横井小楠であった。天保一三年長岡是容、下津休也、荻昌国らと実学校の会読会に参加して大いに小楠に啓発された。明治元年東北作戦に際して元田は御用側人兼奉行となっていたが、出兵論を建議して容れられず辞職、私塾を開いた。

明治三年召命により明治天皇の侍講となり帝王学を進講することになった。一二年聖旨を奉じて幼学綱要を編さんし、一五年完成した。二三年井上毅と協力して精魂をつくして教育勅語の起草にあたった。二三年一〇月教育勅語は発布された。儒教主義に基づいて国家主義で貫かれた教育勅語が昭和二〇年八月までわが国の教育界に与えた影響の大きさは、はかりしれぬものがあった。

元田はその後宮中顧問官、枢密顧問・宮内省御用掛を歴任した

が、嘗て副島種臣は元田を〝明治第一の功臣〟と評した。元田の天皇玉成の功を知るに足る。

谷口長雄（慶応元年～大正八年）　松山県に生まれる。二二年東京帝国大学医科大学を卒業後県立松山病院長となり、二八年熊本県の招聘により県立病院長として着任、時に三一歳。

谷口は病院長として病院の整備充実をはかり診療の向上に努め、老朽病舎の新築移転を県に具申してその実現に奔走し、明治三四年当時としては最新の設備をもった国内有数の総合病院がついに実現した。

これよりさき、谷口は明治二九年、廃校寸前の悲境にあった九州学院医学部を坐視するに忍びず、同医学部長高岡元真らと私立熊本医学校を設立、学校長となった。三六年同校は専門学校令により熊本医学専門学校となった。これが現在の熊本大学医学部となるのである。

谷口は病院長、学校長の劇務のかたわら医学研究につとめ多くの学術論文を発表するなど県医学の向上に尽力、医事衛生の発達につとめその徳望は大きかった。

百瀬葉千助（明治六年～大正一〇年）　北海道余市町に生まれる。明治三五年札幌農学校卒業、三六年阿蘇農業学校に赴任した。百瀬は生徒の教育、学校経営にのみとどまることなく、肥後赤牛、和馬の改良に着眼してその推進に努力し、低迷していた県畜産界を振興して、現在の全国有数の畜産県となった原動力となった。

また農民に対しても懇切に農法の指導にあたったばかりでなく、身上相談にもあづかるなど地域の産業開発に尽力した。

なお当時としては全く例のなかった学校林を二七町歩阿蘇の原野に設置するなど、学校経営にすぐれた手腕を発揮した。

吉田惟孝（明治一二～　）　富山県に生まれる。明治三九年広島高等師範学校英語部卒。高田師範、池田師範、鹿児島女師、鹿児島県立高女に歴任、大正九年島根県師範学校長から熊本県の招聘によって同年一一月熊本県立第一高等女学校長となった。一〇年吉田はかねて興味のあったダルトン方式教育を中心に欧米の教育事情を視察して帰朝した。学校生活はデモクラシーの精神に基づいたもの、デモクラシーの精神を涵養し得るものでなければならぬ、という吉田は、「自由・協同」の原理に基いて、慎重な計画と周倒な準備のもとに、大正一一年ダルトンプランを実施した。全国的に教育界の注目を惹いた同校には参観者が殺到した。しかしこの新教育に対しては疑問や批判もあって、大正一四年吉田の北海道への転勤などによって熊本ではダルトンプランは開花することなく姿を消した。

吉田の著書に、日本におけるダルトン方式の最初の研究書の一つである「最も新しい試み、ダルトン式教育の研究」（大正一一年）のほかに、「指導案例に重きを置いたダルトン式学習の実際」（大正一二年）などがある。

熊本県の教育の発展にいままで数多くの有名無名の人々が尽してきた。それらの人々のなかには、当然この稿で挙げねばならない人も多いが、紙面の都合で割愛した。

本県の教育史については、熊本県教育会編「熊本県教育史」全三巻（昭和六年刊）が詳しく、熊本県編「熊本県史」全六巻（昭和二六～四〇年刊）は戦後までを含んでいる。

（熊本県立図書館資料課長）

第10回

人物を中心とした

大分県教育郷土史

県花‥‥豊後梅

利田正男

風土と県民性

大分県は、きわめて複雑な土地条件に加えて、中世、九州の大半を支配した大友宗麟一族がむなしく壊滅したあと、徳川時代にはいるや、次のような数多くの藩に寸断されたのである。すなわち豊前は、中津領（奥平）・時枝領（小笠原）・宇佐神宮領（家光寄進）に、豊後は、府内領（大総）・岡領（中川）・臼杵領（稲葉）・佐伯領（毛利）・杵築領（松平）・日出領（木下）・森領（久留島）・立石領（木下）・肥後領（細川）・延岡領（内藤）・島原領（松平）・および幕府領、以上の所領いずれも十万石以下の小藩に細分され、しかも、親藩・譜代・外様の諸大名が互いに抑制し合うように配置されたのである。したがって、今日なお大分県人はおおむね閉鎖的で島国根性をいだくといわれるが、このような通説は、多年分割支配の中にあったための推論に根拠があるようである。他面、県出身者は、周辺をとりまく黒田・細川・島津および鍋島などの大藩に対する反発もあり、維新以後、小さなからを破って雄飛しようとする激しさを秘めているともいわれている。さらに、古い宇佐八幡文化の影響や、東九州に君臨した大友一族による南蛮文化との接触があって、他地域に見られぬ特殊な人文的風土ができ上がったのではあるまいか。またそうしたものが底流にあってこそ先見的な素質がつちかわれ、時に風雲に乗じて大をなすに至ったとも考えられるのである。

江戸時代中期以降の教育

まず藩政時代の教育の場としての藩校と代表的な教育家および私塾を列挙してみよう。

岡　藩（輔仁堂、のち由学館）　関　幸輔
中津藩（進修館）　野本雪巌
佐伯藩（四教堂）　高妻芳洲
日出藩（稽古堂、のち致道館）　米良東嶠
臼杵藩（進成館）　武藤吉祥
府内藩（遊焉館）　阿部淡斎
杵築藩（学習館）　元田伯倫
森　藩（修身舎）　村上作夫
豊後島原藩（涵養学舎）　鴛海米岳

以上がおもな藩校であるが、私塾としては、豊後の三賢といわれる三浦梅園、帆足萬里、廣瀬淡窓の家塾をはじめ、鶴崎の毛利空桑塾や、福沢諭吉が漢書を学んだ中津の白石照山塾などがきわだつ存在であった。

梅園・萬里・淡窓

豊前豊後すなわち二豊の地は、近代日本の先駆者、幾多の人材を輩出したところである。中でも前述の三浦梅園、帆足萬里、および廣瀬淡窓の三賢が傑出し、ともに県人が誇る碩学であり、偉大な教育家であった。

三浦梅園

梅園は杵築藩の出身（一七二三年―一七八九年）で、はじめ藩学の綾部綱斎や、中津の藤田敬所に師事したが、間もなく郷里に帰り、独学で天体の運行を科学的に究明し、さらに梅園哲学といわれる思想体系を樹立した。また数多くの門下を育成している。

帆足萬里は、日出藩家老職の家に生まれ、（一七七八年―一八五二年）梅園に私淑し、脇蘭室（日出町豊岡出身）に入門、蘭書を読破して窮理通を完成した。なおこの門からは、元田伯倫、さらに物集高世などの英才がでている。

廣瀬淡窓は、日田の天領出身（一七八二年―一八五六年）で、幼にして四書の素読を終わり、その後亀井南冥を師としたが、よわい二十四歳にして家塾を開いた。以後約五十年間、家塾咸宜園の学風を慕い全国六十五か国より集まる門下生は三千人をこえ、大村益次郎、長三洲ら多くの俊秀が育てられた。まことにすぐれ

た教育者である。

その他、中津藩出の蘭学者、前野良沢を忘れてはならない。彼が江戸鉄砲洲の藩邸に生をうけたのが、奇しくも梅園と同じ享保八年であった。良沢は蘭学を志し、杉田玄白らとともに、オランダの解剖書を手引きとして、解体新書を翻訳し、近代医学の発展に寄与した。

なお天文・地理・算数学を修め、後進の便に供している。

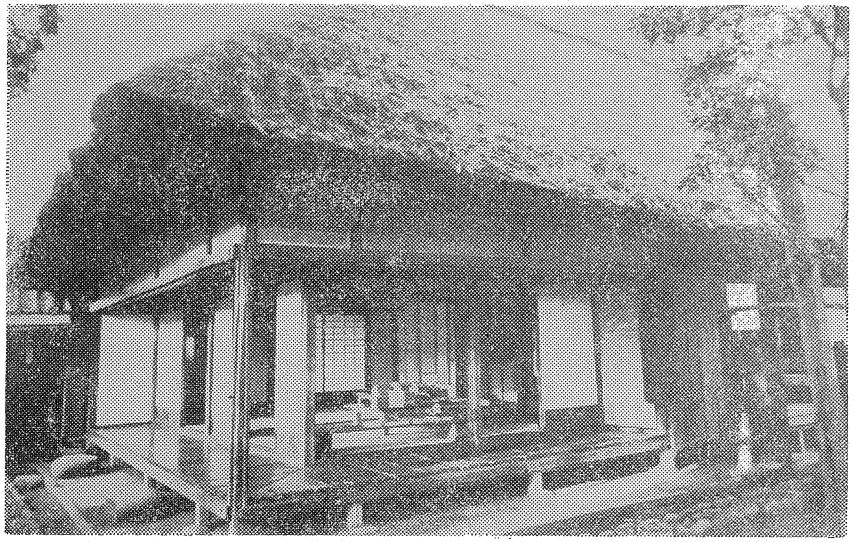
帆足萬里

福沢諭吉

諭吉は天保五年、大阪堂島の中津藩蔵屋敷に生まれ（一八三四年―一九〇一年）、三歳にして父を失い、母子ともに豊前中津に帰る。十四・五歳ごろ白石照山塾に漢書を学ぶ。安政元年二十一歳にして、蘭学に志し、長崎に遊ぶ。翌年大阪の緒方洪庵塾にはいる。安政三年兄を失い、いったん帰藩し、間もなく再度上阪、洪庵塾の塾頭となる。安政五年江戸中津藩邸中屋敷に塾舎を設け、蘭学の教授に当たりつつ英学を学ぶ。米欧を巡遊して慶応二年に「西洋事情」を出版した。その後、塾舎を芝新銭座に移し、さらに慶応三年江川太郎左衛門の塾舎を改築後、翌慶応四年に至り慶応塾舎と称した。明治四年には、三田山上の島原藩邸を買い、年移って現在の大学となったのである。彼は藩邸で教授以来実に四十五年間、塾生の薫陶に当たり、その間政府の召命にも応ずることなく一平民をもって甘んじたのである。なおこの間時事新報を発行し、天下の大勢を達観、国民の動向を善導し、大いに社会を啓蒙した。「独立自尊」は諭吉の言行理想であり、晩年（明治三十二年）修身要項二十九目を編集し、世人を警醒した。

この諭吉の門下生であり協力者として、同藩出の小幡篤次郎と

廣瀬淡窓



淡窓の私塾・咸宜園

浜野定四郎をあげることができる。小幡は中津進修館出身で、野本白巌（雪巌の子）に師事したあと、諭吉の塾経営を助け、塾長の職についた。浜野は、はじめ諭吉について洋学を学び、明治四年中津に市学校が開設されるや初代校長に就任し、ここで、山本達雄・金谷範三・横田国臣などを育てたあと諭吉に招かれ慶応義塾の教頭をつとめた。

福沢諭吉

その他維新前後の教育家

元田直は、天保五年生まれで諭吉と同年の人。杵築藩学習館教授元田伯倫の長子で、明治七年わが国法律学校の嚆矢である法律学舎を設立。法曹界の大先達でもあった。明治十五年以降は官を辞し、国学・漢学の振興をはかった人で、その養嗣子が元田肇（国東）である。元田国東も東京に英吉利法律学校を創立し、人材

を養うかたわら台閣にも列した。

横井忠直は、弘化二年生まれで、中津進修館の学規振興に尽くした人。明治初年には陸軍大学校教授に任じた。

岡松甕谷は、文政三年生まれで、高田村（現大分市内）出身、帆足萬里の門にはいり、後に昌平校の教授をつとめた。その子が民法・国際私法の権威岡松参太郎である。

鴛海米岳は、文政二年生まれで、西国東郡草地村の人、豊後島原領藩学の都講に任じ、遠く京摂の地から集まる門下生などを教えた。門下から、後大審院長の横田国臣や、後参謀総長となった金谷範三がでている。

物集高見は弘化四年杵築藩元田伯倫の門下物集高世の子として生まれ、独学で古典・国史の蘊奥をきわめ、明治以降、文部・内務・宮内各省に出仕のあと、多年東京大学で、国語・国文学・国史学を担当した。なお彼は「日本大辞林」の編集に当たっている。

楠文蔚は文政十一年佐伯藩医の家に出生。一時江戸の佐藤一斎に師事したが、間もなく帰郷し、改めて日出藩の米良東嶠に学んだあと、佐伯で家塾を開く。この門から、改進党の創立者矢野文雄（竜溪）や、箕浦勝人（青州）などがでている。

明治以降の人脈

大分県は、経済的に、決して富裕な県とはいい難い。しかし前述のような多くの先覚者を生み、文化的水準必ずしも低くなく、恵まれた教育風土にあるといえる。明治以降の知名士をあげると、官界・政界・財界・学界等を通じ多士済々である。まず福沢諭吉の系列にはいる中上川彦次郎や荘田平五郎をはじめ、山本達雄、井上準之助、松田源治、和田豊治、磯村豊太郎、朝吹英二、横田国臣、元田肇、末広厳石（末広厳太郎の父）、木下謙次郎、後藤文夫、中根貞彦、重光葵、一万田尚登等々、軍人には、金谷範三、河合操、南次郎、梅津美治郎、阿南惟幾等参謀総長や陸相があり、広瀬武夫、豊田副武、堀悌吉等海軍の偉材も枚挙にいとまがない。芸術家としても、田能村竹田を生んだ岡藩から彫塑の大御所渡辺長男、朝倉文夫の兄弟や音楽の滝廉太郎がでている。その他洋画の片多徳郎、日本画の福田平八郎など人脈は尽きない。この点ではまことに出色の県というべきであろう。そしてこのような人脈の根源をたどれば、すべてが歴史的な藩学精神に結びつくようである。

学制発布以後の教育者群像

学制発布直前にさかのぼって特記すべきことがある。すなわち、発布の前年明治四年に、時の県参事のちの知事森下景瑞は郷土の先覚者である福沢諭吉を招いた。この時、諭吉は森下の諮問に対し「学校取建之記」を示している。森下はこれを準則として用い、学校設立の告諭を発しているのである。諭吉の示したものをみると、課業表に「学問のすすめ」や「西洋事情」などが記載されてある。学制発布に当たって時の文部大丞の長三州（咸宜園出身）が来県視察の結果、新学制の趣旨に合致するよう多少修正

の余地ありと指摘しているが、森下参事は他県にさきがけて、比較的に整った内容のものを告諭としている。このような事情もあって大分県は教育に関する限り先進県をもって任じている。なお、諭吉の「学校取建之記」によれば、規則の中に、師弟の交わり、登下校の時刻、服装に関する規制や、冬季、夏季の長期休業が詳細に規定している。特に長期休業の規定は、今日実施されているものとほとんど一致している。これは、諭吉が西洋事情をもとに、大分県に示したものであるが、そのまま現在も全国に適用されていることがわかるのである。

かくして、県では、各学区ごとに小学校を設置することになったが、明治六年度中には、合計九十四校を数えるに至った。一方教員養成機関としては、当初明治七年に、旧府内藩校遊焉館改め府内学校を、師範学校伝習所として発足させ、明治九年に校舎を新築して、大分県師範学校と改称している。またこの年、森下県令は、医学校設立を提唱しているが、実現をみたのは、明治十三年であった。なお中学校は、明治十一年以降、数か所に設けられていたが、明治十八年創立の大分中学校が、教育令による正規の中学として最初のものである。

さて、明治十八年に創立をみた大分中学校に迎えられた初代の校長は、大分県士族の村上田長であったが、彼は在任一年で、翌年には、大分師範学校第七代校長に転任し、さらにその翌年には郡長に転出している。この人は、円満な老学者風の教育家であったが、また行政手腕家でもあったようである。この村上校長の後を襲って、大分中学校第二代校長となり、さらに翌明治二十年師範学校第八代校長に就任したのが、後の文部大臣鎌田栄吉である。鎌田は、福沢門下の逸材で、着任当時は弱冠二十八歳であった。しかも県は彼を遇するのに前任者の俸給の倍額を支給している。鎌田校長は、県教育界に新風をもたらした。特に生徒の興味をひいたのは校長訓話であった。内容は、独立自尊・国民の義務・参政権・国会開設の必要などを説き、新しい時代に処するための個人道徳や、時事問題を取り上げていたとのことである。また、アメリカの独立戦争や、フランス革命を論じたり、フランクリンの自叙伝が出るかと思えば、次はワットの発明苦心談というぐあいに、新知識を遺憾なくひろうした。その博識と、いつも変わらぬ端正なモーニング姿に当時の生徒はまったく魅せられたようである。その上、校長自ら習字や英語と修身を受け持つことを宣言し、実践したので当時の在学生の印象を強めたようである。

鎌田校長のほか、師範学校第十六代の校長に、鍋是三郎がいる。鍋校長は、佐賀出身で、明治四十年より引き続き十三年間にわたって校長の重責にあり、かたわら、「応用心理学」、「学校管理法」、「新編地文学」等の著作に当たった。他面、明治俳壇に、青風と号して活躍し、多くの教え子から敬慕された。

次に師範学校出身の変わり種として、上原鹿造と一松定吉がいる。ともに法曹界および政界に活躍した人である。上原は明治十九年の卒業で後に全国弁護士会長をつとめている。一松は、郷里西国東郡で、しばらく准教員をつとめ、明治二十四年に師範に入

学している。在学中、史実の解釈をめぐって教師と論争し、ついに、転向を決意した。後判事試験に合格し、大阪在任中は、鬼検事の異名をとっている。晩年国会活動にはいり、建設・厚生の各大臣を歴任した。

政界にはいった人といえば、明治三十五年卒の**松原一彦**も、変わり種のひとりであろう。彼は、教職のあと、日本青年館主事として、郷土出身の後藤文夫や、田沢義輔等と組み、本来の業務のほか、多年選挙粛正の全国運動を展開した。戦後は、国会に席をおき、正常な教育振興に尽くした。なお、日本退職公務員連盟を結成し、会長として縦横に活躍したが、惜しくも八十五歳でこの世を去った。

異色といえば、兄が教育畑を歩み、弟は、軍人という組み合わせで珍しい例がある。そのひとりは、明治十五年卒の**河合精一郎**で、郷里杵築で校長をつとめた後、明治四十一年に、海外日本人教育者の先駆となり、京城居留民団第一小学校長をつとめ、帰国後も久しく教育界の元老として扱われた。この人の実弟が、**河合操**大将である。また、明治三十五年卒の**矢野孝吉**は、河合と同郷でもあるが、先輩**松本鏇三**郎に従って、渡鮮、帰国後も、大分市内の各校長を歴任した。矢野は退職後、県の人事委員に任命されたり、退職公務員の世話に当たるなど、世の信望を集めたひとりである。彼の実弟が**堀悌吉**で、堀は、**山本五十六**元帥との親交が深く、同期の最右翼として将来を嘱望されていた。しかしロンドン会議随員当時の責を負って、惜しくも中将で予備役に編入され、その後多年浦賀ドック社長として敏腕を振るった。なお、矢野を朝鮮に引いた**松本鏇三郎**の場合、兄弟ではないが、血族に南**次郎**大将がいる。以上**松本**、**河合**、**矢野**の三人が、いずれも三将星に劣らないすぐれた教育者で、ともに日本教育の海外浸透を図った点で、共通しているが、そろって将星を肉身にもつことはまことに奇縁である。

次に県外で顕著な教育活動を続けた人びとをあげる。明治三十年卒の**阿部七五三吉**は、東京高師に学び、雑誌「教育研究」で知られ、明治三十一年卒の**藤五代策**は、東京女師に籍を置くかたわら、工作の教科用図書や、参考書を出した。また明治三十二年卒の**安東寿郎**は、理科教育で、後輩の大正十年卒**岸一敬**などとともに東都で活躍した。大阪方面では、明治三十四年卒の**岩崎佐一**がいる。彼は、出身地佐伯で、青年時代、近くに住む佐伯中学教員の国木田独歩と親しみ、独歩から「教育と遺伝」の書を借りて読み、これが動機となって、方向を変えた。間もなく大阪で精神医学を修め、大正五年以来、桃花塾を開き、精神薄弱児救済事業に専念した。

明治三十五年卒の**兼子鎮雄**は、大分郡中判田出身で、**松原一彦**と同期生であった。彼は典型的な教育者であり、比類のない努力家といわれた。卒業後付属小学校に勤務中、難関といわれる文検に応募し、わずかな期間に、倫理・教育の二科目に合格した。やがて、鹿児島師範教諭に招かれ、大正二年には、師範卒業十年目に鹿児島県視学として異数の抜てきを受けた。これが彼の真価を

発揮する機会でもあった。時の県教育界を大いに啓発するところとなり、彼の高い見識と非凡な才腕は高く評価された。数年後には、学級数九十、児童数四千五百人のマンモス小学校長に起用され、ここで十八年間彼は才腕をほしいままに発揮した。とかく封建性の強い教育社会にあって、移入教員が、このような地位を占めたことは地方では珍しい。この間、東京の教育記者による推選日本一の小学校長に選ばれ、辞任後は異例の記念像が建設されたというのも彼の余徳であろう。彼は、昭和十二年郷里に帰り、別府市立中学校の初代校長に就任、六年後に功成り名を遂げて現職から退いた。

学校教育のみでなく、社会教育・社会事業の面の幅広い活動家として次の人びとをあげる。

明治三十二年卒の大分郡庄内出身で、**小野拡**は、県視学を経て、最初の社会教育主事を拝命した人。県内青年団・婦人団体の育成に献身した。明治三十四年卒の**森真証**は、玖珠町出身で、小・中等学校長退任後、地域の零細農民の救済に八方奔走した。

明治三十八年卒の**古井六彦**は、小学校長在任中より、精力的な活動家として知られ、特に、地元出身の**久留島武彦**らと協力し、ボーイスカウト育成に力を注ぎ、海外にも派遣されたことのある有力な指導者であった。

初等・中等教育を通じ、ことさら派手な活動もなく、一見平凡に見られながら、教育に生涯を**捨**けた人は少なくない。**首藤敬太**氏の「大分県教育史談」によれば、近**藤卓爾**、佐**藤磯八**、深田徳三、富田武馬、小野京一、惣川猪之吉、川上貫一、小野由之丞、宇都宮喜六、広瀬幸吉、坂本逸男、牧源太郎、福田潤などがそれに当たる。

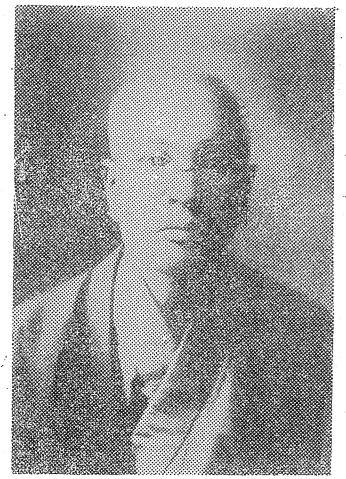
特殊な研究で知られた人は数多いが、初等教育で、算術指導法の権威といわれたのが、明治二十八年卒の**吉良荒太**である。彼は、別府の算術校長の異名をとり、全国から参観者が詰めかけ、それが契機となって、市当局が観光対策を練ったといわれる。

なお、師範出身の学者としては、大正四年卒で、デューイ研究の文博、**永野芳夫**や、女高師校長などを経験した理博、稲荷山資生などが、古参である。

芸術教育では、明治三十八年卒の**首藤積**（雨郊）が、名作を残すとともに、県下の中等教育に尽すいした。現代日本画壇の重鎮、福田平八郎を見いだしたのも恩師の首藤である。

郷土史研究では、明治四十一年卒の**北村清士**をはじめ、大正初期卒の**大塚富吉**や**立川輝信**があげられるが、独学で中学教師となった**久多羅木儀一**郎などとともに、在職中から退職後にかけて精力的な研究を続け、地方文化の発展に貢献した。

郷土史研究家として前にあげた人びとの中で、多くの業績を残した**北村清士**は、大正五年文検に合格後、一時鹿児島に出向、二年後に帰県以来、昭和十三年まで県内中等学校に籍を置いた。退職後郷里の竹田市立図書館長を長くつとめた。彼の功績は、顕著で、文部大臣表彰をはじめ、数回にわたる受賞歴がある。彼の表彰理由は、海外における日本研究の資料提供と、地方文化進展寄



山田小太郎

与の二つである。さて、彼の著書・訳書の一部である「大分県キリシタン史料」、「農民一揆」、「岡城と滝廉太郎」などが、遠く西ドイツのボン大学や、米国のコロンビア大学、ハーバート大学・カリフォルニヤ大学その他各国の一流大学研究室から注文を受けている。日本研究に当たって好個の資料となるようである。その他、彼のおもな著書を列記してみよう。「直入郡全史」、「竹田偉人伝」、勤王家「小河一敏年譜」、「広瀬中佐年譜」、「角田九華と雲華上人」、「田能村竹田百二十年誌」、「江戸城と岡藩」、「摂海湊川警備と岡城」、「高山彦九郎と竹田」、「南豊先哲偉人伝」、「清原雄風歌集」、「西南戦役血涙史」、「阿南大将を偲ぶ」など合計三十七部に及ぶ。晩年竹田図書館長に迎えられるや、「文化都市のシンボルは図書館だ」との信念にもとづいて、鋭意、施設や内容の充実に精魂を打ち込んだ。この熱意に動かされた郷土出身の実業家が巨額の資金を提供するに及んで、市当局は、本格的な改築にかかり、今では、小都市に珍しく、内容のある図書館ができ上がった。

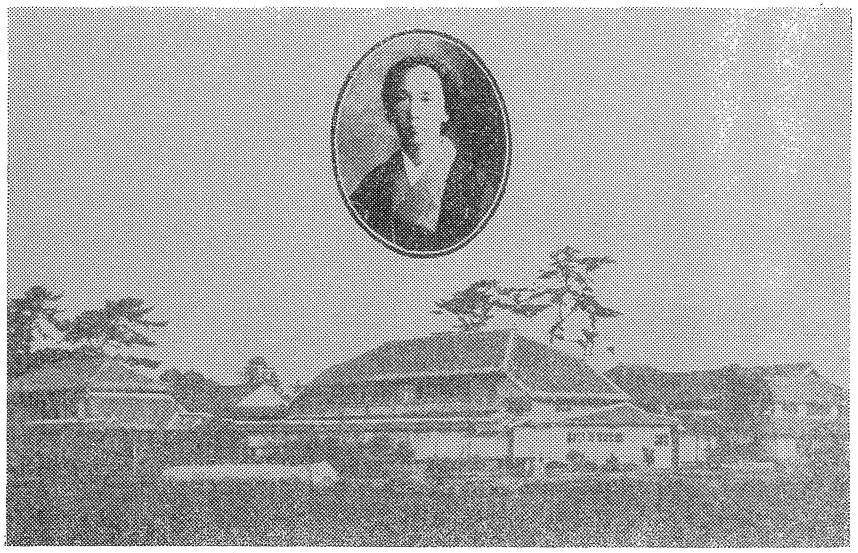
ここにひとり明治の教育者を代表する風格をもった人を紹介しよう。中津藩出身の山田小太郎である。彼は、安政六年に生まれ、西南の役中津隊の首領であった増田宋太郎の甥で、福沢諭吉とは母が再従兄弟の間柄であった。幼にして中津市学校に入学、さらに東京英語学校に学び、英語教師としての素養を積んだのは、系累の諭吉の影響であろうか。明治十一年以降は中津に帰り私学を経営した。明治二十六年より十年間は、大分に移り、尋常中学で教鞭をとっている。この人の特徴は、非常に個性が強く、生徒にとって大変な魅力的存在であったようである。彼は、モットーとする「修徳と養健」を文字どおり地で行く教育の実践家で、常に生徒とともにあるタイプの人であった。晩年請われて大分県学生寮の寮監をつとめたが、終生妻帯せぬまま昭和十三年、八十歳の生涯を終わった。後年、教え子の後藤文夫（元副総理、内相）、中根貞彦（元三和銀行頭取）、村上巧児（元西鉄社長）、津末良介（元代議士）等、数百名が、謝恩の催しや、旧師を顕彰する出版物を出している。これをみると、山田は、単なる語学教師でなく、人間教師として、明治の教育者を代表する一種の風格の持ち主であったと推測されるのである。

次に女子教育家としてあげられるのは、岩田英子である。明治六年に生まれ、大分小学校在学中より、大分中学の外人教師ウエ

ンライトについて英語を学ぶなど、向学心に富む少女であった。明治二十三年、夫計二郎の没後、しばらく大分幼稚園に教鞭をとる。明治三十二年上京し、渡辺裁縫女学校に学び、翌三十三年帰郷早々七月に、独力で、私立大分裁縫伝習所を開設した。その後、着々と整備を進め、明治三十四年に大分裁縫学校・明治四十二年に私立岩田女学校と改称、ついで明治四十四年私立岩田実科女学校として認可された。この時には、すでに生徒数一千をこえるまでに発展させている。まことに驚異的な努力であり、また偉大な功績である。この岩田女学校と前後して、大分の私立豊州女学校・中津の扇城女学校・宇佐の柳浦女学校などが開設された。当時の私立学校は、おおむね個人の経営によるものが多く、したがって消長もあったが、私立岩田高等学校は、制度改革後の今日もなお近代的校舎を整え、隆昌を続けている。英子は、昭和七年、六十歳で没しているが、この隆昌は、女史が創立以来三十有余年にわたり、女子教育に一生を捧げた賜物といって過言でない。

なお、前記の私立豊州女学校は、初代校長小野田由之丞によって経営されたが、戦後別府に移転し、別府女専・別府大学・付属中・高等学校が、佐藤義詮学長・理事長によって、総合的に運営されている。

高等専門教育については、大分高等商業学校が、大正十年に創設された。かつてキリシタン文化はなやかであった大分の地に、アカデミックな空気が注入されたのは、当時の県民にとって大き



岩田英子・創立当時の岩田女学校

な喜びであった。この初代校長として山本裕作が来任したが、惜しくも二年余で病没した。これが今日の大分大学経済学部である。

特殊教育機関としては、盲唖学校令施行以前、明治四十一年に私立盲唖学校が設立された。設置者は、森清克で、この人は、日露戦役に出征し、乃木将軍指揮下の連隊旗手をつとめた青年将校であった。不運にも敵弾を受け失明したため、余生を盲教育に捧げたのである。しかし個人の経営が困難となり、外部の援助を求めるに至った。明治四十三年、大分県教育会の手に移り、さらに大正十年、県に移管された。しかしその後第二次大戦の終わるまで森校長は引き続き、約四十年間、不自由な身体を杖にささえられながら日夜運営に心を砕いていた。

その他、教育功労者として、岡藩竹田の人黒川文哲があげられる。彼は中川公の藩医の家に生まれ、長崎の医学校に学んだ後、郷里で開業した。しかし間もなく家業を他に任せ、もっぱら郷土の教育振興に尽くした。彼の業績で著しいのは、明治二十二年、彼の創意による教育衛生会を組織したことである。地域の衛生思想普及に寝食を忘れた変わり種である。また県立中学の設置や、竹田文庫の設立には巨額の私財を投じ、その実現に努力を惜しまなかったのである。

以上が本県における、人物を中心とした教育郷土史の大要である。逸材あまた輩出し、まだじゅうぶん書き尽くせぬうらみがあるが、一応おもな人材は紹介したつもりである。

昭和九年、竹田市、すなわち岡藩の城下で画聖田能村竹田祭が行なわれた。これに参列した徳富蘇峰が「大分県は偉人が多過ぎる」と言ったことが伝えられている。このあいさつは、単なる外交辞令と受けとれぬこともないが、この稿をつづるに当たり、現在、県教育に携わる身に鞭打たれる感がある。

参考資料

大分県政史刊行会「大分県政史」

首藤敬太編「大分県教育史談」

他、県内各郡志および郷土誌

（大分県教育研究所長）

おわび

前号（四月号）六六ページに掲載しました国際公教育会議勧告第六三号において、項目九が左記のとおりぬけておりましたので、ここに掲載いたします。前号九以下一七まで一項目ずつ送りになり、六三号は一～一八項目とあらためさせていただきます。

九　それと同時に、小学校教員と保健医学当局が協力して、（たとえば地域および地方的センターをとおして）父兄に対し周知させ、教育する措置がとられなければならない。

第39回

人物を中心とした

宮崎県教育郷土史

（県花はまゆう）

野口逸三郎

藩学の遺産

藩政時代の日向には、北から延岡内藤藩、高鍋秋月藩、佐土原島津藩、飫肥伊東藩があり、西南部諸県地方は鹿児島島津藩に属してこの中に都城島津氏が、いわば藩中藩をなしていた。その何れも禄高七万石を最高とする小藩で、その間に三十数か所の幕府領が要所に割り込み徹底した分断政治が行なわれて来た。弱小藩としての苦い経験が深刻であっただけに現状からの脱却に苦悩し、その打開の道は一にかかって人材の育成にあるとするに到った。安永七年高鍋藩主秋月種茂（上杉鷹山の実兄）は藩校をおこして明倫堂と名づけ、その健学の精神を明らかにした「明倫堂記」の終りのところで「治道ハ賢才ヲ得ルヲ以テ本トナス。而シテ学校ハ則チ人材ヲ養成スルノ地、治平ノ要コレヨリ大ナルハナシ」と書いている。教育内容は文武の二つ、とり分け文は朱子学を主とした漢学であるが、明治期に入ると洋学、医学をも取り入れている。明治初期の延岡藩でも、漢、洋、算の三科から成る廣業館、皇学所千穂の屋、医学所明道館の三校があって総生徒数六三〇名と称しているが、対象は依然士族の子弟であった、ようやく明治三年十一月に私塾を昇格させて郷学所にあて平民の子弟の入校を認め、また同年十二月に制定示達された飫肥藩内学校規則にも「平民ノ子弟と雖モ、志アル者ハ入学セシメテ授業スルコトヲ得。但町人等ハ主トシテ習字算術ハ家塾ニテ習フ事」とあるように無条件ではなかった

しかし教育内容が広げられても、それぞれの専門家を早急に揃え

ることはできないし、また藩校の教育を一層高めるためにも、留学生の藩外派遣が続けられた。前記飫肥藩規則に「遊学生凡二十人、寮生中ヨリ選抜シ、大略皇学三人、漢学、洋学各五人、医学四人、書画各一人ヲ目的トスヘキ事」の一項があり、恐らくこの規則に基づいたと思われるが、飫肥藩では小倉處平を英国に、壱岐宗淳を長崎病院に、米良雄平を慶応義塾に、小村寿太郎を貢進生として大学南校に送っている。同じ頃、延岡藩でも小林乾一郎外十四名を東京、横浜、大阪等に派遣し、さらに佐土原藩では明治二年から同三年にかけて、島津忠亮、丸岡武郎、橋口宗議、平山太郎、町田啓二郎、日高次郎をアメリカに三浦十郎、木脇良を独仏に遊学させ、その費用は賞典米をもってあてている。人材育成についての熱意の程が窺われるわけである。

このように藩校は藩士の子弟教育の場であるとともに郷校を管轄することによって教育行政の一面をも担当した。飫肥藩規則が「郷校ハ藩校ノ管轄タルベシ」と明記しているのはその例であるし、佐土原の学習館と郷学所、遠郷小学との関係もまた同じであった。

学制頒布をめぐって

明治四年十一月廃藩置県によって大淀川を境に美々津、都城の二県がおかれた。都城県の場合を見ると、明治五年三月郡政則程を定め、「学校ヲ設ケ人材教育専務之事。蓋学校ハ県治ノ制度ニ基キ、士民官費ヲ仰ガズ、有志ノ徒ヲ募リ創立致スベシ……」同月学校掛少属、小学頭、学校造立掛、を置いて学校開設の体制を整え、同四月から小学校を開いて士族の子弟を収容し、小学校は間もなく学校館と改称され、管内の郷校を指導統轄して行政機構の一面をも担った。なお「郷校生徒格別出精ノ者ハ精選ノ上小学校ニ召入ルベキ事」とあるによって郷校より小学校に入る道が開かれたことを知るのである。

美々津県でも調査準備に入っているが、こうした状況の下で明治五年八月学制が頒布された。この十一月美々津県大区長正副連名による通達には「此度学校廃セラレ候ニ付テハ向後学問致サス候トモ苦シカラス候ト相心得候テハ相成ラス候。人ノ人タル所以ハ学ト不学トニアル事ニテ、文明ト称セラレ、野蛮ト称セラルルノ因テ分ル、処ニ候。官其費用ヲ給シ玉ハサルモ、畢竟ソノ身ヲ立ル根元ハ自ラ勤学スヘキ事ニテ、人ニ依頼スヘキ事ニ非ル故ニ候」。藩校が廃止され、修学のための官費支給も停止されることになったが学問勉強は忽にできないとして私学開設を働きかけたもので、翌六年一月「延岡社学」が発足している。変則中学「亮天社」の前身である。同六年一月、美々津、都城両県の県域を併せて宮崎県の設置を見、学制に基く学校整備を新参事福山健偉の下で推進されることになった。まず実施体制を整えるために同年九月、庶務課の中に学校掛を置き、学務専任に第二大区長であった野村綱が起用され、その下に先に都城県で小学頭として実績をげた友野長祥、後金融界に重きをなした高鍋の堤長発等が配置されている、同年十一月十五日付県参事より第五大学区小督学宛の「宮崎県小学校則並課業表伺窺書」に添えた達書は、新県が直面した教育の緊急課題を端約に物語っている。即ち「……聖旨を遵守し学事隆興スベキトノ旨ハ旧県来屢告諭イタシ置通ニテ、従来設備廃ノ諸欠モ速ニ公規ニ改正スヘキノ処、教則ニ基キ授業ノ師ナク着手ノ時機ニ至ラス。然ルニ今般中属野村綱県内ノ土地ニ従ヒ活用ノ目途ヲ立、実際施行ノ適宜ニ斟酌シ、尋常小学、村落小学ノ教則ヲ表シ着手ノ順序ヲ定ム故□庁下ニ仮小学講習所ヲ設、学務係兼テ之カ教督□□トナリ、郡吏教員其他平民ニ至リ、公選ヲ以師範タルノ講習ヲ勤メシメ、速ニ管内一般ノ人民ニ教化ノ普及スルヲ要ス……」。なお、この「小学定則」は達書に引続き「校則」「教員ノ心得」「生徒心得」「課業表例言」を含み、課業表は尋常小学、村落小学各十六等級に分けている。かくてこの教則講習は小学講習所在勤となった東京師範卒業生中川亨、大阪師範卒業生中根英貫等を直接の指導者として七年十月から実施し、同年中に終った模様で、八年一月終了届が出されている。これより先き七年四月文部郷宛の伺書によると「……当県ニ於テハ昨年十月管下有志ノ徒を集メ小学校教員ヲ講習セシメ、其学力行状ニヨリ五等ニ分チ、皆之ヲ県庁ヨリ命シ、開業目的相違候各小学校ヘ分差致シ置候。未タ師範学校学科卒業ノ生徒数多御派出相成兼候□今後官私立学校教員モ右之次第ヲ以申進度候」。とあり県教則が正式決定され、その講習も終り、曲りなりにも教員資格認定が行なわれ、学校開設の指導準備体制が整ったわけである。更らに次の一文は宮崎学校設立を布告している。「昨六年十月学事改正已来、一同振起、遽カニ小学校ヲ設立シ、就学ノ徒尠ナカラス。然レトモ其教員ニ乏ク未タ完全ナルヲ得ス。又自今中学齢以上ノ徒猶学バント欲シテ志ヲ達スル能ハサルモノ多シ。之ニ依テ今般旧県庁ヲ以テ学校トシ、教師ヲ遠方ニ聘ク。文部省学務教則ヲ斟酌シ、当県適宜ノ規則ヲ定メ、来九月二日開業候条……此旨布告候也。明治七年八月九日県参事名」。教員養成と中等教育を兼ねた新らしい県営学校が設置を見たわけである。学務専任野村綱が校長事務を兼ね、教育実習のため附属小学校が置かれた。かくて宮崎学校は、開校日浅いにもかかわらず、よく県民の期待にこたえ、その影響は各学区の学事の普及を促すとまで評価され、翌八年には、四年制英学科増設の計画も決定を見ていたが、同九年八月宮崎県が鹿児島県治下に入るに及んで同年十一月宮崎学校を廃止し、宮崎郡町村組合立小学師範講習所と尋常小学校とがその跡に開始され、宮崎学校の名称だけが残される事になった。大きな後退といわなければならない。

一方県下小学校の設置は、どのように進行しつつあったか。明治七年二月、学務課野村、堤連名で県参事に差し出した建言書を要約すると、「小学校の設立は一校毎に督学局に伺い、その許可を受けて開業するのが規則の建て前であるが、学校設立は急を要するので、去年十月以来非常措置で本省の伺を経ずに適当と思われるものには開業を認めたところ、意外に振い、既に二百校ばかりになっている。今から設立伺を雛形通り出させたのでは凡そ一か月かかるし、将来の着手時機を失し、却って人民の不利にもなるので、これから設立の分は別として、今まで届の出ている分は表目にのせ、規則か条もなく調えて、一括届けることにしたい」。この意見に基ずいて提出した伺は、七年四月再度の提出によって聞き届けられている。小学校数百九十九校であった。引き続き同七年暮頃までは約六十余校が認可されている。その大部分が村落小学校であり、次で尋常小学、女児小学の順であった。明治六年六月県参事より太政大臣に提出した調書では小学校五校生徒数八百九十三人、郷校四十五校生徒数計

二千九百四十一人、女学校四校生徒数計百四十四人であったから数のうえからはまず順調な経過と言える。なお鹿児島県史第三巻に収むる明治八年の就学率は次表の通りであって、本県の就学率は鹿児島県をかなり上回っていることがわかる。

	学齢人口	公立小学	私立小学	明治八年学齢内就学	明治八年学齢外就学	同上計
宮崎県	三六、六三二	三七三	—	二〇、六六七	一、三三三	三、三四二
鹿児島県	一四〇、八八七	六九	—	一九、三三〇	九、八六一	二九、〇八一

しかしながら、明治九年八月宮崎県庁廃止によって、せっかく軌道に乗りかけた教育振興は半ば推進力を失い、加え十年西南の役は、県土の大半が直接戦場となり、校舎施設の多くが損壊し、あたら有為の人材が動員によって消耗し、学校の如きも一時休止の状態であった。

校長木幡栄周の委託をうけて都城小学校を預っていた高野安恒が「学事ハ一日モ等閑ニ附スベカラズ。今若シ此校ヲ閉サバ幾多ノ子弟ヲ如何ニセン」と残余の教員を督励して絃誦の声を絶たしめず、砲声日に近づくまで開校しなかった如きは、例外中の例外であった。

「分県運動請願書」は、この間の実情を如実に物語っている。

分県請願書「…曩ニ宮崎県ヲ置カレショリ学事一変、日二月ニ盛大ナラントセシモ該県廃止、継テ擾乱トナリ、校舎ノ破壊、器械ノ損失、各校其災害ヲ被ラザルナシ。為メニ休業殆ンド一周年、然レドモ新任地方官ノ保護勧励其尽力ノ至ルヲ以テ追々開業、幸ニ一時ハ挽回ノ状ヲ得タル如シト雖モ、尚方今ノ勢力ニテハ盛大ナラシム能ハザルノミナラズ、却テ頽廃セントスルモノ少ナカラズ、之レ畢竟学資ノ乏シキニ因ルヲ以テ目下如何トモスベカラサルモノノ如シ…」（明治十四年七月三十日）

教育も分県理由の一つの柱であり教育費の支出が如何に緊急の課題であったかが語られている。

宮崎県再置と初等中等教育の整備拡充

分県運動が実を結んで宮崎県再置が実現したのは、明治十六年五月九日であった、この運動は士族層によって指導されたものではあったけれども県民の自治意識高揚の機会になった点は高く評価されてよい。この時の県務引継書を見ると学事ハ概シテ不振ノ状況ナリ。其然ル所以ノモノハ、日向国ハ一体ニ学資甚乏シク、加フルニ人戸稀疎ニシテ僅ニ一二百戸ヲ以テ一学校ヲ設置スルモノ多ク、随テ其準備ニ欠ケルアル等ニ依レリ。……既ニ之ヲ制定セシモノ百七十一ニ至ルト雖モ、未定ノ町村及既定ノ学区ニシテ未タ其宜シキヲ得サルモノハ、更ニ学区ヲ区画シ校数ヲ指示シ及学校等位ヲ指定セント欲スルノ見込アリテ未タ果サヽリシ…」。とあって学区問題に終始している。其他の事項は「別号ニ悉セリ」とあるだけでその別号の書類不明のため、宮崎県政八十年史によって当時の本県教育情況を見ると次表の通りである。

就学児童は学齢児童の半数に達せず、しかも女児の就学率が極端に低く、日々出席平均も六〇％以下であり、有資格教員は僅に十九

明治十六年教育状況

学区数	304	
人口	382,431	男 196,660 女 185,771
小学校数	361	公立 360 私立 1
学齢人員総数	58,867	
就学者総数	24,062	男 18,094 女 5,968
日々出席生徒平均数	14,317	(59.5%)
教員数	793	訓導 15人 准訓導 4人 授業生 774人
中学校	2	変則中学
師範学校	0	町村立宮崎学校（台風校舎転覆開校ニ至ラス）
各種学校	2	町村立読書学校 1 私立外語学校 1
学務委員	289	専任 141 加員 148

人、中学校も師範学校も未設置というにいたっては不振と評する外はない。

学制頒布直後の意気込みが影をひそめている。再置された県の機構の中には学務課があり、学事、職事の二係の他に新たに小学督業係を加えて問題に取り組む姿勢を示した。文部属から学校課長に着任した遠藤正の最初の仕事は学区問題であり、師範学校の設置であった。明治四十年度版「宮崎県治概要」は、県再置後の教育情況を次のように要約している。「…。十六年再置ノ際ハ僅ニ小学校正教員十五名、児童ニ万ヲ有シ、施設ノ見ルニ足ルモノナク、経費ノ負担、児童ノ就学等ノ制整ハス、頗ル幼稚園ノ状態ニ在リタリ。再置県後、画策督励大ニ勉メ、漸次其ノ改善発達ヲ促シ、同時ニ各般ノ経営ヲ進ムル所アリ、十八年県立師範学校ヲ設置シ、創メテ小学校教員養成ノ途ヲ開キ、十九年日州教育会ノ組織成リ、廿二年県立宮崎中学校、廿六年県立獣医学校ヲ開設シ、廿八年県立宮崎中学校ニ農業専修科ヲ併置セリ…」。おくればせながら初等中等教育の整備が進められて行なったが宮崎県統計書によって明治二十年以降の就学率の動きを見ると、男女平均で八〇％を超えるのは明治三十三年以降であり、この時はじめて県平均が全国平均を上回ることになったが男女差は依然たるものであった。教育費負担をめぐって町村の苦労は更に深刻なものがあった。

すなわち明治十七年六月二十七日宮崎県令の発した訓令第三拾七号は、教員の給与に関するもので、県内教員の大多数を占める准訓導、授業生の地位の安定をはかるために県でその俸給の最低額を示したところ町村のなかには、この最低額を標準額と誤認し、現任教員の俸給をこの最低額まで引き下げようとするものが出たのでその不見識に警告を発したものである。

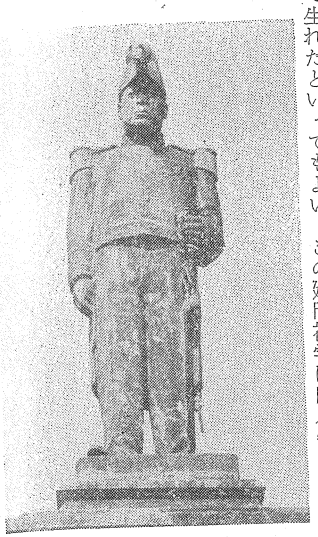
教育者団体結成の声はすでに明治十四年、十五年頃からあったが同十九年九月遠藤正等の発起によって、直接教育関係ばかりでなく、ひろく県内有志によびかけて日州教育会が結成された。今日から見れば官製団体であるとの批判は免れないが機関紙「日州教育会雑誌」の発行、附属図書館の開設、教育研究会講習会の開催、視察団の派遣等に巾広い活動を通じて本県教育の改善発達に寄与した実

績は注目さるべきものがあった。

内藤政挙

延岡市城山公園旧延岡城二の丸の一角に旧藩主内藤政挙の記念像が市民の手で建てられている。政挙は遠州掛川藩主太田資始の三男として嘉永三年五月江戸に生れ、後内藤家に入り、文久二年十月延岡藩七万石をついだ。明治二年延岡藩知事に、同四年廃藩のため致仕して東京に移住したが、同二十二年延岡に帰り以来郷土の育英奨学事業に生き甲斐を求め、かたわら銅山経営、植林事業等地方開発につとめたが、一面から見ればそうした事業経営は彼の教育振興のための財源確保の方便だったとも言えそうである。

彼の直接関係した教育事業を見るに藩校廣業館が明治五年学制頒布によって閉鎖された後をうけて、私立学校「延岡社学」が発足した。表面地方有志の発起したものであるが実質的には彼の力によって生れたといってもよい。この延岡社学は同八年「亮天社」に改められ、可なり高度の中等教育が行なわれ、翌九年には女児教舎を併設している。これら二つとも後年政挙の経営に移るのであるが、この女児教舎こそ私立延岡高等女学校の前身であり、昭和四年県に移管されるまで、政挙が夫人英子と共に心を傾けて育てた女子教育機関であった。小学教育の普及啓発に精一杯であった当時において、こうした組織立った中等教育が始められたことは注目に値する。



内藤政挙

この他延岡女子職業学校、日平、見立の両尋常高等小学校何れも彼の開設したところであり、宮崎盲学校の前身である日向訓盲院、延岡聾学校の母体となった延岡訓盲学舎に対する継続的援助は本県盲、聾教育発展の基盤を育てることになった。

由来延岡藩主の中からは数学者や、和歌、俳諧の先達が出ている。政挙は幼時漢籍を学び、稍長じて慶応義塾に入ったが眼疾のため中途にして退学、旧熊本藩の儒家岡松甕谷について経書を修めた。人となり寛仁大度よく人の言をきき興至れば詩を賦した。原時行、小林乾一郎等勝れた人材また彼の周辺にあって彼の事業の推進に惜しみなく力を貸した。県北地方の教育文化事業のうちで政挙の関係しないものはないといわれている。

昭和二年五月病のため七十八歳を以て没した。

遠藤正

遠藤正は嘉永六年十二月磐城三春藩士の家に生れた。明治三年九月、選ばれて貢進生となり、大学南校に入って仏語を学び鉄道工学を専攻した。壬申四月（明治五年）の南校一覧には磐前県堀江貞記とあるが、堀江は養家の姓であり、後故あって遠藤姓に復帰した。

同一覧には都城県小村寿太郎、美々津県石井筆太も名を連ねている。在学中鉄道工学研究のため英国留学の選に入ったが過度の勉学のため肋膜をおかされ、学業半ばにして退学、友人の海外留学を見送りながら、自らは入院加療の身を悲しみ、自尽は天理に悖るものであるがどうせ役に立たぬ身体でいるならば別に加療の必要もない。樹木が朽ち果てるように自然消滅こそ当然である、と友人の勧めも耳に入れず一時薬餌もとらなかったが、校医某に誡められて覚るところあり、更に直言の評高かった海軍々医某の診察を受けた。「働ける身体になるが、すくなくとも二十五、六年間自分の示す通りの養生法が守れるか」と言い渡され、働ける身体になるならばと固く約束したが、以来専心健康恢復に力を尽した。後年しば〳〵養生家といわれ、また健康教育を強調した所以もここにあったようである。

三春に帰って半年、望まれるままに三春中学の教壇に立った。稍々健康に自信を取り戻したので再び上京を考えたがたまたま埼玉師範在職中の同郷人の勧めによって明治十年二月同県少教諭となり次で同十四年十一月文部省普通学務局勤務に転じ、同十六年六月宮崎県再置と共に学務課長心得を命ぜられた。以来昭和三年四月近親門生達に見守られて宮崎市江平池畔の自邸に七十六歳を一期として没するまで宮崎県の教育が念頭から離れなかった。

遠藤正

人は宮崎県の近代教育は彼によって築かれたという。なるほど、宮崎師範を企画し実現させ、次で二代目校長として満二十二年余の間師範教育に精魂を傾け、宮崎中学の初代校長をも兼ねた。教育理論の研究と世論喚起の必要を感じて日州教育会を結成し、十四年の永きにわたり会頭として県教育の改善発展に寄与した。師範女子部の開設は彼のかねてからの持論の一部実現であった。十か年近くにわたって宮崎高等女学校の経営にあたった。日向訓盲院の基礎固めも彼に負うところが多い。全県下に跨る学区の不合理不均衡を是正して学費負担の公正を期したのもまた彼であった。しかし彼の本領はやはり教育そのものにあったと言わなければならない。教育の根本は人にあり、師範学校卒業生が上級学校に進むのを喜ばなかったというのも半ばうなづける。

彼は講堂の見易い場所に自筆の額を掲げてしばしば之を取りかえていた。特に「凡作事、須要有事天之心、不要有示之念」「尽人事待天命」は彼が人生の指針とした会心の文章であり、この中に彼の教育精神を見出すのである。彼の教育の場は講堂訓話を主とするものであったが、その説く態度は表面冷淡の如くして然も威厳と温情を兼ね備え、懇切そのものであったと直接教えを受けた門生達は語っている。彼の学校経営は規律厳正、秩序整然、寸尺も忽にするところがなかった。然も職員生徒は彼のもつ人間性に相融和してまるで一家の観があった。

なお、彼には、「国本顕彰論」の一文がある。日向の聖蹟調査顕彰の重要性を訴えたものであるが、後年有吉忠一知事の下で取り上

げられ、大正元年から六か年にわたる大規模な調査発掘事業に発展してわが国古墳研究史に一時期を画したその端緒をなすものであったことを知る人はすくない。

宮崎市下北方の丘上に彼に教えをうけた宮崎師範学校卒業生の築いた頌徳碑がある。

斎藤角太郎

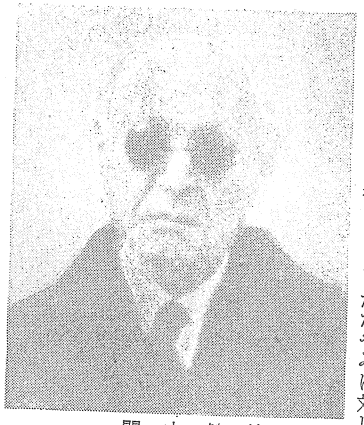
斎角精神、高鍋農業高校の玄関に近く禿頭、口髭に特長をもった一人の人物が学校の日々を見守るかのように、どっかと腰をおろしている。初代校長斎藤角太郎の胸像である。彼は宮崎県児湯郡都於郡村荒木周平の三男として明治九年六月を以て生れ、幼くして同村斎藤伊平の籍をついだ。明治二十年広瀬小学校を経て熊本第五高等中学予科に進んだが、感ずるところあり、周囲の反対を押切って退学、同二十六年札幌農学校に入り、同三十三年卒業後秋田農事試験場に勤務、同三十六年四月、児湯郡立高鍋学校が組織を変更して郡立高鍋農業学校となった際に迎えられて初代校長となった。当時県内にはすでに宮崎、飫肥の二つの農学校があり、これら先輩校の間に伍して地方民の新校長に期待するところは大であった。事実数年を出でずして県内各地から入学者が集るようになった。特に児湯地方では、斎角先生の学校に入るのが少年達の夢であったとも言われる。斎角精神が漸やく光を放ち始めたと言うべきであろう。以来大正十五年三月病気退職するまで二十三年間、途中政治の誘いを却けて農業教育に専念した。

彼の教育理念、抱負を知る手掛りともなるべき物的資料は乃木希典の辞世の歌草稿を除いて殆んど見当らず、直接教えを受けた卒業生等の記憶の中にあるのみである。豪放磊落、よく飲み、よく談じたが、生徒指導にあたっては極めて厳格、個人面接指導を重視した。卒業生の就職開拓、卒業後の指導連絡には特に意を用い、時に自費をもって朝鮮満洲まで足を伸ばしている。経済学の授業中某生徒の発した「経済学を講ずる先生が何故貧乏するのか」の質問に対する彼の答は「経済学者と経済家とは一致せぬものである」であった。これで生徒達は校長の貧乏を納得することにしたと語っている。彼の赤貧は生徒周知の事実であったのである。卒業生は集まれば今でも斎角精進を話題にし、彼とのめぐり合いを誇りとする。「校長先生の存在を巌の如く感じた。押しても引いても吾々の手ではどうにも手がつけられない。それでいて、この大岩に暫らく相対していると、そのうちに何か大きな意図を感じる」とも言っている。彼の人格の然らしむるところであろう。彼は札幌農学校に学ぶことによってクラーク山脈の一角に連なり、藩校「明倫堂」の跡を校地とした高鍋農業学校は、島田学校、高鍋学校を通じて、明倫堂塾学の精神——人材の育成を受けついだとするのは穿ち過ぎた見方であろうか。明治時代の栄光に支えられるところがあったとしても、彼ほど広い分野にわたって多くの人材を育てることに成功した教育者もすくない。昭和六年没、高鍋町上月墓地に葬る。

斎藤角太郎

関本健治

関本健治の八十六年の生涯は盲教育と共にあった。彼は明治十六年九月、日向市細島に生れ、間もなく失明、四歳からまる十二年間百方治療に努めたが、ついに視力恢復の望みを絶たれ、同三十三年京都府立盲唖院に入学、卒業後引き続き一年間大阪高等鍼灸学校で実地研究を積む頃から自己の将来の生き方を真剣に考えはじめた。帰郷後生地細島を離れて宮崎に転居、ささやかな鍼灸院を開業した。暖い両親の配慮で勉学の機会に恵まれた自己にくらべて県内には、家族の足手まといになって訓盲院の存在すら知らない人が大勢いる。といって自分にどれだけの力があるか。世間が果たして理解をもってくれるだろうか。彼のこうしたなやみに対して最初に手を差しのべたのが外ならぬ米人宣教師クラークであった。宮崎市栄町にあった宣教師館の一室が仮教場に提供されたのである。明治四十三年七月のことで、翌年には当時宮崎高女の校長だった遠藤正等の奔走によって宮田町に家屋を求めて、ここに独立の訓盲院が発足した。こうして学校らしい形はできたものの資金の目途は定かでない。盲児指導のかたわら、杖を手にしての県内行脚が続き、徐々にではあるが、世人の関心も深まり、慈善音楽会が県内各地で催され、その益金が訓盲院資金として寄せられて来た。さきに遠藤等有志によってつくられた訓盲院賛助会も、大崎敬方、堤長発、岩切与平等有志の尽力によって年々会員が増して行った。しかし、この時期における本県の盲教育はまだ慈善事業の域をぬけ切れなかった。やがて私立学校として認可され、大正十二年に盲学校令が公布されても、代用盲学校の中間段階を遁らなければ県立移管は実現しなかったのである。それだけに開拓者の苦労は想像以上のものがあった。昭和十年県立移管と共に、宮崎県立盲学校と改称され、初代校長に補せられ、翌々年三月学校の基礎、固まるのを見て校長の職を退き、引続き講師として按腹マッサージの指導を続け、昭和四十五年一月、八十六歳を以て没した。文字通り苦難の一生であったが、不思議と暗さが感ぜられなかったのは、クラーク宣教師夫妻を始めとした多くの協力者や、リツ夫人に対する信頼の故か、基督信者としての安心感か、否それらをも含めた教育愛ではなかったろうか。



関本健治

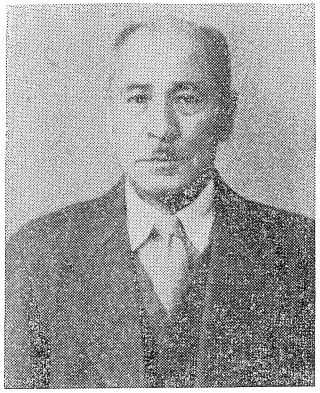
富田保助

富田保助は本県における話法による聾教育の開拓者である。元来歯科の開業医であったが、たまたま長女がヂフテリヤにかかり、耳がきこえなくなったことに心を痛め、外国では教育によって物を言

わせることも出来ると聞き、如何にもして口を開かせ学校にも出したいとの親の一念から、友人からまたその友人にと、つてを求めて聾教育の資料を貪り集め、漸やく教育の可能性に希望を見出し、夫人ハナと共に指導を始めたが、書物の知識では微細な点に自信がなく、ちょうど昭和二年正月、名古屋聾学校で行なわれる聾児教育講習会のことを聞き、親子三人この教育講習に参加した。当時長女は両親の指導によってすでに相当語いも身につき、ここまで恢復させた指導の成果は講習員の間でも高く評価され、校長はじめ、参会の専門家も口を揃えて、都城にも聾学校をと勧奨これつとめた。こうした全国同志の激励と市内有志の協力に勇気づけられて彼が自宅の一部を改造して「都城ろう話学院」を開設したのは、名古屋から帰って僅か七か月目の九月であった。この時の心境を彼は次のように語っている。「長女の言語が段々上達するにつれ、世間には、悲歎に明け暮れている多くの親子のあることを思うようになった。そうだ。自分にも多くの同類の人達を救うことができぬことはあるまい。これが娘と共に生きて行く自分ら夫婦の喜びなのだ。一身を投げ出すならばその使命を果たすこともできよう」。しかし歯科医としての収入の全部を投入すれば、と覚悟はしていたものの生徒がふえるにつれて職員もふやさねばならず、一方指導の実際はもとより、学校運営面の繁雑さのために本業の歯科医が副業になり、今まで多かった患者も漸減し、学院の前途は、明るくはなかった。私立学校の認可を受けてからは県、市から若干の補助が出る事になったものの、授業料は職員一人分の給料にも不足し、経費の大半は自ら都合しなければならなかった。昭和五年になると生徒数も四十名をこえ、寄附金と私財を投じて移転改築に取り掛ったが、竣工直前の校舎は台風で倒壊、全私財を投入して再建、学校移転の運びとなったが、その裏には、生れてはじめて経験する家屋差押えが待っていた。生徒の漸増に伴ない、昭和九年にも校舎の増築を行なっているが、聾教育の将来を思うと彼とても個人の力の限界を考えざるを得なかった。江夏芳太郎等の尽力もあって昭和十年四月移管されて宮崎県立聾学校となり彼はその初代校長に補せられ、同二十八年まで在職したが退職後も病軀をおしてろう教育に関する手記を書き綴り、また自宅を開放してろう者の福祉に心を配った。昭和四十四年一月、八十一歳をもって都城市の自宅で没した。

孤児の友——石井十次

昭和初期の国定教科書小学修身巻六に十次が登場していたのを記憶される人はすくないだろう。彼は慶応元年四月、宮崎県児湯郡上江村馬場原（現高鍋町）に生れ、大正三年一月生地に近い茶臼原で数え年五十の生涯を終った。彼の人間形成の過程を考えると、幼くして藩学の伝統をうけついだ島田学校、高鍋学校で儒教的教育を受け、進んで攻玉社に学んだが病を得て帰郷、



富田保助

地方開発に奔走するうち、不用意な議論が災いして五十一日間を獄中に過した。獄中に同室した私学校生徒の一人から西郷隆盛について多くのことをきき、特に吉野村開墾事業に心を惹かれ、教育と開墾について真剣に考えはじめた。このあと内野品子と結婚、上江小学校の助教となり、半年程教壇に立った。教育がどんなものかを自分の自体でたしかめたかったのであろう。医師萩原百々平の診察を受けたのが機会になってキリスト教に接近、その勧めによって医業を通しての社会救済に心を動かされて岡山医学校入学、間もなく岡山教会で受洗、そのあと貧児松原定一との出会は、やがて彼をして医書を焼いて、徒手空拳孤児院設立を決意させることになった。明治二十年九月、十次二十二歳の春の事である。かくて岡山孤児院を舞台とした彼の事業は大阪に、茶臼原にと広げられて行き、明治の末年になると、岡山の事業の大部分が茶臼原に移るのである。彼を知るための資料としては、明治十二年十月十日から大正二年十一月

石井十次と茶臼原憲法

二十六日まで、三十四年間にわたって書き綴られた日記がある。彼は生涯のうちで幾度か霊夢を感じそれが彼の人生の転機ともなった。彼の説得力は定評のあるところであり、また先輩友人の話をきくことを喜び、その都度これを日記に写し、反復咀嚼して自分のものとして実行に移すことに努めた。彼の場合、思考と行動とは、別物ではあり得なかった。その思想行動がしばしば変転して安定を欠くといわれる所以でもあった。試みに、孤児院を中心として彼の教育思想遍歴のあとを辿って見ると、ルソーの自然主義教育に強く刺激され「天父の冥助と院内各自の労働とによって之を維持拡張し、敢て寄附金品を受けず」、いわゆる実業的独立宣言を発表して悪戦苦斗した明治二十七、二十八、三十年の第一期。コレラ発生により大打撃を受け「幼年時代は遊ばせ、少年時代は学ばせ、青年時代は働かせる」という時代教育法を案出実施に移し、ルソー主義を捨てて院児を小中学校に入れ、一方音楽幻燈隊を編成して寄附募集に活躍した明治三十一年以降約十年間の第二期。二宮尊徳の農業を基本とした自然主義に啓発され、報徳記中の道歌を歌い替えて「天父の恵に満てる茶臼原、鍬で堀り出せ、鎌で刈り取れ」、いわゆる鍬鎌主義により実業的独立宣言を復活させた明治四十二年以降の第三期、の三段階が考えられる。このうち第二期のある時点では院児一二〇〇を数え、十次は国内は勿論、一躍世界の名士になった時代であるが、彼自らは後年俗化敗北の十年と反省している。真正の教育的救済でなければ肉体的に救い得ても精神的に殺す結果になると考えたからである。第三期に入ると岡山本院の主力も茶臼原に移され、大正二年一月には私立茶臼原小学校も認可開設された。同年二月十一

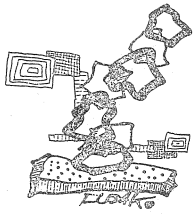
日写真に見る「茶臼原憲法」を宣言し、かねて描いて来た茶臼原理想郷建設の筋書はひとまづ終った。自らの死期を予想した上での茶臼原への遺訓であったとも言えそうである。

彼の死後開設された農場学校は、成長した孤児達の独立準備のためのものであり、彼の教育理想の総仕上げとも言うべきものであったが、彼のような勝れた教育的人格を失った後の孤児院がどんな歩みを辿って行ったか。院長は大原孫三郎、大庭孝、石井辰子と引継がれ、大正十五年遂に岡山孤児院は解散された。解散をめぐって世論は沸騰し、孤児救済事業の困難を改めて世人に考えさせた。昭和十四年、大原孫三郎は「石井君の事業は世間的には大成功の如く見られているが、忌弾なく言えば全然失敗であった。ただ美しき社会救済の根本精神だけが大きな成功であった」と評している。昭和二十年十次の人格とその事業を永久に記念することを目的として「石井記念友愛社」が設立され、宮崎県下で社会福祉事業を行なっている。

（付記）

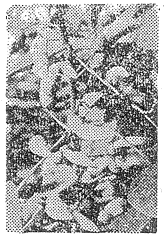
本誌の性質上一々出典をあげることをしなかったが、参考とした資料は既刊書の外、主として県立図書館に保管中の宮崎県古公文書によった。

（宮崎県文化財専門委員）



人物を中心とした

鹿児島県教育郷土史



県花……海紅豆

桐野利彦

一　明治以前の教育

島津重豪

宝暦三年の木曽川治水で、薩藩は財政的に救い難い打撃を受け、民心のい縮も大きいものがあった。しかし宝暦五年、島津重豪が藩主となるにおよんで、産業、経済、教育各般にわたって積極的な開化政策をとり、薩藩の教育も非常に整備された。彼の教育に示した治績は、郷中教育の整備、造士館、演武館、郷村の設立等である。

一　郷中教育の整備　　薩藩には他藩のように、寺小屋式の教育はあまり普及しなかったが、薩藩独特の郷中教育が盛んに行なわれた。郷中とは一定の地域のことで、その地域の子弟に対し、鍛練を中心とした激しい教育を行なった。この郷中教育は、すでに江戸初期から行なわれていたが、重豪はこれを整備し、さらにその推進をはかったのである。幕末には鹿児島城下だけで三三の郷中があり、地方の各郷でも盛んに郷中教育が行なわれ、加世田、国分、出水等の郷中教育は、特に有名であった。

郷中教育は、六、七歳から十三、四歳までの稚子と、十四、五歳から二四、五歳までの二歳の教育とに分かれていた。そしてその教育には、学習的修練と身体的鍛練があった。例えば稚子の教育においては、午前六時鐘の合図とともに先生宅に行き、到着順に読みを習うことから始まった。それが終ると家に帰り、復習などして朝食をすませ、午前八時には所定の場所に集まり、大将防ぎ、

島津重豪

降参言わせ、馬追い遊び、山遊びなどして心身の鍛練をはかった。午前十時、午後二時には年長者の家で読みの復習やいろは歌を暗誦し、午後四時になると道場で年長の二歳から武芸を習い、午後六時に帰し、十歳未満の稚子は夜間外出を禁止された。十歳以上の稚子は、二歳たちの集まっている家に出かけ、郷中の諸規則を唱えたり、互いの生活を反省し、悪いことをしたものは折かんを受けた。

二　造士館、演武館の設立　　島津重豪は、自ら儒教を学び、これで士気を振起しようとし、寺小屋や個人の武道場を整理し、文武教育の統一を期した。そして造士館、演武館を創設した。造士館は江戸の昌平黌、米沢の興譲館、萩の明倫館、水戸の弘道館等とともに、全国の藩校の中でも古い方である。儒教主義で八歳から二一、二歳までの藩士の子弟を教育した。

三　郷校の設立　　城下に藩校として造士館、演武館をつくったが、これに対し地方には郷校をつくって、郷士の教育機関とした。薩藩には一般庶民の教育機関として寺小屋などあまり発達せず、庶民の教育はほとんど行なわれなかった。ただ百姓の指導者である名頭、名主等については、執務に必要な文字や計算をいくらか教えた。

重豪時代にできた郷校には、垂水の文行館、都城の禧古館、加治木の毓英館等があった。これらの藩校、郷校の教育と、郷中教育は平行して行なわれた。したがって藩校あるいは郷校で教育を受けたり、郷中で教育を受けたりしたのである。例えば造士館は午前十時から午後二時までで、その他は郷中で教育を受けた。郷中から造士館への登下校は、郷中ごとに隊列をつくって行進したと言われる。

島津斉彬

重豪の開化政策を引きついで、さらにこれを前進させたのが斉彬である。斉彬が嘉永四年藩主となると、薩藩はようやく江戸幕府のきづなを脱し、薩藩独自の立場を明らかにし、大義名分を重んじ、人力と財力を傾けて産業、文化、教育、国防の向上をはかり、常に時代の先達として他藩を指導した。彼は当時全国一の名君と言われ、士風矯正、学風改革、学校設立、遊学奨励、書籍出版等教育の大改革をし、後世に大きな影響を残した。明治維新実現に対する薩藩人の活動の源泉は、その多くを斉彬に負うていると言って差支えない。

一　造士館、郷校、郷中教育の改革　　斉彬はまず士風の矯正を徹底する必要を痛感し、訓諭を発してその徹底をはかった。郷中

島津斉彬

教育については、郷中の規約を提出させて指導し、郷中ごとに取締人をおいて士風の改革をはかった。

士風矯正とともに文武学習の心得に関する諭達を発し、従来の形式主義を廃して本質的であるべきことを達した。とくに造士館、演武館に対しては、特別に諭達を発し学問の本質についてこまごまと説き、学習の心得を具体的に示している。

二　学校教育の普及　斉彬はさらに教育を普及させるには、学校が不足し現状では「御城下は勿論、郷士等無学文盲の者多く、かざるは恥づべきことなり」と言い、郷村ごとにさらに学校を設立することの必要を説いた。そして新屋敷町等に郷校を設置したほか、宮之城には盈進館が設立され、また、実現はしなかったが、国学館、洋学館、病院等の建設も計画していた。しかし彼の計画した中国語研究のための達志館、陸海諸学科研究のための開成所は、彼の死後であったが実現している。開成所においては、語学はじめオランダ語を主としていたが、後には、英語にかわった。斉彬は自ら蘭学を学び、洋学の研究指導には特別の関心を示し、彼の近代化への努力は注目に値するものがあった。

三　遊学の奨励　斉彬は、藩子弟の他領への遊学をつとめて奨励し、ことに洋学研究の遊学をすすめた。したがって遊学に関して定めた規則も多いが、遊学者選抜について定めたものに次のようなものがある。

江戸遊学志望の者は造士館へ附して願出る規定の処、爾後も此の如く教授受持にて吟味行届く様申附ける。元来稽古修行のため他領へ出る事故、学問の巧拙の吟味よりも弥々真実に修行するか、又は当座の困窮を凌ぐため出るかの人選を要す……

と言い、人選は直実に修行する意思があるか否かによるべきことを示している。

他領遊学で最も多かったのは長崎で、次が江戸、京都の順となる。蘭学、医学、軍事、造船、航海、医学等に関する研究が多く、寺島宗則、大山巌、黒田清隆、村田新八、篠原国幹、桐野利秋、東郷平八郎、五代友厚等明治維新あるいはその後活躍した人々は、ほとんど何らかの形で他領に遊学し、新しい学問をした人々であった。

また斉彬は開国論者であり、西洋文明の熱烈な吸収者であったので、国内ばかりでなく海外留学の必要を痛切に感じていた。しかし当時はまだ鎖国の時代であり、思うにまかせなかったが、彼の死後その意志は大大的に実現された。薩英戦争中、英艦の捕虜

となり、彼我の戦闘を直接英艦上からみて、英国のすぐれた兵器を驚嘆した松本弘安、五代友厚は、海外遊学の必要を痛感し、それを強く上申して許された。そこで藩は将来性のある青少年十九名を選抜し、英国に留学させることにした。このことは本県教育史はもとより、日本教育史に特筆大書されるべきことで、この中には第一代の文部大臣として、わが国の近代教育の基礎をつくった森有礼(当時一七歳)、後に外務大臣となった寺島宗則（当時三三歳)、また大阪商法会議所の初代会頭となり、大阪の商工業発展の基礎をつくった五代友厚（当時二九歳）等わが国の近代化に大きく貢献した人々が含まれている。最年少者は当時十三歳の磯永彦助で、彼は英国から米国に渡り、カリフォルニアで果樹栽培に従事し、ブドウ王と称せられた。

以上のように、幕末においては、両藩主の積極的な努力によって、薩藩の教育は大きく前進した。特に西洋文明の輸入に大きな努力が向けられたことは特筆されてよい。しかしこれらの教育はほとんど武士の子弟の教育に限られ、一般庶民の教育は考えられなかった。教育の対象、内容、方法等薩藩独特のものとして発達したのである。

二　明治の教育

蓮池新十郎

明治元年から島津久光は藩政の大改革をはかり、教育部門でも大きな改革が行なわれた。

知政所のもとに和学局、漢学局、洋学局がおかれ、生徒は和学局三〇人、漢学局七〇人、洋学局一〇〇人、計二〇〇人で三局てい立の制が確立した。三局のうち、洋学局が中心をなしたことは言うまでもなく、洋学中心の学制であった。しかし明治四年、洋学中心のあり方が反省され、静岡の人、蓮池新十郎を招いて、三局てい立の制を大改革することとなった。それによると、生徒には和、漢、洋学を兼修させることになり、従来あまりにも重要視されていた洋学局は廃止され、そのあとに本学校が設置され、小学校も二校できた。後に和、漢両局も廃止された。本学校は小学校卒を収容する中等教育機関であるとともに、小学校、郷校等を所管する教育行政機関でもあった。郷校は藩政時代以来つぎつぎと城下および城外に設置された。そうして明治四年の廃藩置県当時、本学校所管の学校は、小学校四、城下郷校七、外城郷校二三となり、相当の教育の普及をみた。

明治五年の学制頒布

明治五年の学制は、「一般の人民邑に不学の戸なく、家に不学の人なからしめん」ことを期し、徴兵令とならんで新政府政策の根底をなした。

新学制は、全国を八大学区に分けたが、本県は第五番学区となり、学区内を六中学区、一、二五〇小学区に分け、この中に適宜小学校、中学校等をおこうとするものであった。学制によれば、小学校は上等と下等とから成り、正則小学校と呼ばれるものであっ

た。本県の場合、前述のように造士館、小学校、郷校等があったが、その内容が新学制に示された正則小学校とはほど遠く、直ちに実施しがたいものであったので、変則小学制をとることとし、各地に増設されつつあった郷校をこれにあてることとした。従来就学は士族一本であったが、変則小学校になって、平民の子弟の入学も明示されたので、大きな前進となった。これによって本県各地の郷校は非常に整備され、明治八年には県下の変則小学校は、おおむね正則小学校に移行できるほどになった。このように新しい学制によって多くの学校が設けられたが、発足当時はまだ不備なところが多く、その不備を補うため、郷中教育の伝統を生かした新しい学舎教育が始まった。学舎教育は、旧藩時代の伝統を受けつぐ鹿児島独特の明治以後の教育である。

正則施行に当たっての大きな問題は、学校の急増による正教員の不足であった。このため男女の正則講習所(後の男女師範学校)を設置し、教員の養成をはかった。そればかりでなく他県の師範学校等卒業の優秀なものを、高給で招へいしている。長野県人上野道之助、山口県人安倍貞雄等が明治十一年、同十三年に蒲生小学校長として着任している。

ウイリアム・ウイールス

幕末以来薩藩においては洋医学が盛んであったが、明治元年医学院の制を定めた。とくに西洋医学を重視し、明治二年英国大使館附であった英人医師、ウイリアム・ウイールスを招いて西洋医学の講義をさせた。また藩ではウイールスの意見によって、明治三年医学院、病院の職制を改めて、その機構を大きく整備した。彼は鹿児島に留まること前後八年、ししとしてこの地の近代医学の普及発達につとめ、多数の医学者を養成した。本県の近代医学の基礎をつくった人として、忘れることのできない人である。

私学校と明治十年の戦役

本県の明治初年の教育に、ひとつの大きな特色をつくっていたのは私学校である。西郷隆盛が征韓論に敗れて辞職帰郷すると、彼に従って帰郷したものが数百名にのぼった。彼等は時日がたつにつれ、自己の方向に迷って四散する傾向が生じた。これらの青年に一定の方向を与えるために有志によって設立されたのが私学校である。私学校の生徒は七、八百名におよび、その教育目的は尊王愛民を本旨とし、明治維新に列じた志士の志をついで、国家に貢献しようとするものであった。私学校は鹿児島市内ばかりでなく、地方にも多くの分校が設けられ、その勢力は、新政府をおびやかし、遂に西南の役となったが、それに敗れたので必然的に崩壊した。

幕末以来、教育の振興に努力し、ようやく整備しつつあった本県教育は、この明治十年の戦役によって一頓座し、大打撃を受けた。鹿児島はもとより地方でも教育施設の破壊ははなはだしく、とくに戦禍の大きかった大隅、日向方面にかけては、その荒廃は忍び難いものがあった。しかし明治十年戦役終息とともに、県は

異常な熱意で復旧につとめ、同年中に諸郷で再開された小学校は八十校を越えた。鹿児島師範も同年中に復旧し、女子師範は一年おくれて明治十一年復旧した。そして本県教育も一路前進を続けるのである。

教育令の制定

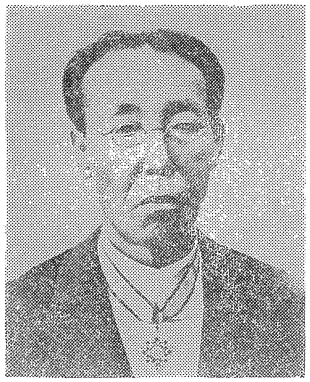
明治十二年教育令が制定された。そして翌十三年改正され、学校設置は文部卿または知事の認可を必要とすることになり、自由設置はできなくなった。そして町村に小学校設置の義務を負わせた。小学校の修業年限を三年以上八年とし、初等科三年、中等科三年、高等科二年とした。明治十六年には、本県の小学校数を七五五校とし、初等科のみが三三四校、初等中等併設が二四九校、初等、中等、高等併設が一六五校あった。また教育内容も新たに明示され、明治以来の外来文化中心から一転して、儒教中心の教育に変わった。しかし外来思想とわが国古来の思想との対立が、ようやく表面化し道徳の混乱となった。このため明治二十三年教育勅語が出された。

森　有礼

明治十九年、また学制の大改革があって、森有礼が初代の文部大臣となった。彼は弘化四年鹿児島に生まれ、十七歳の時、薩藩の英国留学生となって、ヨーロッパの新思想を学んで帰国した。そして廃刀論その他新日本の向かうべき姿を大胆に主張し、国粋主義者から国賊とののしられた。彼が文部大臣になると、「明治維新を実現した日本が、世界の一等国になるためには、まず人づくりから」と、帝国大学令、師範学校令、中学令、小学令等を次々と出して、わが国の教育の体系をつくりあげた。特に師範教育の充実には力を入れ、「師範学校は教員の養成機関である。この学校の良否はただちに国民教育に影響し、国家の隆運にかかってくる」とし、従順、友情、威儀の三つを師範教育の骨格とした。彼が死んだ翌年、すなわち二十三年、改正小学令が出され、小学校の設置は市町村の責任となり、授業料を徴集させた。大口小の例では、一人十二銭で、弟はその二分の一、その次は三分の一とした。

加納知事と岩崎行親

明治十八年中学令が出る以前から本県にも、中等教育機関があったことは言うまでもない。しかし明治二十七年、はじめて尋常中学校が現県庁の地に設置され本県中学教育の本格的な歩みがはじまった。当時の知事は殖産知事として歴代知事中最高の業績を残したと言われる加納久宣である。加納知事は、岩手県師範学校長、新潟学校長、大審院検事等を経て、明治二十七年、鹿児島県知事となった人である。彼は本県の殖産興業に全力を尽し、眼を見はるほどの実績をあげた。勧業面が軌道にのると、教育の振興に力を入れ、視学制度の確立、教育会の設立、就学の督励等に努力した。このため就学率が明治二十七年には五七パーセントに過



宣　久　納　加

ぎなかったものが、明治三十三年には、九二パーセントとなり、日本のトップクラスとなって、藩政時代以来の本県教育のおくれを取りもどした（明治末年には就学率九八パーセントとなる）。この加納知事の教育振興策の一翼をになったのが岩崎行親である。岩崎は新渡戸稲造、内村鑑三等とともに東京英語学校に入学し、さらに札幌農学校に学び、クラークの感化を受けた。札幌農学校卒業後、北海道開拓使御用係をつとめたが、退官して私塾を開き、後進の指導に当たっていた。ところが明治二十七年、後の文部次官牧野伸顕、加納知事のたっての懇請により、前記尋常中学校長に赴任した。そして本県の教育ばかりでなく、県政一般についても加納知事のよき顧問として活躍した。岩崎は中学造士館を高等学校に昇格すべきことを建議し、明治三十四年、ついに第七高等学校造士館の設立に成功、その初代館長となり、県外から優秀な教員を集め、質実剛健の校風をつくりあげた。七高はそれ以来名校長を得、順調に発展して現在の鹿大法文学部となった。

かように岩崎は本県の中等、高等教育の草分けとして大きな功績を残し大正元年退職したが、大正七年再び懇望されて福山中学校長に迎えられ、敬天愛人を主軸とした独特の新教育を打ち出して、大きな反響を呼んだ。

中等教育の充実

前述のように加納知事以来、明治後半の本県初等教育の進展は著しかったが、中等教育の充実もこの期の著しい特色である。明治二十七年の岩崎の尋常中学校（一中）についで、その後三、四年にして川内中、加治木中、川辺中、二中等が続々増設され、比較的立ちおくれた女子高等教育も、明治三十五年はじめて県立高女の開設となり、続いて第二高女や実科高女も川内、加治木に設立された。

本県では士族の普通教育を主とし、官職一途の教育には熱心であったが、中央をはなれた農業県であること等も手伝って、実業教育は非常に立ちおくれた。しかし、商人層の士族に対する対抗意識や商人層が自己発展に対し、子弟の教育の必要を痛感したこと、加納知事の勧業政策等により、明治二十七年、鹿児島簡易商業学校が設立された。これが現鹿児島商業の前身で、職業学校もこれに引き続いてあちこちにできるようになり、実業教育、女子教育もようやく活発になって来た。

七人の文部大臣

明治十八年、森有礼が初代文部大臣になってから、明治末までの僅か二六、七年間の間に本県から五人の文部大臣が出た。森有礼以前の参議兼文部卿をつとめた西郷従道、寺島宗則を加えると実に七人になる。

森のつぎ二代文部大臣が大山巌、明治三十二年には海軍の勇将樺山資紀が文部大臣になった。彼は新たに小学令を出し、義務教育の延長、授業料の廃止を確立し、また中学校令も改正し、はじめて高等女学校令をつくった。明治三十九年には牧野伸顕が文部大臣となったが、彼は維新の元勲大久保利通の二男である。美術の発展に力を尽し、日露戦後のゆるんだ学生、生徒の気力を引きしめることに努力し、好評を得た。東北大、九州大も彼の在任中にできたものである。続いて明治四十四年には長谷場純孝が文部大臣となったが、それ以後は今日まで本県から文部大臣は出ていない。明治期にかように多くの文部大臣を本県から出したことは、異例的な特色と言えよう。

玉利喜造

北の盛岡に明治三十六年第一高等農林学校ができたのに対し、熱と光に恵まれた鹿児島にも、明治四十一年第二高等農林学校として設立されることになった。当時の郷土出身の文部大臣牧野伸顕と玉利喜造の努力による。玉利は安政二年鹿児島に生まれ、東京の駒場農学校を卒業、欧米に三年留学して帰朝し、駒場農学校の教授となり、畜産学と園芸学を講義した。わが国農学博士の第一号でもある。間もなく彼は盛岡の第一高農の校長となったが、鹿児島に第二高農をつくることに努力し、その創立とともに初代校長として帰って来た。盛岡から彼の人徳を慕って同行した教授も多く、彼等によって鹿児島高農の基礎がつくられた。玉利は南方発展の布石として、指宿、佐多、種子島等に試験場や農場、牧場等をつくり、本県農学研究の礎石をつくった。彼は後に貴族院議員に選ばれている。玉利のあと、鹿児島高農は、順調に発展して、現在の鹿大農学部となったが、その間本県の農学研究、農業教員養成に果たした役割は、非常に大きなものがあった。

三　大正期以後の教育

教育の深化

大正期の本県で、きわだった現象のひとつは、教育の非常な躍進である。明治四十年小学校令が改正され、尋常科六年、高等科二―三年となり、さらに大正七年には義務教育国庫負担法が成立した。これら学制の充実とともに、思想界の進展に伴っていろいろな教育学説が紹介され、教育の深化が叫ばれ、本県教育界はその教育内面の研究からも、空前の活気を呈した。この義務教育の普及や質の向上に積極的に取り組んだのは鹿児島県教育会で、在京の県出身者からの援助も受け、財政基盤も固く、大正時代の活動はとくにめざましかった。教職員の研究活動は非常に活発となり、県教育研究会を中心とする研究集会も年ごとに盛大さを加

え、県外学事視察や県外との教職員の交流、巡回指導等も盛んに行なわれ、教育界の活気はどう目に値するものがあった。教育の郷土化が叫ばれ、それに伴って理科や地・歴教育が躍進し、綴方教育が盛んになったのも、この期の特色である。

石神今太

鹿児島県教育会ができたのは明治二十年で、初代会長は渡辺千秋知事であった。教育会が真に軌道にのり、活発に活動するのは明治三十五年ごろからで、幾多の先輩の努力によって、教育会は堅実な歩みを続け、本県教育界に大きな足跡を残した。大正末から昭和初期にかけて、教育会で主役を演じたのは、石神今太である。彼は当時の県視学窪田精一、市尋校の兼子鎮雄とともに、県教育界の三人男で、本県教育界の主峰に立っていた実力者であった。肝ったまが太く、まとめ役には非凡な才能を持ち、一師、二師の合併問題、教育会館の建設問題等手際よく捌き、また夏休みの友や郷土史等の出版、夏季大学の開設など、本県教育振興の頭脳的役割を遺憾なく果たした。

飯牟礼実義

大正期の異常な教育の活発期を迎え、師範学校の使命も大きくなった。小学校教育の普及充実に伴い、その教員を確保するため、まず教員養成に大きな努力を払わなければならなくなった。そこで、明治四十一年、男女師範学校に第二部をおき、また尋常小学校正教員養成講習科を設置して、教員養成につとめた。しかし第一次大戦後、小学校教員の不足は甚だしく、代用教員が六割以上もしめる状態となったので、大正九年、市来に第二師範学校を設置することになった。その第三代校長が飯牟礼実義で、二師範の父とうたわれた人である。彼は東京高師で数学を専攻し、県師範学校教諭となり、明治三十九年には県研究集会で「数元主義について」と題し研究発表など行ない、若いころから情熱的な活動をした。そして大正十三年第二師範学校長となり、昭和九年同校が廃止されるまで校長をつとめた。在任中、県下各地に研究指定校を設け、農村学校経営研究会を毎年のように開催し、農村の現実にしっかり根をおろした教育の推進に努力した。第二師範は十年余りで廃止されたが、彼は多くの優秀教師を育てるとともに、本県教育の充実振興に大きく貢献した。

浅賀辰次郎、萱場今朝治

大正九年、第二師範学校ができ、鹿児島男子師範学校は鹿児島第一師範学校と校名を変えた。第一代校長は、アメリカ留学から帰朝したばかりの浅賀辰次郎である。彼は県下各地の学校、研究集会等を回って、学習指導法の近代化を説き、本県教育界に新風を吹きこんだ。第二代校長は萱場今朝治である。彼は宮城県生まれで第一師範の名校長と言われた人である。郷土化教育の主張はすでに大正初期から盛んで、研究と実践が着実に積まれつつあったが、彼が来任するや、さらに郷土化教育の必要を力説し、理科、地理、歴史、算術などはもとより、すべての教科を生活と直結させた学習方法をすすめた。彼は本県の科学教育、郷土化教育の基礎を築いたと言ってよい。萱場の思想は第三代校長の永島意之助

に受けつがれ、郷土学習はますます堅実さを加え、本県教育の振興に大きく寄与した。

宮里貞徳、堀之内貞義等

大正期の県外学事視察、他府県との教職員の交流は、本県教育界に常に堅実で新鮮な気を注入した。大浦小、志布志小等には、福岡県から有力校長を招いて赴任させ、彼等によって比較試験が行なわれ、本県教育界に大きな刺激を与えた。また長野県との教員の交流がはじまり、毎年三名ずつ派遣された。第一回は宮里貞徳、堀之内貞義らである。この長野県との教職員の交流に力を尽したひとりは津崎尚武である。彼は根占町の出身であるが、明治四十二年東大を卒業すると、長野県警視となり、さらに同県部長を経て学務課長となった。彼が長野県学務課長のとき、鹿児島県人と長野県人は性格が非常に違っているが、お互いに交流してその長所を学んだら得るところが多かろうと言って、教師の交換をはかったと言われている。

中等教育の発展

大正期になって本県初等教育は、前述のようにめざましい発展を遂げたが、中等教育の充実も特筆に値するものがあった。

小学校教育の普及充実の結果、必然的に起こるのは中等教育の充実の問題である。大正期は明治後半以来急速に進展をはじめた中学校教育が、ますます普及発展する時代である。

明治末六校であった中学校は、大正に入って続々増設され、大正末には一郡一校主義が実現して十三校となった。

高等女学校も明治末、県立高女は二校に過ぎなかったが、大正の末には十校となった。実業学校は、農業校は明治時代には鹿屋農ほか四校あったが、大正になり伊農林等三校ができ、工業校は明治末四つの徒弟学校があったが、大正になりそれはさらに充実した。商業校は鹿児島に鹿児島市立簡易商業学校、鹿児島女子興業学校が明治時代にできていたが、大正になっては、公立の商業学校はできなかった。特色があるのは、明治四十三年にできた商船学校である。最初商船関係だけであったが、大正になって水産科を増設して充実した。これら実業系学校のうち、鹿屋農は明治三十四年、鹿児島工業は大正八年県立となったが、他の実業系諸学校が県立となるのは、昭和になってからで、実業系教育が中学校や高等女学校に比して、いかにおくれていたかがわかるであろう。士族中心の教育から官職一途の教育となり、実業教育がおくれたのは本県の著しい特色であるが、それでも大正期を迎えて、実業教育が大きく進展しようとする様相を示し、昭和になってそれは実を結ぶのである。

大正期になると、私立学校の創設も盛んとなって来た。鶴嶺高女や国分の精華学校等は明治時代からあったが、大正になると三州商業、鹿児島実業、福山中学等、十指に余る私立学校が生まれた。これらの設置に力を尽したのは、島津治子(鶴嶺)、大坪友三郎(千台女)、窪田二郎(国分精華)、川島隼彦(鹿児島実業)、時任清(鹿児島鉄道)、田中省三(福山中)、三石務(三州商業)、津曲貞助(鹿高女)、浜田直介(錦江女)、満田ユイ(実践女)等である。

公立、私立の中学校が大正期には、以上のように続々できたので、明治時代には一部の人しか受けられなかった中等教育が、一般県民に広く開放されることになり、本県中等教育の大衆化は著しく進んだ。中等学校の新設は、大正期において頂点に達したのであって、昭和にはいるとほとんど停滞し、一、二の公私立中学校の新設や、高等女学校、実業学校の県立移管があった程度である。そして昭和初頭は深刻な不況となり、定員不足の学校が続出し、その充足に苦労するという状態であった。

青年学校と和田信二、松下末七

義務教育を終えて上級学校に進まない者に対する教育機関として、明治以来実業補習学校があり、また彼等に兵式訓練をするために、大正十五年青年訓練所令が公布された。そしてこの両者を統合して昭和十年青年学校ができた。

この青年学校経営にすぐれた手腕を発揮し、その名声を全国的にとどろかしたのは、和田信二と松下末七である。

和田信二は西志布志青年学校の校長として手腕を発揮した。和田は精神教育を第一とし、青年のみならず、戸主、婦人、女子青年等も青年学校に泊めて、部落のすみずみまでゆきわたる教育をした。松下末七は喜入の青年学校長として、青年教育に心血を注いだ。勤労をとうとび、水田のほか養蚕、製炭、養魚等多角的農業経営を青年にやらせ、また女子青年にも自給自足の生産学習を奨励した。

（鹿児島県教育センター次長）

編集後記

◇最近の急激な社会変化のため都市の過大化に伴なって、児童の発達に対する教育的条件としての環境が犯されつつあります。公害が侵入し、教育活動を阻害しまた、自然環境の破壊が学習意欲の阻害という精神的な影響を与えるなど深刻な問題となっております。

◇本号では、教育環境については、松原先生に都市化と教育環境につき論じていただきました。また、北先生に学校環境衛生の問題と将来を、家庭環境の変化と子供の人間形成についてを牛島先生にご執筆していただきました。なお、地域環境と子供の心身の発達におよぼす影響として、学力、体力、体格および疾病について解説しました。

◇長い間、現場での教育問題につき、投稿をいただきその解説をしてまいりました「現場の教育問題」もおわり、そのかわりに「現地ルポ」の頁を設けました。毎号の特集に即してその実状をルポすることにしました。本号は一回目として、江東区の砂町中学校周辺をとりあげました。ご期待ください。

MEJ 5107　月刊　『文部時報』　10月号　第1107号

著作権所有　文部省

昭和44年10月5日　印刷
昭和44年10月10日　発行

発行所　株式会社　帝国地方行政学会
本社　東京都中央区銀座7丁目4番12号
（郵便番号　104）
（営業所）　東京都新宿区西五軒町52番地
（郵便番号　162）
電話　東京(268)2141（代表）
振替口座　東京161番
印刷所　株式会社　行政学会印刷所

定価　80円
年間購読料　960円

＊　ただし、増大号、臨時号の場合は別に代金を申し受けます。
＊　なお、購読の申し込みは，直接営業所またはもよりの書店にお願いします。

第48回

人物を中心とした

沖縄県教育郷土史

—沖縄の教育を築いた人びと—

阿波根朝松

一　沖縄教育の史的概観

古代沖縄の歴史時代における、初代の統治者は舜天王である。舜天は源為朝の子だと伝えられている。為朝は保元の乱に敗れて伊豆大島に流され、永万元年三月船出して沖縄に漂着した。やがて南山の高嶺城主の妹と婚し、その間にできたのが舜天であると言われている。この事は南西諸島に広がる「為朝伝説」の一環である。舜天以前の沖縄は伝説時代とされている。ただし、隋の煬帝が西紀六〇五年から六一〇年の間に、四回にわたり「流求国」に軍兵を派遣し、招諭したり侵寇したりしているが、島民の激しい抵抗にあい、追い帰されている。それらの遠征に関する記録が、隋代の歴史「隋書」の中に出ており、その内容はかなり詳しく、しかも文化的である。なお、この「流求」が、後の「琉球」すなわち「沖縄」であるかについては、史家の間で多少の異論はある。七・八世紀の頃は、屋久、種子、奄美大島、徳の島、久米（沖縄本島の離島）、石垣（八重山群島）など南島の人たちが盛んに進貢し、大和朝廷から丁重な待遇を受け、位を賜わっている。（日本書紀所載）

舜天王は一一八二年二十二歳で即位しているが、その頃いろは文字が伝わり、使用されていたと言われる。英祖王代一二六五年に、僧禅鑑が来島し、浦添城下に極楽寺を創建した。その百年後、本土僧頼重法印が渡来し、那覇の海岸に波上山護国寺を建立した。一四五〇年の交、尚泰久王は崇仏の心厚く、二十に達する多くの仏寺が首里及びその近在に建立され、仏教がとみに栄えた。一四七〇年代尚円王が菩提寺として崇元寺を建て、次の尚真王が鎌倉の円覚寺に模

して、七堂伽藍を擁する壮麗な円覚寺を建てた。国宝二十二件の建造物は、首里城を始めこの二寺に属するものが、そのほとんであった。一五二二年尚真王代に、上野の人日秀上人が六十余州を巡錫の後、沖縄に来島し、金武の観音寺を始め全島を巡り、布教に努めた。八十年後の尚寧王代に、岩城の人袋中上人が渡来し、寺を建て王の尊信も得、「琉球神道記」と「琉球往来」を著した。なおこれらの時代に、五山等の多数の僧たちが来島し、また、沖縄の僧たちが五山等に修業に行った。近古時代における和文和学の教育は、主として、これらの僧たちによって行なわれた。

いろは文字の渡来の年代は史料に出ているが、漢字の伝来については、史料も無く、推定もむずかしい。しかし、十四世紀に始められた対中国の進貢貿易や対東南アジヤ諸国の通商貿易には、その外交上の交換文書は皆、漢文で綴られている。なおまた、万里の波濤を乗り越え、東亜の天地を跨いで決行された、これらの貿易の利潤により、蓄積された富は莫大なものであった。その輝やかしいはつらつたる気魄が、一四五八年尚泰久王によって鋳造され、首里城正殿に懸けられた、いわゆる万国津梁の鐘銘に、如実に表わされている。次にそれを抄出する。

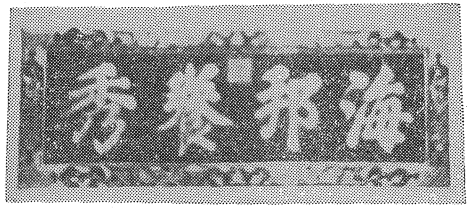
「琉球国ハ、南海ノ勝地ニシテ、三韓ノ秀ヲ鍾メ、大明ヲ以テ輔車ト為シ、日域ヲ以テ唇歯ト為シ、此ノ二中間ニ湧出スル蓬莱島ナリ。舟楫ヲ以テ万国ノ津梁ト為シ、異産至宝、十方刹地ニ充満ス」。（下略）

右のように、気宇も宏大、文章も雄渾であるが、原文は漢文で綴られている。

一三九二年察度王代に、南支福建の閩人三十六姓が帰化し、以後外交文書等の作製に従事し、漢文化の移入消化に尽力するようになる。三昧線はこれらの人たちによって将来され、さらに百七十年後に堺港に上陸し、日本音楽の大変革が行なわれる機運が作られる。また、同年を起点として、支那留学生制度が発足し、廃藩置県に至るまで約五百年間にわたり、百人もの留学生が派遣された。彼らは明清時代の大学（国子監）に入学し、三、四年ないし六、七年勉学を続けた。帰朝後の彼らによって、沖縄の政治上にあるいは教育上に及ぼされた功績は非常に大きなものであった。このように、十四世紀においてすでに大学留学生が派遣できる程高度な、当時の文化的教養民度などに思を致し、また、上記のような漢文化との種々の接触状況から推定すれば、漢字漢学の伝来の起源は、おそらく一千年以前に遡るであろう、と考えられる。かくして、和学が主に僧侶の手によって行なわれたのに対し、漢学教育は主に帰化人と官生（留学生）の手によって行なわれたのであろう。

一六〇〇年頃、帰化人の後裔蔡堅が孔子の絵像を中国から将来し、久米村の士大夫が輪番で奉祀し、聖廟建立の端緒を作った。次いで一六七二年城間親方金正春が、摂政羽地按司朝秀に願い出て、翌々年久米村に聖廟が建てられ、一七一八年には名護親方程順則の建議により、廟内に明倫堂が附設され、沖縄における公教育機関が始めて設けられた。ただし、この施設は帰化人系の人たち専用のものであった。

一七九八年尚温王により、「国学」と称する大学が首里城下に創設された。その時、王は「国学訓飾士論」を公布し、その中で「今



尚温王自筆扁額

ヨリ以後、名門ト寒陋トヲ論ゼズ、若シ行ヲ積ミ学ヲ勤メ、国ノ為ニ猷ヲ宣ブル者アラバ、即チ布衣ノ子弟トイヘドモ、我将ニ挙ゲテ之ヲ用ヒントス。或ハ検ヲ敗リ閑ヲ踰エ、明訓ニ遵ハザル者ハ、貴族ノ子弟トイヘドモ、我将ニ退ケテ去ラシメン。」と厳しく宣言して、学校教育の尊厳をうたい上げた。越えて一八〇一年、王は自筆「海邦養秀」の扁額を講堂に掲げ、大学教育の指標とした。その実物は第二次大戦で焼失し、復元が国学発祥の地首里高校に蔵されている。国学の課程は、講談課程と官話詩文課程に分かれ、前者は四書五経を主とし、それに唐詩合解、呈文、啓文、録文、論文などが加えられ、後者は、当時の中国標準語である官話と詩文を主体にした。修業年限は、試験制度により十七・八歳で入学し、最長八か年であった。定員は、講談が二百六十名、官話詩文は四十名であった。国学の創立と同時に、その下級の中等教育機関として「平等学校」が首里の三地域に設けられ、その卒業生に国学への入学資格を与えることにした。一八二四年から一八三五年にかけて、初等教育機関として「村学校」が首里、泊、那覇に設けられた。なお、地方農村には、一七〇〇年頃から地方事務職養成機関として「筆算稽古所」が設けられていた。

右の学校制度は、明治十二年の廃藩置県の際に廃され、新しい学校制度として、師範学校、中学校、小学校が創設された。高等専門学校、大学の設置については、明治大正期以来県民の強い要請があったが、終戦に至るまで遂に実限しなかった。戦後は、琉球政府立琉球大学、私立沖縄国際大学、私立沖縄大学、私立キリスト教短期大学、私立嘉数学園女子短期大学が創設された。また、高等学校は全日・定時計六十二校、中学校は一五二校、小学校は二四四校となっている。教職員は、大学六二〇人、高等学校二、九〇五人、中学校は三、四二二人、小学校は四、九〇七人であり、そのほとんど全員が沖縄県人をもってあてられている。

二　廃藩以前の教育

第二尚氏第三代の尚真王は、五十年間の長期にわたる治政において、首里城を修築して壮麗にし、円覚寺等の仏寺を建立し、教育を奨励し、進貢貿易を盛んにし、殉死を禁じ、六色のハチマキ（冠）を制定して身分を確立し、一五二六年には、地方諸間切の按司（領主）を首里城下に集結し、一連の平和政策を完了した。徳川幕府の「元和偃武」に先立つこと約百年であった。

ところが、一六〇九年薩摩藩は、「琉球が朝鮮征伐に協力せず、軍費醵出にも応じない」ということを口実にして侵寇した。沖縄は全島兵火に荒らされ、尚寧王は虜囚の辱を受け、三司官（大臣）謝名親方鄭迥は斬罪にされた。敗戦後、住民は人心阻喪し、経済は疲病の極に達した。このような大難に際し、その復興救済に渾身の努力を傾けた人々の代表は、羽地按司朝秀と具志頭親方蔡温の両名である。彼らは何れも政治家ではあるが、社会教育に尽瘁し、人心作興

に尽した功績は大きい。教育人物伝はこの人たちを起点としたい。

羽地朝秀（ハネジ）——彼のことを羽地按司朝秀と言う場合、按司は官位であり、称号ともなる。すなわち、彼は羽地間切（マギリ）(村)の総地頭職であり、それに見合う称号である。向象賢（ショウシンヨウケン）は彼の唐名であり、主としてそれは、中国との外交事務に使用された。彼は一六五〇年沖縄の正史「中山世鑑」を著した。和漢混淆体の仮字交り文である。その世鑑の総論並びに本論の中で、従来あったと推定される「為朝伝説」を採り上げ、為朝と舜天王との父子関係を敷衍詳説して、郷土歴史の体系を整備し、人心の作興に活用した。また、摂政（総理大臣の地位）の要職に上り、「羽地按司仕置」を作り、社会生活の規律と秩序を厳しく宣明した。その仕置の中で「竊かに帷れば此の国の生初は、日本より渡りたる儀、疑御座無く候。然れば末世の今に天地山川五形鳥獣草木の名に至る迄、皆通達せり。然りといえども、言葉の余り相違するは、遠国の上、久しく通融絶えたる故なり。」と述べ、日琉同祖論を説いている。

識名盛命（ナキナ）——彼は一七一一年、方言古語辞典「混効験集」を著し、古謡集「おもろさうし」等の意義解明に便し、教育上にも寄与した。青年時代、僧侶でなければ他国修業が許されなかったため、僧形にやつして京都に上り、源氏物語や伊勢物語等の古典を学び、混効験集の資料に使った。また、雅文集「思出草」を書いている。それは「公けのみことをうけて大和に渡りし詞」から始まり「御暇たうべて帰帆を催す詞」に終わる旅行記である。彼は官途も、尚貞尚益二代に仕え、三司官の重職を勤めた。

具志頭文若（グシチャンジャク）——彼は蔡温という唐名で一般に呼ばれている。また俗に、具志頭親方（オヤカタ）と称される。親方は王子、按司に次ぎ、第三位の称号である。彼は三司官の繁瑣な要職を勤めながら、御教条、独物語外六種の候文体の書と、家言録、居家必覧、醒夢要論外十種の漢文体の書を著している。「御教条」は社会道徳、実践倫理の問題を取り扱い、士族の職責、地頭と農民、商工人の義務、孝道、夫婦の関係、嫁姑の道、子弟教育、相互扶助、使用人に対する道、酒の戒、迷信打破、情操教育、国法遵守等について詳説されている。この書は、廃藩後に至るまで約百五十年間も、地方の筆算稽古所や一般社会教育の教科書として使用された。「独物語」は要路の人への教戒であり、「当国政道の儀は夜昼入精し、たとえば朽手縄にて馬を馳せ候儀と同断」と戒めている。彼にはまた、候文体の自叙伝がある。その中に、聖賢の書はすべて誠意治国が根本であること、学問の道は卑近から始めるべきこと、などの教を敷衍している。この書は彼が七十六歳の高齢で記したものである。

名護寵文（ナゴ）——彼は唐名の程順則で知られ、蔡温と共に帰化人系の人物である。俗に名護親方と尊称される。彼は二十二歳（一六八五）の時中国に渡り、福建の鴻儒陳元輔につき、七か年間朱子学と詩文を学んだ。帰朝後、明倫堂を創建し、その館長を勤め、郷党の子弟教育に当たった。また、尚益王の侍講を勤め、名護間切総地頭職を兼ねた。一七一四年将軍家継の慶賀使与邦城王子の掌翰使として江戸へ赴いた。その折、新井白石、荻生徂徠、室鳩巣と親しく会見し、学問を語り沖縄事情を伝えた。彼が中国から将来した「六論衍義」

文寵護名

馬琴の「椿説弓張月」が生まれる機縁を作った。程順則は郷土史上随一の碩学として崇められているが、実践道徳家がその本領であり、「名護聖人」という尊称がそれを如実に表わしている。同時代に生を享けた、温厚篤実の儒者程順則と厳厲鉄血の政治家蔡温の、性格を象徴する次の八六調の琉歌が、人口に膾炙されている。

誉まれそしられや　世の中の習ひ
沙汰も無ん者の　何役立ちゅが（蔡温）

誉められも好かぬ　そしられも好かぬ
浮世離安く　渡り欲しゃの（程順則）

豊平親方良全――唐名を馬執宏と称する。一八一五年の官生（中国留学生）に選ばれて渡清し、七か年の学業を終えて帰国した。その後、国学官話詩文師匠、同講談師匠、尚育王侍講、国学奉行、所帯方物奉行などを歴任した。彼は教育者がその本職であったが、かたわら、竹西と号して書を良くし、容斎と号して画を良くした。性格は清廉潔白で、顕職を歴任しながら、領地の下賜を辞退し続けたと伝えられる。

津波古親方政正――彼は唐名を東国興と称した。一八四〇年尚育王代の官生である。七か年の留学を終えて帰朝し、国学師匠、尚泰王侍講、進貢正使などを勤め上げた。彼は北京留学中、儒学の研究に精進するのみならず、北京滞在中外国人との接触を計り、世界の大勢を把握することに努めた。明治維新に際し、特に琉球の廃藩置県、大政奉還の問題が、その歴史的事情のために沸騰混乱の極に達した。藩中の世論が白黒二党に分裂して抗争した。白党は一名開化党と称され、三司官宜湾朝保らがその中心であった。黒党は一名頑古党と称され、三司官亀川盛武らが中心であった。宜湾は桂園派の歌人で、和学派である。亀川は漢詩文に巧みで、漢学派である。津波古は漢学出身でありながら、世界事情に明るく、白黒二党の間に立って情勢を好転に導いた。王の侍講として側近で助言し得たことも幸し、廃藩置県を無血で成し遂げ得たことは、彼の力に負うところが大きい。

三　明治大正期の教育

沖縄の廃藩置県が行なわれたのは、明治十二年（一八七九）三月である。琉球藩が沖縄県となり、国学以下総べての旧制教育機関も廃止になった。翌十三年師範学校と中学校が設立された。また小学校が、首里に三校、島尻に十校、伊江島に一校設けられ、毎年増設され、明治十八年までに四十三校に達した。

十二年任命された初代県令鍋島真杉が辞任し、十四年に二代目上杉茂憲が赴任した。上杉県令は特に熱意を教育に傾け、学校増設を推進した。また、県費留学生制度を創設し、その第一回生の中か

ら、後年、県会議長や代議士になった高嶺朝教、県会議長や新聞社長になった大田朝敷、県農林技師となり農政に尽した謝花昇らを出した。しかし何故か、上杉県令は十六年免職となった。沖縄を去るに臨み、奨学資金三千円を寄附したが、それも使途不明のまま県費留学生は明治末年に至るまで停止された。

新制の師範学校は、明治十三年六月十九日に職制が公布され、翌七月開校した。速成科第一回の卒業生が十四年五月に、初等科第一回の卒業生が十五年七月に、中等科第一回の卒業生が十九年二月に出た。速成科は卒業生累計二十名出して十五年七月廃止、初等科は卒業生累計四十二名を出して十九年九月打切られた。次いで、尋常師範学校という名称となり、その第一回卒業生が出たのは、二十一年四月である。十三年十二月初版の、方言と普通語の対訳教科書「沖縄対話」の改訂再版が、十五年十月に出されている。その編集にあたった者は、師範卒業生の仲本政世だと言われている。やはりその頃の卒業生原国政勝が、県官に協力した故を以って頑古党の指弾にあい、逆に彼らを警察に逮捕させる、というトラブルも起った。原国は後年南端の喜屋武小学校長となった。二十四年の卒業生平良清助（沖縄群島政府知事平良辰雄の父）が、三十七年頃郷里国頭郡の津波小学校長となったが、郡長の圧政と差別待遇に憤慨し、恩給年限数月間際に退職するという軋轢葛藤もあった由、その嫡孫浩氏の記録にある。なお、廃藩置県直後は、旧人は野に隠れ、新人は若く、明治年間における学校長は、国頭、先島、離島の僻遠地を除き、首里、那覇、近郷の村々はほとんど県外人を以てあてられていた由、八十九歳の老教育者喜納政常氏の談話である。

明治十三年十二月首里中学校が創設され、次いで沖縄中学校と改称され、明治四十四年に第二中学校創立にあたり、沖縄県立第一中学校と改められた、沖縄中学校は、従来必修であった英語科が、二十七年四月から随意科目に決定された。沖縄で外国語を必修にするのは時機尚早だ、というのが学校側の理由であった。それに反発して、生徒たちがストライキを起し、学務課長兼務の児玉校長を排斥した、喧嘩両成敗で、校長は台湾に転任させられ、首謀者の生徒数人は退学させられた。その中に後年の、海軍少将代議士の漢那憲和（海大卒）、図書館長で沖縄学の開拓者伊波普猷（東大卒）、沖縄県病院長那覇市長代議士の金城紀光（東大卒）、台湾総督府勅任技師那覇市長の照屋宏（京大卒）らがいる。女子教育は、明治三十三年六月私立高等女学校が師範学校内に附設され、三十六年県立となり、明治四十年に至り独立校となった。次に、明治大正期における、教育界の代表的人物若干名を挙げる。

伊波普猷

伊波普猷――彼は前記一中ストライキ事件の主謀者一人である。退学されて苦辛の末、三高を経て東大文学部言語学科を卒業した。明治四十三年県立図書館初代館長となり、郷土研究と社会教育に献身した。多種多様の著作の中で、古琉球、琉球の五偉人、沖縄女性史、校訂おもろさうし、おもろ選釈、琉球戯曲集、琉球戯曲辞典、琉球語の係結について、P音考、孤島

苦の琉球史、琉球古今記なと極めて広範にわたる。特に、沖縄の万葉集と言われる「おもろさうし」の研究は著名である。難解で永年尚家の書庫の奥に隠され、全く忘られていた古謡集「おもろさうし」を発掘し、その研究に尽瘁した。彼の力によって、琉球方言、琉球史、民族移動の解明に大進展をもたらした。一九四七年七十二歳で逝去したが、生涯を通じて、郷土の学術的研究にたずさわると同時に、郷土愛に基く啓蒙運動、社会教育にも心魂を傾け、講演行脚に席の暖まる暇が無かった。彼の研究と由縁の深い浦添城趾の墓側に建てられた顕彰碑に、次のような文章が刻まれている。

彼ほど沖縄を識った人はいない
彼ほど沖縄を愛した人はいない
彼ほど沖縄を憂えた人はいない

東恩納寛惇——五高を経て東大文学部史学科を卒えた。その後、東京府立一中教諭、都立大学教授、拓殖大学教授、同附属一高校長を歴任し、一生涯教育者として過し、一九六三年八十歳で世を終えた。東大在学中、吉田東伍博士の「大日本地名辞書」の編集に参加し、彼の分担による琉球編が後年「南島風土記」として出版され、沖縄郷土研究者の貴重な伴侶となっている。その外、琉球人名考、童景集、六論術義伝、沖縄渉外史等がある。「黎明期の海外交通史」は、昭和七年から数年在外研究員として、東南アジア滞在中の成果に依るものである。特にこの著の史料の中心となったものは、十四世紀以降の琉球国外交文書「歴代宝案」である。

高良隣徳——彼は小禄村の出身で、明治三十二年東京高師数学科を卒え、明治四十四年県立第二中学校創設の時、その初代校長となった。二中は創立の翌年校舎を新築し、首里城内から嘉手納村に移転した。同村は市街から三十キロの遠地であり、交通機関の無い当時の困難な事情のため、入学志願者年々減少し、中退者も年々増加し、学校経営が困難に落ち入った。校長高良は絶えず那覇移転を要請したが容れられず、遂に大正四年退職した。時の大昧知事は廃校を立案したが、学校、父兄会、中頭郡民大会の反対にあい、ついに実行できなかった。折衷案として知事は、国頭中頭両農校を合併して二中敷地内に移転し、中農併置校とし、校長職を農林学校長兼務にした。二中生徒はそれに反対してストライキを起し、農林生徒と乱闘するまでに至った。校長退職後、高良は間もなく県会議員に当選し、次いで議長に選ばれた。彼は二中分離問題を絶えず推進し、大正八年に至り那覇市に移転することができた。

東恩納寛惇

宮城鉄夫——沖縄中学を出て上京、正則英語学校に学び、明治三十九年に「少年よ大志を抱け」の校訓で有名な札幌農学校を卒業した。次いで帰郷し、国頭農学校に奉職し、大正六年同農学校長となった。校長時代に県農林技師を兼務し「糖業意見書」を知事に提出し、沖縄糖業改良の急務を説いた。同九年台南製糖社農務課長に転じ、糖業改良策を実践に移した。栽培の改善、牛馬耕、農地改良、肥培管理等に科学理論を応用し、特に台湾から大茎種を移入し、収

量増大に一新紀元を樹立した。後同会社取締役となり、昭和九年五十七歳で他界した。

渡嘉敷唯功——明治二十七年沖縄師範学校を卒業し、三十五年島尻郡東風平小学校長となった。沖縄人で小学校長になった嚆矢である。大里、真和志小学校長を経て、三十九年兼城間切立糸満水産学校に転じた。彼は他県の水産教育の情況をつぶさに視察し、学校経営を拡充強化し、四十二年県立に昇格させた。大正元年沖縄県視学になった。沖縄人の県視学も彼が最初である。青年時から漢詩漢文を得意としていたので、大正後期から昭和中期にかけ、県師範学校の漢文科教師を勤めた。一九五三年八十歳で世を去った。

東恩納寛文——明治二十六年沖縄師範学校を卒業し、笈を負うて上京し、力行の末三十三年早大の前身東京法律専門学校を卒えた。先ず名古屋で教職に就き、帰郷して那覇市甲辰小学校長となり、次いで、大正八年頃那覇市視学に転じ、大正十年兼任那覇市立実科高女校長となり、同十一年那覇尋常高等小学校長に転じ、昭和初期まで勤続した。彼は前記の東京都立大教授東恩納寛惇の長兄に当たり、武道唐手を良くし、温容長者の風格が人に慕われた。

四　昭和期の教育

この稿における昭和期は、紙幅その他のつごうにより、終戦までで打ち切り、人物も原則として、それ以前に活躍した人に限ることにした。

昭和期は動乱の時代であった。中央の五・一五事件や二・二六事件の煽りを食って、沖縄もやはり動揺した。国家主義教育が強化されると共に、社会主義運動も潜行し、教員赤化事件が継起し、三回にわたり大検挙が行なわれた。教育思潮の面でも大正期を受けて、作業主義教育、自学自習教育、創造主義教育、自由主義教育、ダルトルプランなど、新教育論も活発であった。文化面においては、明治期以来の皇民化運動の一環として、沖縄郷土文化否定論が底流として流れていた。昭和十四年民芸研究家柳宗悦一行が来島し、沖縄文化礼讃、沖縄方言尊重論を提唱し、それに反対する県当局との間に激烈な応酬が行なわれ、教育社会、一般社会を大きくゆさぶった。

志喜屋孝信——沖縄中学を経て、明治四十一年広島高師数学科を卒業した。熊本中学教諭、沖縄二中教諭となり、大正十三年二中校長に昇進した。彼は教育愛に燃え、性格は大膽にして細心、加うるに縦横の才略を以て職員を統率し、熱誠を以て生徒の指導に当った。そのニックネームの「ライオン」がそれを象徴している。在任二十五年の間に学校教育は大きく向上し、その卒業生の上級学校進学者が断然他校を圧し、その名声が沖縄の天地にあまねかった。昭和十一年勇退し、アメリカ移民の成功者中谷善英と提携し、私立開南中学校を創立した。これは沖縄における私立中学の濫觴である。

志喜屋孝信

もっとも、私立養秀中学校が明治三十八年開校されたが、経営難のため五か年後廃校されている。彼は、終戦直後初代沖縄民政府知事となり、アメリカ軍政府の信認を得

て、焼土と化した沖縄全島の復興と民生に挺身し、大きな功績を挙げた。一九五〇年(昭和二十五年)琉球大学創設と共に、初代学長に選ばれた。学長時代の功労が、大学附属「志喜屋図書館」の名称に残されている。なお、彼の提唱により昭和九年、財団法人沖縄奨学会が、沖縄の各界有力者四十数人の出資を得て創立され、多数の薄資秀才が養成された。一九五五年死去、七十二歳。

胡屋朝賞——明治四十三年広島高師英語科卒業し、鹿児島二中、沖縄二中、沖縄一中に奉職し、昭和七年一中校長となった。同十七年退任まで二十八年間も一中に勤続し、学校の発展に尽瘁した。彼は温厚篤実な良教育者の典型で、多忙な教員生活の間に孜々として研究を続け、高等教員検定試験(旧制高校教授資格)に合格して世を驚かした。戦後、二代目琉球大学長となり、大学の拡張整備に尽瘁した。

川平朝令——明治四十三年東京高師地歴科を卒え、四国地方の学校を経て沖縄一高女兼女師教諭となり、昭和六年両校兼任校長となった。女子師範学校長は明治大正昭和を通じて県出身は唯一であり、男子師範学校長は終戦に至るまで、遂に生まれなかった。

山城篤男——明治四十五年広島高師英語科を卒え、鹿児島女師、沖縄二中を経て、昭和三年三中創立に当たり初代校長となり、同十一年二中校長に転じ、終戦に及んだ。醇厚篤実、いかなる時も怒らずあせらず、春風和日の中で経営を進め事務を処理する、という人柄であった。終戦後、沖縄民政府文教部長となり、一九五〇年沖縄群島政府創立の時、副知事となった。一九六一年私立沖縄大学創立に当たり、その初代学長となった。一九六二年私立興南高等学校創立に当たり初代校長となった。一九六七年死去、八十歳。

島袋全発——七高を経て大正三年京都大学を卒業した。その後、那覇市役所に勤め、大正十二年那覇市立実科高等女学校長となり、昭和三年県立に移管されて引き続き校長となり、昭和十年沖縄県立図書館長に転じた。郷土研究に熱心で、那覇変遷記、沖縄童謡集、島袋全発著作集の著がある。昭和七年から十年間にわたり、おもろ研究会を主宰し、おもろの展読法を発見した。一九五三年死去、六十五歳。

仲原善忠——大正六年広島高師地歴科を卒え、静岡師範、鹿児島師範教諭を経て、旧制成城高等学校教授、明治大学講師を勤めた。著書に、久米島史話、おもろ評釈、外間守善共著の校本おもろさうしとおもろ辞典総索引がある。一九六四年死去、七十六歳。

大浜信泉——明治二十四年沖縄の最南端八重山群島石垣島に生まれた。沖縄師範学校を故あって退学して上京、郁文館中学校を修了した。大正三年早稲田大学に入学し、同八年同大学英法科を卒業した。三井物産に入社。弁護士試験に合格、原嘉道法律事務所勤務を経て、大正十一年母校早大の講師、同十四年に助教授となり、商法研究のためイギリス、ドイツ、フランスへ留学した。昭和十二年教授となり、同二十年法学部長となった。同二十三年日本学術会議会員となり、同会議を代表してアメリカ各大学を視察した。二十九年六代目早稲田大学総長に選挙された。三十一年正月宮中講書始の式で、「株式会社制度の功罪について」という題で御進講をした。三十二年ミシガン大学から名誉法学博士号を贈られ、また、日本学士院会員となった。三十三年早大総長再選。三十六年南方同胞援護会長に任じられた。三十七年早大総長三選。同年日本学生野球協会会長に選ばれ。四十六年日本プロ野球コミッショナーに就任した。終戦以来絶えず、沖縄の日本復帰運動に挺身し、数度にわたり渡米し、大統領外政府要路、民間要人に会い、日本復帰の実現を訴えた。昭和四十七年五月十五日沖縄の復帰がいよいよ実現する運びになり、その記念として昭和五十年度に行なわれる「沖縄国際海洋博覧会協会長」に就任した。

大浜信泉

島袋源一郎——明治三十六年沖縄県師範学校を卒業し、大正初年国頭郡謝花小学校長となった。大正九年県社会教育主事になり、郡視学、県視学を歴任し、昭和二年名護尋常高等小学校長となった。その後県教育会主事となり、県教育会の事業として「沖縄郷土博物館」を首里城内に創設した。郷土文化に熱愛を持つ彼は、ほとんど独力を以て推進し、館所蔵の品目は、紅型染、陶器、漆器、古楽器、書画、武具、民具など、広範にわたり貴重なものであったが、残念にも第二次大戦ですべて烏有に帰して終った。著書に国頭郡誌、琉球百話、伝説補遺沖縄歴史等がある。一九四二年死去、五十七歳。

武富セツ

武富セツ——明治十六年、廃藩置県で職禄を失った、首里の貧窮士族の家に生まれた。明治三十三年沖縄県師範学校女子講習科第二回修了生である。一旦嫁いで上京したが、数か月で夫に死別し、人生の悲運に見舞われた。三十九年甲種講習科を修了し、本科正教員の免状を授与された。その後、首里尋常高等小学校、那覇泊小学校を経て、大正八年沖縄県女子師範学校訓導に転じ、昭和四年に県立一高女教諭、同五年女師教諭となった。戦後は首里高等学校教諭となり、同三十年同校教諭を退職した。十七歳から七十三歳まで、五十六年の長い教員生活であった。自己に厳しく他人にやさしい女丈夫であったその居間に「悲しみのある所に聖地あり」というワイルドの言が掲げられていた。その生涯と性情を象徴している感がする。教職の傍、戦後の混乱期に、那覇市議、民政議会議員、沖縄婦人連合会長を勤めた。一九六八年死去、八十六歳。

徳元八一——明治三十九年師範学校を卒業した。若くして上京し、力行して大正二年早大政経科を卒えた。帰郷して玉城尋常高等小学校長となり、次いで県社会教育主事に転じ、県会議員に当選し、戦後は十数年にわたり沖縄PTA連合会長を勤めた。一九七一年死去、八十六歳。

当山正堅——明治四十一年師範学校を卒業した。大正二年宜名真小学校長時代、茅打ちばんた「戻る道」の開墾に挺身した。その後、宮古郡視学、島尻郡視学を経て、十二年県視学となった。十三年那覇尋常高等小学校に転じ、戦後沖縄民政府文化部長を勤め、文化の復興に尽瘁した。一九五三年死去、六十八歳。

(沖縄文化協会長)